Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

913.361
S4
v.2 II

913.361-g4-Y2
12009012716 60

吉澤義則著

校訂 源氏物語新釋

巻一

国立国会図書館
27.5.13
267333

凡例

一本書は本文篇六冊、附卷一冊から成る。

一本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩樣に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の俤をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一對校の記號としては黑點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黑點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

いろ〳〵の紙なるふみどもを（中將）引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ〳〵の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが、河内本では

いろ〳〵のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お・ぼし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのである。

一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來の句讀を改めた箇所が尠くない。

一湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した。例へば本書に

あなくるし　むつまじう

とあるが如きは、もと底本に「あなくるし」「むつまじう」などとあつたのを、河

内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものがないではない。それは附卷の用語索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一附卷は源氏物語の用語の索引で、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、啻に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著者識

卷一所收目次

桐壺　一
帚木　三三
空蟬　九三
夕顔　一〇七
若紫　一六九
末摘花　二二一
紅葉賀　二七三
花宴　三〇九
葵　三二三
賢木　三六三
花散里　四四五

此巻の中に源氏の君誕生より十二歳の事まで見えたり。此巻の末の詞におとなになり給ひてのちとあり。其詞に十三四五歳の事こもりて、次の帚木の巻は十六歳と見えたり。

いづれの御時にか 何帝の御代であつたか。此物語では桐壺帝と申す。

女御更衣 女御に次ぐ天子の御妃。后に次ぐ御妃。

いとやんごとなき云々 さう高い人。貴な身分ではない人で羽振のよい人。

めざましきものに けしからぬ奴だと。

下臈 地位の低い。

人の心を動かし 他の女御更衣達に氣を揉ませ。

積り 堆積。

あつしく 病氣が重って行って。

いよ〳〵飽かず 一入物足りなく又不便なものにお思ひになつて。

世の例にも 世間の引合にも出されさうなされ方。

上達部 公卿。

上人 殿上人。

あいなく 大人氣ないことに何もならないことに譯もなく。

目をそばめつつ 目をそらしそらして。

まばゆき まぶしくて見てゐられないほどの。

あぢきなう おもしろくないことに。つまらないことに。

人の御覺え 「人」は更衣をさすのだが、かかる場合は「人の御覺え」で一の熟した詞と見る。

楊貴妃の例 唐の玄宗皇帝が楊貴妃に溺れて安祿山の亂を生じた事。その先例などを起しさうになつてゆくので。

いづれの御時にか。女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやんごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり。はじめより、我はと思ひあがり給へる御かたゞ〳〵、めざましきものに貶しめ妬み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕につけても、人の心をうごかし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなるものにおぼして、人の譏りをもえ憚からせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目をそばめつつ、いとまばゆき、人の御覺えなり。もろこしにも、斯かる事の起りにこそ世も亂れあしかりけれと、やう〳〵天の下にもあぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきをたのみにて交らひ給ふ。父の大納言

いにしへの 昔氣質のおくゆかしいところのある身分の人。

親打具し 兩親共揃つて居て、さしあたり富貴繁昌と世間から思はれてゐる女御更衣達にも劣らない位に諸事を取りまかなはれたが。

取立てて これといふしつかりした世話役の人がないから、何かの折には矢張頼りなくて心細い有樣である。

玉の男御子 玉の如き皇子。これが即ち後の光源氏である。

いつしかと 帝は皇子を早く見たいと待遠がり給うて。

兒の御かたち 御容貌、御器量。「兒の」は例の「人の御覺え」の類である。

一の御子 第一皇子。後に朱雀院。

右大臣の女御 右大臣の御女の女御の意。弘徽殿女御と申す。

儲君の皇太子 源氏の御美しさ。

この御匂ひ 「匂ひ」は顏全體からうける美しい感じ。

大方の云々 第一皇子として世間並に御寵愛になるだけで。

私物 秘藏兒。

上宮仕 一番大切な物。身分低い女官は局を賜はらず常に御所に侍して御用を勤めること。之を上宮仕といふ。

上楽めかしけれど 貴人らしくはあるが。

は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親打具しさしあたりて世の覺え花やかなる御かたがたにも劣らず何事の儀式をもてなし給ひけれど、取立てはかばかしき御後見しなければ、事とある時は、なほよりどころなく心細げなり。

前の世にも御契りや深かりけむ、世に珍らしき程美しい玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、珍らかなる、兒の御かたちなり。一の御子は右大臣の女御の御腹にて、母方の貴族が有つてよせおもく、疑ひなき儲君と世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂ひには、並び給ふべくもあらざりければ、皇太子にといふ意味合ひで大事にする大方のやんごとなき御思ひにて、源氏この君をば、私物におぼほしかしづき給ふ事限りなし。（母君は）もとくはじめより、おしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。世間から尊重されて覺えいとやんごとなく、上楽めかしけれど、

わりなく 帝が無闇に更衣をお側に引きつけてお置きになる結果。

故ある 一趣向ある機會々々には。

やがて 更衣を局に退出させずにそのままお側にお置きになる。

あながちにお前去らず 強ひてお側を離れさせずにお置きになつたので、自然身分の輕い女官のやうにも見えたが。即ち上宮仕のやうに。

この御子心ことに 源氏。更衣を格別大切にされる。

坊 春宮坊。皇太子にもわるくすると源氏がすわるのだらう。

一の御子の女御 第一皇子の御母である女御。即ち弘徽殿。

此の御方 弘徽殿。

かしこき御蔭 帝のおそれおほい御庇護。

疵を求め 後撰雜二高津内親王一直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ

御局 みつぼねと讀む。曹司といふのも同じ。桐壺宮中五舍の一で、清涼殿の東北にある。庭に桐が植ゑてあるから名づける。淑景舍といふ。

わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御音樂あそびのをりをり、何事にも、故ある事のふしふしには、更衣を最先にお召寄せになるまづまうのぼらせ給ふ。ある時には大殿籠りすぐして、やがてさぶらはせ給ひなんど、あながちにお前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕きかたにも見えしを、この御子うまれ給ひてのちは、いと心ことにおもほしおきてたれば、坊にも、ようせずば、この御子の居給ふべきなんめりと一のみこの女御はおぼし疑へり。他の女御人よりさきに參り給ひて、更衣遠帝の皇后としての御寵愛は一通りでなくやんごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、此の御方の御いさめをのみぞ、なほ気にかけて煩はしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。かしこき御蔭苦情嫉妬をば頼み聞えながら、おとしめ疵を求め給ふ人は多く、更衣自身はわが身はかよわく、ものはかなき有樣にて、御寵愛を受けぬがきしぶやうな物思ひをされたなか〳〵なる物思ひをぞし給ふ。

御局は桐壺なり。他の女御更衣達の住む局々の前を御通過になつてあまたの御かた〳〵を過ぎさせ給ひ

御前渡　局の前を通る事。

打橋　廊下の切目にかける板の橋で取外しの出來るもの。

渡殿　殿舍を連ねる廊下。

まさなき　お話にならぬ。

えさらぬ　是非通らねばならぬ。

馬道　めだうと讀む。殿舍中の板敷の中廊下。

こなたかなた　兩方でしめし合して馬道の兩端にある戸を閉ぢて。

煩はせいとどあはれと　一入不便と思召して。困らせ。

後涼殿　別殿ともいふ。清涼殿の西にある。

上局　常に住む局の外に、清涼殿に近い所に別に休息所として設けた局をいふ。

その慢み　今まで後涼殿に居つた更衣(名はない)の恨みはまして慰めるすべもない。

この御子　源氏。

御袴着　大凡三四歲から七八歲までに行はれる。著袴親があつて、親戚中尊貴で德望ある者が任じ、袴の腰を結ぶ。

一の宮　第一皇子。後に朱雀院。

奉りしに式に　袴をお召になつた儀式に劣らぬ位に。

内藏寮　納殿の物をつくして、中務省の被管。金銀珠玉寶器、錦綾絹匹、諸蕃貢獻の珍奇、年料供御衣服、別勅の用物等を管理する。

納殿　宜陽殿にあつて累代の御物を納める。

つつ、ひまなき御前渡に、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。更衣が淸涼殿にまうのぼり給ふにも、あまりうちしきる折々は、打渡、渡殿、ここかしこの道に、汚物を撒きちらしなどあやしきわざをしつつ、御送迎の人の衣の裾堪へがたう、まさなき事ども正氣の沙汰でないこと多あり。又ある時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、問のわるい目をさせはしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。更衣は何事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、更衣がいといたう思ひわびたるを、帝はいとどあはれと御覽じて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司を、ほかに移させ給ひて、上局に桐壺更衣に賜はす。その恨み、ましてやらむかたなし。

この御子三つになり給ふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りし盛大にに劣らず、內藏寮、納殿の物をつくして、淸涼殿いみじうせさせ給ふ。それにつけても世の譏りのみ多かれど、源氏この御子の、次第に成人されるおよすげもておはする御容姿氣質かたち心ばへ、ありがたく

えそねみあへ　源氏を憎みぬく事が出來なさらぬ。

物の心知り給ふ　物の道理を辨へた人は、こんな美しいお方も人間界に生れるものであつたと、呆れる程驚いて居られる。

みやすんどころ　御息所。女御更衣等で皇子を生み奉つた方。ここは桐壺更衣の事。

まかンでなむと　お里に下つて養生しようとなさるが、帝はどうしてもお暇を下さらぬ。

日々におもりて　一日ごとに病氣が重くなつて。

ただ五六日の　ほんの五六日のうちにひどく衰弱するので。

あるまじき恥もこそ　更衣は嫉妬を受けて居る身であるから、途中人からとんでもない恥でも受けはせぬかと用心して。

御子　源氏を禁中に殘して。

御覽じだに　せめてお見送だけでもと思つても、それさへお出來にならぬ氣がかりさを。

あるかなきかに　正體もない有樣に消え入つて。「消え入る」は人心地もない事。

來し方行末　帝は前後のお辨へもなく。

珍らしき・まで見え給ふを、えそねみあへ給はず、物の心知り給ふ・人は、「かかる人も世にいでおはするものなりけり」と、あさましきまで目をおどろかし給ふ。

源氏三歲

その年の夏、みやすんどころ、はかなき心地に煩ひて、里にまかン・でなむとし給ふを、暇さらに許させ給はず、禁中で養生せよ年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れつこになつて、「なほ暫し試みよ」とのみ宣はするに、日々におもり給ひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、更衣の母君泣く〳〵奏して、里にまかン・でさせ奉り給ふ。里下りの折かかる折にも、あるまじき恥もこそと更衣の用意深いさま心づかひして、御子をばとどめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。禁中に限りあれば、さのみもえとどめさせ給はず、更衣の退出を御覽じだに送らぬ覺束なさを、帝はいふ方なく・思・おぼさる。更衣のさまいと匂ひやかに美しげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれと物を・思ひしみながら、言に詞に出してもいひきらずいでても聞えやらず、あるかなきかに消え入りつつ物し給ふを御覽ずるに、來しかた行

我かの氣色にか 正體もない有樣。帝はどうしたものかと途方におくれになる。

いかさまにか 輦車の宣旨 輦車は輿に輪をかけて手で引く車。太子、老親王大臣、僧正等は輦車に乘つて宮門を出入する事を勅許される事がある。

又入らせ給ひては 更衣が御暇乞ひに。

さりとも 重態でも一人里に歸り行く事は出來まい。

限りとて 今を限りと別れゆく死出の旅路の悲しさにつけても、生きて居たいものでございます。「いかまほし」は生と行とを掛けていつた詞で道の緣語。

いと斯く思う給へましかば 斯樣な事にならうと兼て思ひましたら、かうした契りも結ぶべきではございませぬでした。

斯くながらこのまま 此處で、

今日始むべき祈りども 今日始める驗定の祈禱、それは効驗あるべき者が、拜命して居るのでございますが、その祈禱を今晩から始めるからとせき立てるので。

さるべき人々 然るべき人々が擔當してゐるその祈りどもを。

わりなく たまらなく思召しながらも、更衣を退出おさせなされた。

末思召されず、（帝御悲嘆のさま）よろづの事を泣く〳〵契り宣はすれど、御いらへもえ聞え給はず、（目つきもだるさうで）まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我かの氣色にて臥したれば、いかさまにかとおぼしめし惑はる。（里下りを）輦車の宣旨など宣はせても、又入らせたまひては、更に許させ給はず。（帝「限りあらむ道にも、死出の旅路にさへ諸共にと豫て約束したものを おくれ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとも、打捨ててはえ行きやらじ」と宣はするを、（更衣も悲しく思つて）女もいといみじと見奉りて、

（更衣）「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけりいと斯く思う給へましかば」と、息も絶えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、斯く（樣子を見屆けたい）ながら、ともかくもならむを御覽じ果てむと思召すに、（人々「今日始むべき祈りども」（法も數多始むべき由なり）、さるべき人々承れる、（やがて役處に）今宵より（ある）べければ）」と聞え急がせば、（帝御心）わりなくおもほし（あし）ながら、まかでさせ給ひつ。（帝は）御胸のみつとふたがり（らせ給

つゆまどろまれず 帝は少しも眠れず夜をあかしかねておいでになる。

あへなくて 拍子拔けがして。

聞召す御心惑ひ 更衣の逝去を聞召した帝の御悲歎。

御子は斯くても 帝は源氏を此儘禁中に留めて御覽になりたいが。

かかる程にさぶらひ給ふ 喪中に禁中に居殘るといふ前例はないから。七歳以前の服忌の事は源語秘訣に委しい。

よろしき事にだに 普通の夫婦仲の場合でも。

斯かる別れの あはれに 斯かる死別の。相慰めようといふ源氏は吾が母の死ともわきまへない幼兒であるから、感傷も深く。

いふかひなし 何をいつてもこんな頑是ない子供だから役に立たぬ。「見奉り給へるを」と「わざなるを」とを「いふかひなし」と受けたもの。

例の作法 當時慣例の火葬。

おなじ煙にも 更衣と共に死にたい。

奚宕 鳥邊野六波羅の地とも白河修學院の地ともいふ。

（出る使者と帰る使者と行きちがふ）御使のゆきかふ程もなきに、（氣にか、つてはれぐしいこと）なほいぶせさを限りなく宣はせつるを、（更衣逝去）人々「夜中打過ぐる程になむ絶え果て給ひぬる」とて泣きさわげば、（里の人達が）御使も、いとあへなくて歸り參りぬ。聞召す（帝の）御心惑ひ、（何の御分別もなく）何事も思召しわかれず、（一間に引籠つて）籠りおはします。御子は斯くてもいと御覽ぜまほしけれど、（喪中に）かかる程にさぶらひ給ふ例なきことなれば、（源氏が更衣の里へ）まかで給ひなむとす。（源氏のさま）何事かあらむともおもほしたらず、（源氏の侍女達）さぶらふ人々の泣きまどひ、（帝）うへも御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見奉り給へるを、（よろしき事にだに、斯かる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれにいふかひなし。

限りあれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、「おなじ煙に（煙の縁語）ものぼりなむ」と泣きこがれ給ひて、（野邊送り）御送りの女房の車に慕ひ乘り給ひて、愛宕（葬送の儀式）といふ所に、いといかめしうその作法したる

むなしき御骸を　御遺骸を見ながらも、なほ生存の人のやうに思つて居るのが詮ない事だから。これは葬式に出ない前にいうた詞。

さは思ひつかし　野邊送りの女房達の心。多分こんな事になるだらうと想像して居つたが果して。

宣命　勅命を宣傳する意。此處は贈位の宣命である。

女御とだに　女御とさへもいはせず更衣で終らせたのが殘念故。

いまひときざみ　更衣は四位、女御は三位とあるが必ずしもさうでない。

もの思ひ知り給ふは　物の道理を辨へた人は。

心ばせの　性質が穩で。

今ぞ　更衣逝去後の今になつて初めて。

に、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけむ。「むなしき御骸を見る／＼、なほおはするものと思ふがいとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしう宣ひつれど、車より・落ちぬべうまどひ給へば、「さは思ひつかし」と、人々もてわづらひ聞ゆ、うちより御使あり。三位の位贈り給ふよし勅使來てその宣命讀むなむ・・悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが飽かず口惜しうおぼさるれば、いまひときざみの位をだにと・、贈ら・・・せ給ふなりけり。これにつけても、・・・・・憎み給ふ人々多かり。・・・もの思ひ知り給ふ・・は、さまかたちなどのめでたかりしこと・・・、心ばせのなだらかに目やすく、憎みがたかりし事など、今ぞおぼしいづる・・。さまあしき御もてなし故こそ、すげなうそねみ給ひしか、・・人がらのあはれに、なさけありし御心を、うへの女房なども、戀ひしのびあへり。

なくてぞ　古歌「ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」六帖五物語「ある時はありのすさみに語らはで戀しきものと別れてぞ知る」

のちのわざ　七々日の供養。故更衣の里で行はれるのである。

御かた／＼の　女御更衣達の夜の御祗候。

露けき　涙がちな秋である。時節が秋故「露けき」といつたのである。

亡きあとまで　死後までも私達の胸をさまらない程の更衣の愛され方だ。

親しき女房　帝が特に身のまはりにお召使になる女房や乳母などを母君の家に遣して源氏の様子をお尋ねになる。

野分だちて　あらしめいた寒い風が吹いて。

夕月夜　夕方の月。

やがて　そのまゝ。寢室におはひりにもならないで。

心ことなる　更衣は格別上手に樂器を奏し。

はかなく　かりそめに。一寸詠む歌も。

「なくてぞ」とは、斯かる折にやと見えたり。はかなく日頃すぎて、のちの・わざなどにも、こまかにとぶらはせ給ふ。程ふるままに、せむかたなう悲しうおぼさるるに、御かた／＼の御宿直なども絶えてし給はず、ただ涙にひぢて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで・人の胸あくまじかりける人の御覺えかな」とぞ弘徽殿などにはなほゆるしなう宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみおもほしいでつつ・、親しき・・・・女房、御乳母などを遣はしつつ、有様を聞召す。

野分だちて俄に膚寒き夕暮のほど、常よりもおぼしいづること多くて、靫負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしき程にいだし立てさせ給うて、やがて眺めおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかき鳴らし、はかなく聞えいづる言の葉も、人よりは殊なりしけはひかたち

面影につと添ひて　幻になつて帝の御目の前にはなれず添うてゐるやうに感ぜられるが。
闇の現　古今十三戀三「ぬば玉の闇の現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり」闇の中の現實よりもつとはかないものであつた。
闇にくれて　更衣を失つた悲しみにかきくれて。
八重葎にも　新勅一春上貫之「訪ふ人もなき宿なれど來る春は八重葎にもさはらざりけり」
みんなみおもて　南面。寢殿の南に面する部分は晴の場所で、客を迎へる所。轉じては家の正面の部分。
母君も　命婦は勿論母君も悲しさに胸がつまつて直には言葉も出ない。
げにえ堪ふまじく　成程命婦も堪へがたげに泣かれる。「げに」は「今までとまり侍るがいと憂き」を受ける。
參りては　これより先に内侍のすけが慰問に來て、復命した時の詞。
ものの思ひ給へ知らぬ　物の分らぬ私の心地にも。
仰言　勅命。
暫しは　以下勅言を口移に傳へるのである。
さむべき方なく　夢ならさめるのだが、夢ではなく現實だから。

・(な)・(ど)の、面影につと添ひておぼさるるも、闇の現にはなほ劣りけり。命婦かしこにまかでつきて、門引き入るるより、けはひあはれなり。やもめずみなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひ立てて、目やすき程にて過ぐし給へるを、闇にくれ・(に)て臥し沈み給へる程に、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる。みんなみおもてにおろして。母君もとみにえ物も宣・・・・(えいひやり給)はず。

「今までと・(と)まり侍るがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、・・(いと)恥かしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。

「『參りては、いとど心苦しう心肝も盡くるやうになむ』と内侍のすけの奏し給ひしを、もの思ひ給へ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたう侍りけれ」とて、ややためらひて、仰言傳へ聞ゆ。

「『暫しは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも問ひ合すべき人だになきを、忍びては參り給ひなむや・・・・・・・(かひなき御物語をだにとなん)。若宮の、いと覺束なく露けきなかに過ぐし給ふ・・(らん)も心苦しうおぼさるるを、疾く參り給へ』など、はかばかしうも宣はせやらず、むせ返らせ給ひつつ、かつは人も心弱く見奉るらむと、おぼしつつまぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、承りも果てぬやうにてなむまかで侍りぬる」とて、御文たてまつる。

「目も見え侍らぬに、かくかしこき仰言を光にてなむ」とて見給ふ。「程經ば、すこし・(も)・うち紛るる事もやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきは、わりなきわざになむ。いはけなき人もいかにと思ひやりつつ、諸共にはぐくまぬ覺束なさを・(口)・(惜)・(し)、今はなほ昔の形見になずらへて物し給へ」など、こまやかに書かせ給へり。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

忍びては　そつと參内しなさいよ。
いと覺束なく　氣懸りな有樣で涙がちな母君の里に暮して居られるのも氣の毒故。
かつは　悲しさうな御樣子の中にも又一方では。
人も心弱く　人が帝を氣が弱いと思ふ事だらうと。
うちまぎるる事もや　氣のまぎれる事もあるかと。
諸共に　玉の小櫛「もろともに」は、更衣の母と諸共に也。若宮は里におはしまして、祖母一人してはぐくみて、帝の諸共にはえはぐくみ給はぬ由也。更衣と諸共にといへる註はひがごと也。さては覺束なきといふ詞にかなはず」
宮城野の　禁中を吹き渡る風の音を聞くにつけても源氏の事が思ひやられる。宮城野は奥州の名所、ここは宮中の意。宮城野の宮をはたらかせた使ひ方。小萩に子の意を含めてゐる。

松の思はむ 六帖五「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむ事も恥かし」まだ生きて居るかと松に思はれるのが恥かしい。

ことわりに 若宮が參内を急がれるのも御尤で悲しい事とお見上げして居るなどと私が内心考へて居る趣を奏上して下さい。

心の闇 後撰雜一「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」

はるくばかり 晴らす程に。

わたくしにも 公用でない時にゆつくりおいで下さい。

おもだたしき 當方に嬉しく名譽な事のあつた折にのみお祝ひにお立寄り下さつたのに。

(な)とあれど、(涙の爲に)え見給ひ果てず。母君「命ながさの、いとつらう思(へ)う給へ知らるるに、松の思はむ事だに恥かしう思ひ給へ侍れば、百敷にゆきかひ侍らむ事は、ましていと憚り多くなむ。かしこき仰言をたび〳〵承りながら、みづからは、參内をえなむ思ひ給へ立つまじき。若宮はいかにおもほし知るにか、參内を參り給はむ事をのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見奉り侍るなど、心のうちに思ひ給へるさまを奏し給へ。ゆゆしき身に侍れば、うち〳〵に斯くておはしますも、いま〳〵しうかたじけなく」な(ん)ど宣ふ。命婦「見奉りて、(御有様も)くはしく御有様奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜ふけ侍りぬべし」とて急ぐ。母君「くれまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに、聞えまほしう侍るを、(御)わたくしにも、心のどかにまかで給へ。年頃、嬉しくおもだたしきついでに、のみ立寄り給ひしものを、かかる御せうそこにて

生れし時より 更衣の事を母君が語るのである。

思ふ心ありし人にて 更衣は私共に於て思ふ子細のあつた子で。

この人の宮仕の この人を宮仕に上げるといふ私共の素志を是非貫徹させてあげなさい。

かの遺言 故大納言の遺言。

よろづに添きに 萬事につけて勿體ないので。

なり添ひ 增加する。

横さまなるやうにて 横死のやうな有樣で。

却りては ありがたい帝の御情が却つてつらく思はれます。

これもわりなき これも目のない子故の闇でございます。

うへもしかなむ 主上の思召も同じ事でございます。

わが御心ながら 自分ながら。以下勅言を命婦が語るのだ。

見奉る。(が)、かへす〳〵(無情な命でございますこと)つれなき命にも侍るかな。(更衣誕生の時から)生れし時より、思ふ心ありし人にて、(更衣の父)故大納言、(逝去のきはまで)今はとなるまで、(只一圖に)ただ、『(更衣の事)この人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ。われ亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへす〳〵いさめおかれ侍りしかば、はか〳〵しう後見思ふ人なきまじらひは、(宮仕)なか〳〵なるべき事と思ふ給へながら、ただかの遺言をたがへじとばかりに、(宮仕にあゆた所)いたし立て侍りしを、(過分な帝の御寵愛が)身にあまるまでの御志のよろづに添きに、(人扱ひにもされない恥を忍びつつ)人げなき恥を隱しつつまじらひ給ふめりつるを、人の(御)そねみ深くつもり、(不快な事)安からぬこと多くなり添ひ侍るに、横さまなるやうにて、遂に(逝去)かくなり侍りぬれば、却りてはつらくなむ畏き御心ざしを思う給へられ侍る。これもわりなき心の闇に」なんどいひもやらず、(涙に)むせかへり給ふほどに夜も更けぬ。命婦「うへもしかなむ。『わが御心ながら、(怪しく)あながちに人目驚くばかりおぼされしも、(斯く長くは添ひ得ぬ前兆であつた)長かるまじきなりけりと、今はつらか

人の契り　因縁。「人の一」は更衣をさすのであるが、「人の親」「人の御覺え」などの場合と同じ。

世に　意味を強める詞。

さるまじき　受けてはならぬ人の恨を受けた揚句は。

心をさめむ　心の落着けやうもないので。

前の世ゆかしう　前世の宿緣が知りたい。

草のもと　一〇頁に「草も高くなり」云々とある。

鈴虫の　鈴蟲の如く聲の限を出して泣いても、この長い秋の夜も飽き足らず涙が流れる。ふるは振と降の掛詞で鈴の緣語。

いとどしく　たださへ悲歎にくれてゐるわが宿に、慰問の勅使を頂いて一層涙を流させる。

かごとも　御慰問を受けて却つて一層悲しく思はれるから、かうして涙の流れおちるのもあるやうにあなたにかこつけて申上げようとおもはれます。

りける人の契りになむ。世にいささかも人の心を曲げたることはあら・じと思ふ・を、ただこの人・ゆゑにて、あまた・さるまじき人の恨みを負ひしはて〳〵は、かう打捨てられて、心をさめむ方・なき・に、いとど人わろう、かたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ』と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と、語りて盡きせず。泣く〳〵、命婦「夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず御返り奏せむ」と急ぎ參る。月は入方の空清う澄みわたれるに、風いと涼しく吹きて、草叢の蟲の聲々催しがほなるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

命婦　鈴蟲の聲のかぎりをつくしても長き夜飽かずふる涙かな

命婦は車にえも乘りやらず。

母君　「いとどしく蟲のね繁きあさぢふに露おき添ふる雲の上人かごとも聞えつべくなむ」といはせ給ふ。

人をして命婦に　風流なをかしき・・・・御贈物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、斯

若き人々　若宮に附添うて此處に來て居る若女房達。

悲しき事は　更衣の死を悼む事はいふにも及ばず。

壺前栽　清涼殿の西庭で、朝餉間と臺盤所との前にある小庭。此卷の一名を壺前栽といふのもこれに基づく。

やうにて　やうな風をして。湖月抄に「やうの字心をつくべし」と傍註してあるが正にさうである。

忍びやかに　「御物語せさせ給ふなりけり」にかかる。

長恨歌の　白樂天が唐の玄宗皇帝と楊貴妃との事を歌つた長詩が長恨歌である。此頃御覽になつてゐる長恨歌の卷は。

御繪亭子院のかかせ給ひて　宇多院がおかきになつて。本朝畫史に、天性畫圖を嗜み給ひ心を丹青に寄せ給ひて亭子院の屏風を圖寫し給ふ（宇多天皇ノ條）。

伊勢　前伊勢守藤原繼蔭女。三十六歌仙の一。

伊勢貫之によませたまへる　その生み奉る。宇多帝の皇子を伊勢と貫之とによませて御の歌を書かせになつたさういふ長恨歌の卷物を此頃御覽になつてゐるといふ意にて、此頃から貫之によませたまへるまでを獨立の提示語においたものである。

大和言の葉　和歌の事。

そのすぢ　「その」とは前記提示語を受けたもので、長恨歌に歌つてあるやうな筋合の事の義。

まくらごと　常住坐臥の話題。

かる用もやと殘し給へりける御裝束一領、御髮上の調度めかくいま〳〵しき身の添ひ奉らむも、いと人聞き憂かるべし、

母君心　禁中に住み　禁中にこたはりなく

思ひいで聞ゆれば、疾くまゐり給はむ事をそのかし聞ゆれど、たりを朝夕にならひて、いとさうく〳〵しく、うへの御有樣などまた見奉らで暫しもあらむは、いとうしろめたう思ひ聞え給ひて、

若宮を手放して　若宮に　禁中に　主上

命婦は　「いとどしく蟲のね繁きあさぢふに露おき添ふる雲の上人かごとも聞えつべくなむ」といはせ給ふ。

人をして命婦に　風流なをかしき・・・・御贈物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、斯

いともかしこきは　御弔問を戴きまして誠に勿體なくて、どうしてよいやら分りませぬ。

荒き風　更衣逝去の後は若宮の事が心配でなりませぬ。

亂りがはしきを　諸説があるが父帝が御在世であるのにその事を度外視して母親の亡くなつたので、まるで保護者のないもののやうに詠んである事を、取亂したいひ方といつたのである。

御覽じ始めし　更衣を初めてお召しになつた當時の事まで取集めて。

時のまも　更衣存生の折は、片時も見ずには氣懸りであつたのに。

かくても　殁後の今は、かく見ずに居つても、よくも月日は過ごせたものだ。

宮仕の本意　更衣を宮仕に奉るといふ本意を固く守つて居られた返禮には。

かひあるさまに　女御か中宮にもして、宮仕に奉つたかひのあるやうにしてやらうと思つて居つたに。

おのづから　「さるべきついでもありなむ」にかかる。

さるべきついでも　湖月抄「若宮を春宮にもと思召す御心なるべし」

かの贈物　命婦が母君から頂いた贈物。御裝束一領と御髪上の調度。

あはれなりつる事・・忍びやかに奏す。御返り御覽ずれば、母文「いともかしこきは、おきどころも侍らず。かかる仰言につけても、かきくらす亂り心地になむ。

荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩がうへぞ靜心なき」

などやうに亂りがはしきを、心をさめざりける程と、御覽じゆるすべし。いとかうしも・・見えじとおぼししづむれど、更にえ忍びあへさせ給はず、御覽じ始めし年月の事さへかき集め、よろづにおぼしつづけられて、時のまも覺束なかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましうおぼしめさる。帝「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意深く物したりしよろこび・は、かひあるさまにとこそおもひわたりつれ。いふかひなしや」と・・うち宣はせて、いとあはれにおぼしやる。帝「かくても、おのづから、若宮など生ひいで給はば、さるべきついでもありなむ。命ながくとこそ思ひ念ぜめ」など宣はす。かの贈物御覽ぜさす。

亡き人のすみか　臨卭の道士が幻術で蓬萊山に至り、楊貴妃にあつて玄宗の志を傳へた時、貴妃はそのしるしとして金釵と鈿合とを道士に與へた。長恨歌に「唯將二舊物一表二深情一、鈿合金釵寄將去、釵留二一股一合一扇、擘二黃金一合分レ鈿」とある。湖月抄に、「鈿合ハサミとあり、字源には、螺鈿の香合のよしに說いてゐる。鈿にカンザシの訓も有る。」庾肩吾詩に、縈テレ鬟起テ照レ鏡、誰忍テ去ル二金鈿一とあるのを見ると鈿は髪の飾であらう。香合といふは誤である。古訓にハサミとあるのは髪をはさむもので今のピンの類であらう。ピンにも飾を目的とするのがあり、これであらう。固より鋏の義はなく縈はこゝではマトフと訓むのがよい。髪をとりあげることであらう。合一扇とあるのを見ると、平い鬢挾の類であらう。扇は扉などを數へるのに用ひる助數詞である。こゝの證の釵は金釵と鈿合とを總稱したものであらう。

尋ねゆく　人傳でもよいから、更衣の魂のありかを知る爲に尋ねゆく道士でもあつてくれればよい。

未央　びやうと讀む。未央宮の事。長恨歌「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉」

げに　下の「麗はしうこそありけめ」にかかる。「けに」と清んでよむ說もあるがよくない。

亡き人のすみか尋ねいでたりけむ證の釵ならましかばとおもほすも、いとかひなし。

帝「尋ねゆく幻もがなつてにても魂の在處をそこと知るべく

繪にかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆限りありければ、いと匂ひ・・なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりしかたちを・、からめいたる・・よそひは麗はしう・・こそ・ありけめ、なつかしうらうたげなりし・・・・・・

・女郎花の風に靡きたるよりもなよび撫子の露に濡れたるよりも

・らうたくなつかしかりしかたちけはひ・をおぼしいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕のことぐさに・、羽をならべ枝をかはさむと契らせ給ひしに、・・かなはざりける命の程ぞ、盡きせず恨めしき。風の音、蟲の音につけて・、物のみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には、久しう・・・・・・・ほされて・上の御局にもまうのぼり給はず、月の面白きに、夜更

太液池の蓮や未央宮の柳も楊貴妃の容姿に似通つて居つたのだが、その唐風の裝は成程艶麗ではあつたらうが。

花鳥の色にも　後撰四夏「花鳥の色をもねをも徒に物うかる身はすぐすのみなり」この歌の語だけを採つたもの。ひきくらべて見る。

ことぐさ　いひぐさ。口癖。

羽をならべ　夫婦仲の睦まじい事。長恨歌「在天願作二比翼鳥一、在地願爲二連理枝一」其約束が遂げられなかつた壽命の點が限なく恨めしい。

かなはざりける

上の御局　清涼殿内の弘徽殿の上の御局。

傍痛しとおし立ち　笑止千萬に。強情。我が强い。

かど〳〵しき事にもあらず　角がある。更衣の死くらゐは何でもない。

雲の上も　雲の上である禁中でさへ涙にくれて見える月だもの、まして下界の雲の下の母君の宿ではどうして澄んで見えよう。雲の爲に光が遮ぎられるからの意。すむは住と澄の二義をかねた語。

燈火を　長恨歌「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」

右近の司の宿直奏　「問籍又は名對面ともいふ。奥入「亥一剋左近衞夜行、官人初奏し時、終二子四剋一、丑一剋右近衞宿申事、至二卯一剋一」

明くるも知らで　續後拾遺雜下

くるまで遊びをぞし給ふなる。（御門）いとすさまじう、ものしと聞召す。このごろの御氣色を見奉る上人、女房などは、傍痛しと聞きけり。いとおし立ち、かど〳〵しき所ものし給ふ御かたにて、事にもあらずおぼし消ちてもてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ淺茅生の宿

おぼしやりつつ、燈火をかかげつくして起きおはします。右近の司の宿直奏の聲聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせ給ひても、まどろませ給ふ事難し。朝に起きさせ給ふとても、明くるも知らでとおぼしいづるにも、なほ朝政は怠らせ給ひぬべかんめり。物なども聞召さず、朝餉の氣色ばかり觸れさせ給ひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御氣色を、見奉りなげく。すべて近うさぶらふかぎりは、

伊勢「玉すだれあくるも知らで寢しものを夢にも見じと思ひかけきや」。長恨歌「春宵苦レ短日高起、從レ此君王不二早朝一」

大床子の御膳　晝の御座で召上る公式のお食事で陪膳は殿上人が奉仕する。

いと遙かに　召上らうともお思ひにならぬ。

陪膳　お給仕。

さるべき契り　帝と更衣との間には前世の御宿緣があつたらうが。

そこらの人の　これは更衣存生中の帝の御もてなしをいふ。

今はた　更衣逝去後の今も亦。はたは「と雖も」の義。亡くなつてゐられても。

人の朝廷の　異朝の例などまで引合に出して。

月日經て　忌服令「父母喪父母斧夫、忌五十日、服十三ケ月（後略）」。月日經てとあるから一年には亙らなかつたのである。五十日の忌が過ぎて參内せられたのであらう。

ゆゆしう　おそろしく。餘り美しい人餘り賢い人などは早死にするといふ迷信の上からいつた言葉。もしや死にはせぬかと恐しい意。「いとど」は河内本に「いと」とあるのがよい。

坊　春宮坊。皇太子の事。

引き越さまほしう　第一皇子を越えて源氏を春宮に立てたいと思召したが。

御後見すべき　源氏には有力な

男女、「いとわりなきわざかな」と、いひあはせつつ歎く。（人々）

「さるべき契りこそはおはしましけめ、そこらの人の譏り恨みをも憚らせ給はず、この御事に觸れたる事をば、道理をもうしなはせ給ひ、今はた斯く世のなかの事をもおぼし捨てたるやうになりゆくは、いとたいへしきわざなり」と、人の朝廷のためしまで引きいで、ささめき歎きけり。

月日經て、若宮まゐり給ひぬ。いとど、この世の物ならず、清らにおよすげ給へれば、いとどゆゆしうおぼしたり。明くる年の春、坊さだまり給ふにも、いと引き越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世の承け引くまじき事なれば、なか〳〵危くおぼし憚りて、色にもいださせ給はずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と世の人も聞え、女御も御心落ちゐ給ひぬ。かの御おば北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ねゆかむ」と願ひ給ひし

外戚も無い。
さばかり 帝は源氏をあれ程御寵愛にはなつたが。
女御 第一皇子の御母弘徽殿女御。
御おば北の方 源氏の祖母、即ち更衣の母君。
おはすらむ所 更衣のおはする黄泉に。
かなしびおぼす 帝の御歎。
この度は 前には三歳で悲しさも覺えなかつたが、今度は六歳であるから。
ふみはじめ 御讀書始。天皇・皇太子・親王・諸王子等が始めて句讀を受け給ふ事。文章博士が玄宗御註孝經によつて、御註孝經序と五字を讀んで之を御復せしめ奉る。
今は誰も〳〵 帝が女御更衣達に仰せられるお言葉。今になつては誰も源氏を憎むことは出來まい。母更衣が亡せた今に於ては、せめて此若宮を愛してやつて下さい。
弘徽殿などにも 帝が弘徽殿に渡御の折にも源氏をおつれして御簾の内にお入れになる。
えさし放ち給はず 流石の弘徽殿も源氏を疎外なさる事が出來ない。
なずらひ 源氏の美しさには比較にならない。
隱れ給はず 婦人は男子には隱れて顔を見せないのが常であるが、源氏は幼少故、源氏には隱れない。
恥かしげ こちらで恥かしく思

しるしにや、遂に亡せ給ひぬれば、又これをかなしびおぼす・事かぎりなし。御子六つになり給ふ年なれば、この度はおぼし知りて、・・・戀ひ泣き給ふ。年頃馴れむつび聞え給へるを、見奉りおくかなしびを・・なむ、かへす〴〵宣ひける。今はうちにのみさぶらひ給ふ。七つになり給へば、・ふみはじめなどせさせ給ひて、世に知らずさとう賢くおはす・・・れば、あまりに・怖ろしきまで御覽ず。「今は誰も〳〵え憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾のうちに入れ奉り給ふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうちゑまれ・・・・ぬべき・さまのし給へれば、えさし放ち・・給はず。女御子たち・ふたところ此の御腹におはしませど、なずらひ給ふべきだになかりける。・・・御かた〴〵も・隱れ・・給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしう打解けぬ遊びぐさに

ふ程。 きまりわるく思ふ。
わざとの御學問 表立つて學ぶ漢學は勿論の事。
事々しううたてぞ あまり大袈裟で、却つて話がいやらしくなりさうな若宮の御有樣だ。
かしこき相人 上手な人相見。
宇多の帝の御誡め 寛平御遺誡「外蕃之人、必可二召見一者、在二簾中一見レ之、不レ可二直對一耳」
鴻臚館 外蕃の人の來朝した時之を接待し宿泊せしめた館舍で七條朱雀の邊にあつた。
御後見だちて 源氏の後見役といふ格で奉仕してゐる。
そなたにて見れば 帝王となるといふ方から判ずれば。
亂れ憂ふる 源氏の一身上にごた〳〵が起り心配事があるかも知れぬ。
朝廷の固となりて 攝關といふ朝廷の柱石となつて天下の政を輔佐するといふ方面から判ずると、又その相がちがつてくる。
才かしこき 學才のすぐれた物識りで。

誰も〳〵思ひ聞え給へり。わざとの御學問・はさるものにて、・・・・こと笛のねにも雲居をひびかし、すべていひつづけば事事しう、うたて・・・・ぞなりぬべき人の御さまなりける。その頃高麗人のまゐれるが・・・なかに、かしこき相人ありけるを聞召して、宮のうちに召さむことは宇多の御門の御誡めあれば、いみじう忍び・・・・て、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大辨の子のやうに思はせてゐて奉る・・・。相人驚きて、あまたたびかたぶきあやしぶ。相人「國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そな・たにて見れば、亂れ憂ふることやあらむ。朝廷の固となりて、天の下を輔くる・かたにて見れば、またその相たがふべし」といふ。辨もいと才かしこき博士にて、いひかはしたる事どもなむいと興ありける。詩など作りかはして、今日明日歸り去り・・なむとするに、かく・・・・ありがたき人にたいめんした

却りては悲しかるべき こんな立派な人に逢つた爲に、別れるのが却つて悲しからうといふ意味を。

物賜はす 高麗人に。

寄ひろごりて 源氏を高麗人に相せしめた事が世間に聞えて。

漏らさせ給はねど 帝は此事を御口外なさらないが。

春宮のおほぢおとど 弘徽殿の御父右大臣。

倭相をおほせて 日本流の觀相を遊ばされて。

おぼし寄りにける 帝王にするのはわるからうと思ひ付かれた事故。

親王にも 皇子は親王宣下があつて初めて親王となられるのである。

相人は誠に 高麗人の言が帝のお考と一致したからである。

無品親王 親王の位は一品から四位までである。親王で品に敍せられないのを無品親王と申す。

ぐわいせきのよせなき 外戚のあとおしもない無品親王としてふらつかせておきたくはない。

わが御世 桐壺帝の御治世。

ただ人 平人即ち臣下。

世の疑ひ 將來帝位に即かれるのではないかとの疑を受ける。

宿曜 廿八宿九曜の行度で人の運命を勘へる術。

るよろこび、却りては悲しかるべき心ばへを、面白く作りたるに、御子もいとあはれなる句を作り給へるを、限りなう（源氏も情趣深い句を作られた）（詩に）（高麗人が）めで奉りて、いみじき贈物どもを捧げ奉る。（源氏に）朝廷よりも多く物賜はす、漏らさせ給はねど、春宮の（御）おほぢおとどなんど（祖父大臣）（も聞き）給ひて、いかなる事にかとおぼし疑ひてなむありける。御門（帝）かしこき御心に、倭相を（源氏を）おぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせ給はざりけるを、相人は誠にかしこかりけりとおぼし合せて、無品親王のぐわいせきのよせなきにてはただよはさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行先も頼もしげなる事とおぼし定めて、いよ〳〵道々の才をならはさせ給ふ。（源氏を臣下とするのは惜しいが）（罰故）（けて賢明で）はことに賢くて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば、世の疑ひ負ひ給ひぬべくものし給へば、宿曜のかし（世間の疑惑を招きさうだから）こき道の人にかんがへさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべくおぼしおきてたり。（帝がおきめになつた）

同じさまに 帝や高麗人の考と同じやうに申すので。

慰むやと 帝は御心の紛れる事もあるかと思召して相當に美しい婦人達を召して御覽になるけれども。

なずらひに 更衣の比較に思はれる人さへない世の中だと。

先帝 系圖にない。

四の宮 藤壺と申す。

母后 四の宮の御母君。先帝の后。

うへにさぶらふ内侍のすけ 主上附の女房で、前に靫負命婦が更衣の里に慰問に行く以前に慰問に行つた事のある人。一〇頁參照。

亡せ給ひにし御息所 桐壺更衣の事。

三代の宮仕に 私は三朝に歴任中嘗て見た事がありませんでしたが。

ありがたきかたちびと 稀な美人。

懇に聞えさせ 帝が叮嚀に母后に懇望された。

さるべき人々を參らせ給へど、なずらひにおぼさるる（御覽ずるにも）（帝の御心に）だにいと難き世かなと、物憂くましうのみよろづにおぼしなりぬるに、うとましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御かたち、すぐれ給へる聞え高くおはします、母后世になくかしづき聞え給ふを、うへにさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しうまゐりなれたりければ、いはけなくおはしましし時より見奉り、今もほの見奉りて、典侍「亡せ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮仕につたはりぬるに、（四の宮を）（桐壺更衣によく似て）（四の宮は）え見奉りつけぬに、后の宮の姫宮こそ、いとよう覺えて生ひいでさせ給へりけれ。ありがたき かたちびとになむ」と奏しけるに、帝御心誠にやと御心とまりて、（參らせ奉り給ふべきよし）懇に聞

春宮の女御　春宮の御母女御。即ち弘徽殿女御。

はかなく　粗略に。

后　四の宮の母后。

心細きさまにて　四宮の有様。河内本に従へば、この句も含めて帝のお詞と見るべきである。

御後見たち　玉小櫛補遺「たち濁るべし。さぶらふ人々御後見だちて参らせ奉るなり」これを取らない。

御兄　四宮の御兄君。

藤壺　禁中五舎の一で飛香舎といふ。四宮は此處に居るから藤壺といふ。

げに　内侍の噂の通り。

人の御際まさり　身分が高いから。

思ひなしめでたく　皇女と思つて見るせいか結構に見えて。

人も　他の女御更衣達も。

御志あやにくなりし　帝寵が生憎深かつたのである。

おぼし紛るるとは　更衣を思ふ歎が忘れられる譯ではないが。

御心うつろひて　帝の御心が藤壺の方に移つて行つて。

えさせ給ひけり。母后、「あな怖ろしや。春宮の女御の心し例もゆゆしう」とおぼしつつみて、すがすがしうもおぼし立たざりける程に、后も亡せ給ひぬ。心細きさまにておはしますに、帝「ただわが女御子たちと同じつらに思ひ聞えむ」と、いと懇に聞えさせ給ふ。さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿のみこなど、かく心細くておはしまさむよりは、うちずみせさせ給ひて御心なども慰むべく、おぼしなりて、まゐらせ奉り給へり。藤壺と聞ゆ。げに御かたち有様、あやしきまでぞ覺え給へる。これは人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえ思ひおとしめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬ事なし。かれは人も許し聞えざりしに、いとどおほん志御志あやにくなりしぞかし。おぼし紛るるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、てよなくおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。源氏の君は、御あたり去りぬ給はぬを、ましてしげく渡らせ給ふ御かたは、え恥ぢあへ給はず。いづれの御かたも、われ人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人び給へるに、いと若う愛しげにて、せちに隠れ給へど、朝夕にうち見給へば、おのづから漏り見奉る。母御息所は、影だに覺え給はぬを、「いとよう似給へり」と内侍のすけの聞えけるを、御心地に、いとあはれと思ひ聞え給ひて、常に參らせ給へば、なづさひ見奉らばやと覺え給ふ。うへも限りなき御思ひどちにて、あやしくよそへ聞えつべき心地なむする。なめしとおぼさでらうたうし給へ。つらつきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも似げなからずなむ」など聞えつけ給へれば、をさな心地にも、はかなき花紅葉につけても、

しげく渡らせ給ふ　帝が頻繁に通つて行かれる女御更衣達は、源氏に恥ぢ隠れなさらない。

うち大人び　他の女御更衣達は皆年がふけて居るのに。

漏り見奉る　源氏が藤壺を。

常に參らまほしう　源氏が藤壺の所に。

なづさひ　なじむ。

限りなき御思ひどち　藤壺も源氏も共に帝から殊寵を受けて居る同志で。

なぞらへ給ひそ　以下帝が藤壺に仰せられるお詞。源氏を疎外しなさるな。御身を妙に源氏の母に擬する事が出來るやうな氣がする。

つらつきまみなど　更衣の顔つきや目もとなどは藤壺に似て居つたから。

通ひて見え給ふも　其の子の源氏が貴女に似通つてゐるやうにお見えになるにつけても貴女を母と見なすに不似合でない一通ひ聞えためるも」とある河内本に從ふ。

聞えつけ　源氏の世話を藤壺に御依頼になるので。

をさな心地にも　源氏の事。

志を見え奉り　源氏が愛情を藤壺に示し。

そぼ〳〵し　仲がわるい。

打添へて　藤壺を妬む心に添へて、更衣に對する以前の憎さも出て來て、源氏をいやな奴だと思はれた。

なほ匂はしさは　源氏の艶麗は矢張譬へ様もなく美しいから。

御覺えも　帝寵も優劣がないから。

居立ち　居たり立つたり骨身をしまず帝がお世話なされて。

限りある事に　元服式の定例以外に諸事を附加せられる。

春宮　第一皇子、後に朱雀院。

南殿　紫宸殿。

所々の饗　式後所々に於て人々に賜ふ饗膳。

内藏寮　四頁參照。

ごくさうゐん　穀倉院。二條の南、朱雀の西にあつて、畿内の錢、無主の位職田、役官の稻などを納める。

おほやけごとに　單に公事向にした爲事は疎略がちなものであるから、特に勅命が下つたので、善美を盡して奉仕した。

志を見え奉り、こよなう心寄せ聞え給へれば、弘徽殿の女御（藤壺）また此の宮とも（を心）御なかそば〳〵しきゆゑ（思ひ聞え給ふ故に）、打添へて（加へて）、もとよりの（御）憎さも立ちいでて、ものしとおぼしたり。世に（なう）たぐひなしと見奉り給ひ名高うおはする（藤壺の容姿に比べても）宮の御かたちにも（り）、なほ（この）（君の）匂はしさは（まさりて）、譬へむかたなく愛しげなるを、世の人光君（ひかるきみ）と聞ゆ。藤壺（の）ならび給ひて（ひて）、御覺えもとり〳〵（りとにや）なれば、輝く日の宮と聞ゆ（めり）。

（源氏の）この君の御童姿（わらはすがた）、いと變へまうくおぼせど、十二にて御元服し給ふ。（御門よろづに）居立ち（て）おぼしいとなみて（たづきて）、限りある事に事を添（加）へさせ給ふ。一年（ひとせ）の春（東）宮の御元服（の）、南殿（なんでん）にてありし儀式のよそほしかりし（盛大だつた大隨ぎ）御響きにおとさせ給はず、所々（ところ〴〵）の饗（きやう）など、内藏寮（くらづかさ）、ごくさうゐんなど、おほやけごとに仕うまつれる（れ）、（の）疎（おろ）そかなる事もぞと、取分き（たる）仰言ありて、（おのおの）清（清涼殿）おはします殿（でん）のひんがしの廂（ひさし）（に）、ひ

倚子立てて　殿上の御倚子を此處に据ゑて玉座とした。

くわんざ　冠者。元服する人、即ち源氏。

引入のおとど　加冠の大臣といふ。尊貴信望ある人が勤める。源氏の場合は左大臣が勤めた。

大藏卿藏人　大藏卿兼藏人である人が理髮の役を奉仕した。

心苦しげ　美しい髮をそぎかねてゐるさま。衞なささう。

御休みどころ　源氏の休息所で清涼殿の南に在る下侍をいふ。

御衣奉りかへて　童服を脱いで縫腋の袍に召換へて。

拜し　清涼殿の東庭におりて主上の方に向つて御禮の拜舞をする。

はた　とはいへ「心强く念じかへさせ給ふ」とはいへ。

あげおとり　髮を上げて容姿が見劣りはせぬかと危んだが。

皇女腹　引入の大臣の北方は内親王である。

おぼし煩ふ　左大臣が迷惑がつて居る。

うちにも御氣色　左大臣は遽て葵上を源氏に差上げる事について帝に御意を伺つた事があるかも。

がしむきに（御）倚子立てて、くわんざの御座（ざ）、引入のおとどの御座（ざ）御前にあり。申（時）の時にぞ源氏まゐり給ふ。（總角結び）みづらゆひ給へる つらつき顔の匂ひ、（靈形なかさま）變（てい）へ給はむこと惜しげなり。大藏卿藏人（くらうど）仕うまつる。いと清らなる御髮（おんぐし）をそぐ程、心苦（いたく）しげなるを、うへは、（更衣）御息所の見（給は）て、ましかばとおぼしいづるに、堪（と）へ（帝）がたきを、（氣强く）心張く念（思）じかへさせ給ふ。（加冠がすんで）からぶりし給ひて、御休（源氏が）みどころに（休息所に退出して）まかで給（た）ひて、御衣（おんぞ）奉りかへて、おりて拜（はい）し奉り給ふさまに（ぞ）、皆人涙おとし給ふ。御門はたましてえ忍（堪）びあへ（させ）給はず。おぼしまぎるる折もありつるを、（更衣の事）昔の事、取りかへし悲しく（う）おぼ（も）さる。いとかうきびはなる（幼少の間は）程は、あげおとり（も）やと疑はしくおぼされつるを、あさましう愛しげさ添ひ給へり。引入の（左）大臣の（みとぢの）皇女腹に、ただ一人かしづき給ふ御むすめ（葵上といふ）、春宮（御所望があつたが）よりも御氣色あるを、おぼし煩ふことありけるは、（葵上を源氏にとの心）この君に奉らむの御心（深き）なりけり。うちにも御氣色賜はらせ給ひければ、

添臥にも 葵上を源氏の添臥に奉れと催促し給うた。東宮皇子などの元服の夜公卿などの女をその側に添ひ臥させたその女を添臥といふ。

さおぼしたり 左大臣が葵上を差上げようと決心した。

さぶらひ 清涼殿の殿上の南にあつて侍臣の詰所。

大みき お酒を飲んで居る時。

氣色ばみ 葵上の事を源氏にほのめかすけれども。

物のつつましき 源氏は恥かしい年頃なので。

ともかくも 否とも應とも返事が出來ない。

内侍 掌侍が主上の宣旨を取り傳へて。

おとど 左大臣に、主上の御前にお召があつたので。

御祿の物 加冠の役を勤めた當座の御褒美。

大袿 御下賜の料で殊更大きく爲立てある。

いときなき 今日の加冠に幼い源氏の初元結の中に、末長い緣を契る心を結ぶ。

結びつる 元結の中に深い心を結びこめたか。

くしけずり 櫛を元結の中にさへ結びこめましたが、若宮の御心變らなければ嬉しい。

清涼殿 紫宸殿に通ずる長階。

感謝 清涼殿に昇る階段。

御階 主上の御前に供へた。

お前の折櫃物 檜の皮を折り曲げて作つた曲物に入れた御馳走。

籠物 獻上物や儀式などの時に用ひる。枝につけて贈る。

右大辨 嘗て源氏を鴻臚館におつれ申した人。

どんじき 屯食。强飯を握り固めて楕圓狀に丸く盛つたもの。

その夜 元服の夜。

作法 婚禮の作法を鄭重にせられた。

似げなく 年齢が違ふから不似合で恥かしいと葵上は思はれた。

母宮 葵上の母宮。

うちの一つ后腹 主上とは同じ后の腹に生れた同腹の兄妹でいらせられるから。

いづ方につけても 左大臣は帝の御信任厚く、母宮は帝の御妹でいらせられるから。

御子どもあまた 左大臣には御子達が妻妾達の腹に澤山ある。

宮の御腹は 本妻である内親王腹に生れた子は。

（御時よく）帝「さらば（やがて）この折の御後見なかめるを、添臥にも」と催させ給ひければ、さおぼしたり。（下侍の事）さぶらひにまかで給ひて、人々大（御）みきなどまゐる程、親王たちの御座の末に源氏（の君）つき給へり。（左大臣）おとど氣色ばみ聞え給ふことあれど、（主上の所から）物のつつましき程にて、ともかくもあへしらひ聞え給はず。お前より、内侍、宣旨うけたまはり傳へて、（引入左大臣）おとど參り給ふべき召あれば、（左大臣が御前に）まゐり給ふ。御祿の物、（主上附の）うへの命婦取りて賜ふ。白き大袿に御衣一領、例の事なり。御盃のついでに、（帝）いときなき初元結に長き世をちぎる心はむすびこめつや（と）御心（下に意味を含めて左大臣の氣を引かれた）ばへありておどろかさせ給ふ。

（左大臣）結びつる心も深き元結に濃きむらさきの色しあせずばと奏して、長階（に於て）よりおりて舞踏し給ふ。左馬寮の御馬、藏人所の鷹するゑて賜はり給ふ。御階のもとに、親王達、上達部つらぬて、祿ども品々に賜はり給ふ。その日のお前の折櫃物、籠物など、右大辨なむ承りて仕うまつらせける。どんじき、祿の唐櫃どもなど、所せきまで、春宮の御元服の折にもかずまされり。

なかく限りもなく（盛大）いかめしうなむ（ありける）。

（左大臣の里邸に）おとどの御里に源氏の君まかでさせ（奉り）給ふ。

（源氏は幼少で、今年十二）いときびは（葵上は）女君（葵上心）似げなく

（源氏より年長で、今年十六）はすこし過ぐし給へるほどに、（源氏が）いと若うおはすれば、

（左大臣に對する帝の御信任）恥かしとおぼいたり。このおとどの御覺えいとやんごとなき（御門）うちの一つ后腹になむおはしければ、いづかたにつけても物あざやかなるに、（源氏）この君さへかくおはし添ひぬれば、（天下の政治を執られる帝の）春宮の御（祖父）おほぢにて遂に世の中を知り給ふべき右のおとどの御いきほひは、（左大臣に壓倒された）物にもあらず壓され給へり。御子ども（腹）々に、あまた腹々にものし給ふ。宮の御腹（に）は、（後の頭中將）藏人の少將にて（左大臣との仲）御なかはいとよかから（まだ）いと若うをかしきを、右のおとどの、

四の君にあはせ 四の君と結婚させ。

一院
后
右大臣 桐壺帝 弘徽殿女御 四の君
母宮
左大臣 葵上 藏人少將
源氏

劣らず 左大臣が源氏を大切にするのにも劣らず藏人少將を大切にする。

里住も 氣樂に左大臣邸に居る事も出來なくて。

大殿の君 葵上。

心にもつかず 氣にも入らずお思ひになつて。

をさなき程の 藤壺の事がわきひら見ずの子供心に。

御簾の内にも 源氏を藤壺の方へも入れなさらぬ。

こと箇 琴は絃器。彈き物。今いふ琴では總稱。琵琶のやうな絃器のやうな絃器。

聞きかよひ 往來はユキカヨヒである。往來だから、キキカヨヒである。音の行つたり來たりするのである。ことは藤壺の事である。この微妙な用語で、笛は源氏。藤壺にも源氏を思ふ情の動きつあつたことを思はせたのである。

ほのかなる 御聲 藤壺の御聲。

内裏住のみ を戀しく思ひ給ふ故である。

ねど、藏人少將を捨ておけずに え見過ぐし給はで、かしづき給ふ四の君にあはせ奉り給ひて、劣らずもてかしづきたるは、理想的の問柄あらまほしき御あはひどもになむ。

源氏の君は、桐壺帝がうへの常におほつかなく側にお置きになるので召しまつはせば、心やすく里住もえし給はず。源氏の心のうちには、ただ藤壺の御有様を、たぐひなしと思ひ聞え給ひて、藤壺のやうな人を妻にしたいさやうならむ人をこそ見め、似るものこの世にありがたくなくもおはしけるかな、大殿の姫君、いとをかしげに、かしづかれたる人とは見ゆれど、いかなるに心にもつかず覺え給ひて、をさなき程の御心一つにおきどころにかなくて、いと苦しきまで思ひあり給ふぞおはしける。大人元服の後になり給ひての御遊びなどの御簾の内にも入れ給はず。御遊びなどの折々、こと笛のねに聞きかよひ、ほのかなる御聲ばかりを慰めにて、内裏住のみ好ましうおぼえ給ふ。禁中に五六日さぶらひ給ひて、大殿おほいどのに二三日など、絶え〳〵にまかで給へど、只今

疎なくおぼして 源氏はまだ子供の事故、外にわる氣があつての事ではあるまいと善意に解して。

うちには 禁中における源氏の宿直所をいふ。

もとの淑景舍 淑景舍は桐壺。そこにもと母更衣が居られた。

母みやすどころの 母桐壺更衣に仕へてゐた女房たち。

里の殿 更衣の里の邸宅。後に二條院といふ。

すりしき 修理職。宮城の造營及び修理を掌る。

内匠寮 中務省の被管で工匠營作の事を掌る。

二なう 類ひなく。

池の心 池の底。

幼少の事ゆゑとはをさなき御程に、源氏を大切にする罪なくおぼし、疎なくて、いとなみかしづき聞え給ふ。源氏夫妻の侍女には御かた〳〵の人々、世のなかにおしなべたらぬ並々でない美人を選りすぐつてをえりととのへすぐりて、さぶらはせ給ふ。源氏の氣に入るやうな御心につくべき御遊びをし、あふな〳〵おぼしいたづく禁中にさぶらはせ給ふ。里の殿には、もとの淑景舍を御曹司にて、母みやすどころの御かたがたの人々、侍女達まかで散らず源氏にさぶらはせ給ふ。里の殿は、すりしき内匠寮に宣旨くだりて、二なく改め作らせ給ふ。もとの築山の姿木立、山のたたずまひ面白き所なるを、池の心廣くしなして、めでたく作りののしる。かかる所に、源氏の氣に入つた女を思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、歎かしうおぼしわたる。「光君といふ名は、高麗人のめで聞えて、附け奉りける」とぞいひ傳へたるとなむ。

昂本

源氏十六歳中將と申せし時の事あり。

光源氏、名のみこと〳〵しう、いひ消たれ給ふとが多かンなるに、特にいとど斯かるすきごとどもを末の世にも聞き傳へて、輕率といかろ浮名を流さうかとびたる名をや流さむと、隱しておいた秘密をさへ忍び給ひけるかくろへごとをさへ、語り傳へけむ人の物いひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なまめかしく風流ななよびかにをかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。源氏がまだ中將なンどにものし給ひし時は、禁中うちにのみさぶらひようし給ひて、大殿には絶え絶えまかンで給ふを、しのぶの亂れやと疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしもあだめき打亂れ世間ざらにある目馴れたるうちつけのすきず出來心のきしさなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、あながちに引きたがへ、心づくしなる事を御心におぼしとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御振舞もうちまじりける。長雨晴れまなき頃、禁中うちの御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひ給ふを、おほとのには、覺束なく恨めしくおぼしたれ

名のみことゞしう　光源氏などと、名だけは大袈裟だが。

いひ消たれ　人からけなされるよくない振舞が多い中に。一消たれ一は光の緣語。

斯かるすきごと　次々の卷にある好色事をさしていふ。

さるは　源氏には人から非難される失行が多いが併し。

交野の少將　古物語の主人公の名で枕草子や落窪物語にも見えてゐるが今傳はらない。

さぶらひ　伺候を精勤されて。

大殿　左大臣邸卽ち葵上の所。

桐壺卷に「内ずみのみ好ましう覺え給ふ。五六日侍らひ給ひて大殿には二三日など絶え〳〵にまかで給ふ」とあつた。

しのぶの亂れや　人目を忍ぶ戀人關係の亂行かと。伊勢物語・新古今戀一業平「春日野の若紫の摺衣しのぶの亂れ限り知られず」

稀にはあながちに　稀には平素と打つて變つて無理やりに氣苦勞な戀を心に思ひつめる癖が生憎あつて、あるまじき振舞も時にはあつた。

長雨晴れまなき頃　以下六九頁の「明し給ひつ」まで雨夜の品定といふ。

いとど長居　上に「うちにのみさぶらひようし」とあつた。

おほとの　左大臣は源氏を待遠しく恨めしく思はれたが。

此の御宿直所　源氏の宿直所は淑景舍卽ち桐壺である。

宮腹の中將　左大臣の北方内親王の腹に生れた頭中將で、前卷に藏人少將とあつた。

右のおとどの　右大臣が壻君大事とかしづき立てて通はしてある通ひ所卽ち四の君の許をば、源氏が葵上方に行きたがらぬのと同樣、頭中將も億劫がつて行きたがらない。

あだ人　移り氣な人。

君の出入　源氏が婿君として左大臣方に出入する時にも。

殿上　清涼殿の殿上の間。

おほとなぶら　大殿油。燈火。

書ども　源氏が書見の序に。

ど、（源氏の衣裳）よろづの御よそひ、何くれと珍らしきさまに調じいで給ひつつ、（左大臣の子息達）御むすこの君だち、ただ此の御宿直所の宮仕をつとめ給ふ。宮腹の中將は、（兄弟中特に源氏と親しく）なかに親しく馴れ聞え給ひて、あそびたはぶれをも、人よりは心やすく、（物馴れ聞え給へ）なれ〳〵しく振舞ひたり。右（頭中將が右大臣の四君と婚した事は前卷の末にある）のおとどのいたはりかしづき給ふすみかは、（四の君方をいふ）この君もいと物憂くして、（世に）すきがましきあだびとなり。（頭中將）里にても、（左大臣邸）わがかたのしつらひまばゆくして、君の出入し給ふに、（源氏とつれだつて）うちつれ聞え給ひつつ、夜（よる）晝（ひる）、學問をも遊びをも諸共にして、（源氏につきまとつて居るので）をさ〳〵立ちおくれず、いづくにてもまつはれ聞え給ふほどに、おのづからかしこまりも（源氏にあまり引けを取らず）おかず、心のうちに思ふ事をも、隱しあへずなむ（鷹揚をも極はず）睦れ聞え給ひける。

つれ〳〵と降りくらして、（淑景舍卽ち桐壺）御宿直所も、（物靜）しめやかなる宵の雨に、殿上（てんじやう）にもをさをさ人ずくなに、例（れい）よりはのどやかなる心地するに、おほとな（あ）ぶら近くて、書（ふみ）どもなど見給ふついでに、近

御厨子　厨子棚。

いろ〳〵の紙なるふみ　色さまざまの紙に書いた手紙。

わりなくゆかしがれば　むやみに見たがる。

そのうちとけて　氣張らずに書いてあつて、あなたが見られては恥かしいと思はれるやうな手紙が見たいのだ。

かずならねど　私などは物の數でもありませんが。

おのがじし　女達各自が、君の無情を恨んで居る折々、君の通つて來るのを待ちがほにしてゐる夕暮などによこした手紙こそ見る價値がありませう。

おほざう　ぞんざいな。手近な。人の目に觸れるやうな場所におかれてゐる意で、厨子の性質上手筐のやうな祕密性のない半は裝飾用の調度である點をいつたもの。

これは二の町の手紙は、第二流の誰に見せても構はぬ手紙であらう。

それかかれか　手紙の主を問ふのである。これは手紙の主の位置を明かにした語。深窓の處女などが多くの男に書き散らす筥を、從つて文字によつて筆者を推定する事は、當時遊戯の相手であつた侍女との遊戯的な懸想文であることを意味する語で、一二の町の心やすき」を說明したものである。

もて離れたる事　見當ちがひの事。

そこにこそ　君こそ澤山の手紙を集めて居られるでせう。

き御厨子（みづし）なる、いろ〳〵の紙（かな）なるふみどもを（中將）引きいでて、中將わりなくゆかしがれば、（源「見せて差支ないのは」）さりぬべき、すこしは見せむ。（不調法なのがあるとわるいから）かたはなるべきもこそ」と、（と）許し給はねば、（頭中「そのうちとけて、傍痛し（たし）とおぼされむこそゆかしけれ。（身の程相應に）おしなべたる大方のは、かずならねど、程々につけて、書きかはしつつ（て）も見侍りなむ。おのがじし恨めしき折々、待ちがほならむ夕暮などのこそ見所（みどころ）はあらめ」と怨（ゑん）ずれば。（大切にして）やんごとなく、せちに隱し給ふべきなどは、（手紙）かやうにおほざうなる御厨子などに、うちおき散らし給ふべくもあらず、深く取りかくし給ふべかんめれば、これは二（に）の町の心やすきなるべし。片端づつ見るに、（頭「かくさまざまなるものどもこそ侍りけれ」とて、（當推量に）心あてに、「それか、かれか」など問ふなかに、（手紙の主を）いひあつるもあり、（別人の事を）もて離れたる事を、（源氏の心に）思ひ寄せて疑ふもをかしとおぼせど、（問ずくなに）ことずくなにて、かくまぎらはしつつ（ごまかしながら）、（手紙を）取りかくし給ひつ。（源「そこにこそ多くつ

さてなむ その手紙を見せてくれたら。

御覽じどころ 御覽になる價値ある手紙は私方にはない。

やう〳〵なむ 長の經驗によつて次第に分つて來た。

うはべばかりの情に 皮相的に情趣を解して居るだけでありながら。

ずゐぶんに 隨分に。身の程相應に。

その方 「手走り書き、折節のいらへ心得てうちし」などの方面。

生先こもれる 年若く將來の有る間は。長恨歌「楊家有レ女初長成、養在二深窓一人未レ識」

心を入るる 熱心にやる。

一つゆゑづけて 一藝を奥ゆかしくし上げる事もある。

どへ給ふらめ。すこし見ばや。さてなむ此の厨子も快く開くべき」と宣へば、頭「御覽じどころあらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふついでに、頭「女の、これはしもと難つくまじきは、難くもあるかなと、やう〳〵なむ見給へ知る。ただうはべばかりの情に、手走り書き、折節のいらへ、心得てうちしなンどばかりは、ずゐぶんによろしきも多かりと見給ふれど、それも誠にその方を取りいでむ選びに、かならず漏るまじきは、いと難しや。わが心得たる事ばかりを、おのがじし心をやりて、われこそ人をばおとしめ、など、傍痛きこと多か り。親など立ち添ひもてあがめて、生先こもれる窓のうちなるほどは、只かたかどを聞き傳へて、心をうごかす事もあンめり。かたちをかしく、うちおほどき、若やかにて、まぎるる事なきほど、はかなきすさびをも、人まねに心を入るる事もあるに、おのづから一つゆゑづけてしいづる事もあり。見る人、

さてありぬべき方 相應に出來る方面を、而もそれに枝葉をつけて語り出すので。

恥かしげだいぶんくはしさうだなと思はれたから。

いとなべては 頭中將の話に對して全部といふ譯ではないが。「いとなべては……おぼしあはする事やあらむ」は「うちほゝゑみて」を修飾する。

さばかりならむあたりには そんな一つの取柄もない女の所には誰がだまされて近寄らう。

取るかたなく 何の取柄もなくつまらぬ女と、優秀と思はれる程の女とは。

中の品に 中流級の女の中に。

おのがじしの 女達各自の主義傾向。

わかるべき事かた〳〵 色々な點で優劣の見分けのつく事が多からう。河内本の如く「見えわかるべき云々」とある方がよくわかる。

下の階と 下流階級といふ身分になると格別耳にもとまらぬ。其女の不得意な方面はいはずおくれたるかたをばいひ隱し、さて。ありぬべき方をば、つくろひてまねびいだすに、『それしかあらじ』と、そらに、いかがは推し量り思ひくたさむ。まことかと見もてゆくに、見劣りせぬやうはなくなむあるべき」と、うめきたる氣色も恥かしげなれば、いとなべてはあらねど、われもおぼしあはする事やあらむ、うちほほゑみて、源「その一つの取柄もない女が世にあらうかば、頭「いとさばかりならむあたりには、誰かはすかされ寄り侍らむ。取る方なく口惜しき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、共に少數であらうこそ侍らめ。人の品高くうまれぬれば、人にもてかしづかれて、隱るることも多く、自然にそのけはひよく見えようこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたる趣も見えて、わかるべき事かた〳〵多かるべき。下の階といふきはになれば、殊に耳立たずかし」とて、いと隈なげらしい頭中將の樣子なる氣色なるもゆかしくて、源「その三つの品々やいかに。いづれを三

其女の不得意な方面はいはず

一般的ではないが

結婚して評判通りかと

源氏にも思ひ當る事があるのか

一つの取柄もない女が世にあらうか

缺點の隱れる

女の性質や

榜子が非常に身分高く

隅々まで精通して居る

三つの品　上中下の階級。此處も河内本の方がよく通ずる。

直人　ただ人ともいふ。普通の人。

その差別　以上成り上り者と成下り者との兩者の上下。

左の馬頭藤式部の丞　この二人系圖不明。

物よくいひ通れる　譯のわかつた話をする。

たりのぼれども　微賤から高貴に出世しても。

さはいへど　何といつても。今は高貴の自分でも、やはり種姓の貴い者とは違ふ。

心は心として　心だけは昔の儘に高く持して居つても、生活はそれに伴なはず。

とり〳〵に　それ〴〵に成上り者と成下り者との兩者を。

人の國の事に　地方の政務に携はつて。

品さだまりたる　國司といふことに身分がきまつてしまつたその中にも。

つの品に置きてか、分くべき。もとの品高くうまれながら、身は沈み、官位が低くて位みじかくて人げなき、また直人の上達部などまでなりのぼりたる、得意顔でわれはがほにて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、その差別をばいかが分くべき」と問ひ給ふ程に、左の馬頭、藤式部のじよう、御物忌に籠らむとて參れり。中將が二人を歓迎して中將待ちとりて、この品々をわきまへ定め爭ふ。いてこの御方の宿直にとて參れり當世の通人で通れるを、と聞きにくき事多かり。

馬頭「なりのぼれども、もとよりさるべき家柄でない者は筋なれど、世の人の思ばくも世渡りの手つるが無く世に經るたづきすくなく、時世うつろひて、覺え衰へぬれば、心は心として事足らず。不調和なわろびたる事ども出でくるわざなんめれば、それ〴〵に判定してとり〴〵にことわりて、中の品にぞ置くべき。受領といひて、人の國の事にかかづらひ營みて、品さだまり

中の品のけしうはあらぬ　相當な中流級のものを國司の中から選抜し得べき今の時節である。

非參議の四位　まだ參議に任じないで公卿でない四位の人々。

はぶかず　諸事を節約せず。

思ひかけぬ幸　皇子を生み奉るやうな意外の仕合。

すべて賬はしきに　階級の區別も要するに富裕に肩を持つといふ事になるのですね。

他人のいはむやうに　貴方ばかりはそんな事は仰しやるまいと思つてゐたのにの意。

うち〳〵の　家庭内における娘の態度や樣子の劣つてゐるやうな、そんな娘は論ずるに足らない。

うちあひて　高貴な階級に相應してすぐれてゐるのもそれは當然の事で、これこそあたり前の事と思はれて。

たるなかにも、また國司の中にも階級があつたきざみ〳〵ありて、中の品のけしうはあらぬ、えり出でつべき比ほひなり。なまなかの上達部よりも、非參議の四位どもの、世間の人望も萬更でなく世の覺え口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬが安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事などはたなかんめるままに、はぶかず、まばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひいづる、も、數多あるべし。宮仕にいで立ちて、思ひかけぬ幸取り出づる例ども多かりかし」などいへば、源「すべて、賬はしきによるべきななり」とて笑ひ給ふを、中「他人のいはむやうに、心得ず仰せらるる」とて、中將に、馬「もとの品、時世の覺えうちあひ、やんごとなきあたりの、うち〳〵のもてなしけはひ、おくれたらむは、更にもいはず、何をしてかく生ひいでけむと、いふかひなく覺ゆべし。うちあひてすぐれたらむも、ことわりこれこ

上が上　上流階級中の上位に位するものを論ずる事は差控へます。

あばれたらむ　荒廃した草深い宿に。

はた　無い事ではないといひながら。

斯かりけむ　かうだつたらう。

父の年老い　以下又別の女の事に就いていふ。

いたく思ひあがり　理想を高くして。

かたかどにても　ちよつとでも。

さる方にて　それは又さういふ種類の女として捨てがたいものだ。

わが妹どもの　式部の心。

いでや　いやもう、上流階級と思つてゐる中にも氣に入る女はない世の中だもの。

そはさるべきこと(拙者などの)と覺えて、珍らかなる事とも、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上は、すべてうちおき侍りぬ。さて世にありと人に知られず、淋しくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人の閉ぢられたらむ(など)こそ、限りなく珍らしくは覺えめ。いかではた斯かりけむと思ふより(事の意外といふ點に)、たがへる事なむ、あやしく心とまるわざなんべき。父の年老い、(見るも不快ゆに)ものむつかしげにふとり過ぎ、兄の顏にくげに、(想像したところ格別な事もなさうな深窓の中に)思ひやり異なることなき閨のうちに、いといたく思ひあがり、(修得した何でもない藝事も)はかなくしいでたることわざも、(一廉ありゆに)ゆゑなからず(ゆに)と見えたらむ(など)、かたかどにても、いかが思ひのほかにをかしからざらむ。すぐれて疵(欠)なきかたの選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものをば」とて、(藤式部丞)式部を見やれば、わが妹どもの、宜しき(かなりの評判)聞えあるを思ひて宣ふにやとや心得らむ、物もいはず。(源氏の心)いでや、上の品と思ふにだに難げなる世を(なれはまして)と

白き御衣　白いお召物の糊氣のないのに。

しどけなく着なし　わざと無雜作にひつかけて。

御火影　燈下の源氏の姿。

女にて　「をとこ」に對する語で、關係ある男女の間にいふ名である。(女人として。但し「をんな」は一般女子の意にも用ひられる。)

大方の世につけて　一般的に世間の夫婦として見る場合には無難な女でも。

奪廣きに　事の範圍が廣いから融通がつくだらう。

せばき家の内の主人　一家の主婦。

君は、(心のうちに)おぼすべし。白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりをしどけなく(うつむいてよりかかつてゐられるおんは)着なし給ひて、(臨眠に)紐なども打捨てて、添ひ臥し給へる御火影、いとどめでたく、女にて見奉らまほし。(源氏の)この御ためには、上が上をえりいでても、なほ飽(不十分)くまじく見え給ふ。

(このついでに)さまざまの人(婦人達)のうへどもを語りあはせつつ、(馬頭が批評して)「大方の世につけて見るには、咎(欠)なきも、(自分の妻として)わがものと打頼むべきを選ばむに、(は)多かるなかにも、(女が多い中にも)妻と決定するのは困難だえなむ思ひさだむまじかりける。男の、朝廷(おほやけ)に仕うまつりはかばかしき(しつかりした天下の柱石と)世のかため(と)なるべきも、(眞の人材を)誠のうつはものとなるべきを取りいださむ(で)には、(選拔に困難だ)難かるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中をまつりごち(天下の政事を執るべきでないから)知るべきならねば、上は下に助けられ、下は上になびきて、事廣きにゆづらふらむ。せばき家の内の主人とすべき、人一人を思ひめぐらすに、(具備せねば困る要件が)足らはで悪しかるべき大事どもなむかたがた多かる

あふさきるさにて　古今雜詩諸歌「そゑにとてとすればかかり斯くすればあないひ知らずあふさきるさに」あれやこれやで。**さてもありぬべき人**　それでよかりさうな女。**偏へに思ひ定むべきよるべとすばかりに**　この一句は下の「えりそめつる云々」に續く。**同じくは**　どうせ妻とするのなら自分が力瘤を入れ、矯め直してやらねばならぬやうな缺點がなくて、一途にわが物ときめて生涯を託すべき妻とするに足る程氣に入る女もあらうかと選擇し始めた男が。**捨てがたく**　夫婦關係を結ぶに至つた因緣を捨てがたく思つて長く妻として居る男は。**心にくく**　男に捨てられずに居る女の爲にも、どこかその女には美點があるのだらうと奥ゆかしく思はれる。**何か**　いやなあに。**君だち**　源氏や頭中將をさす。**所せく**　窮屈にも思はない身分の女でも。身分がよくなればなるほど一擧一動自由が束縛されるからいふ。**文を書けど**　手紙を書く場合にも。**おほどかに**　ゆつくりと用語を選び。**又さやかにも**　前のは文通の場合、これは男が女の家を訪ねた場合。

（一方がよければ他方がわるく。。。）とあればかかり、帶に短かし襷に長しであふさきるさにて、色めいた氣まぐれ心からすきすきしき心のすさびにて、人の姉人なのめにさてもあまあこれ位で我慢りぬべき人のすくなきを、物好きの好みならねど、他の女には目をくれないやうに專心に選と有樣をあまた見あはせむ偏へに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくはわが力入りをし、なほし引きつくろふべき所なく、氣に入る女もあらうかと選り始めた爲心にかなふやうもやと、えりそめつる人の男が、心にくく推し量らるる定まりがたきなるべし。必ずしもわが思ふにかなはねど、自分の理想に馴染みそめつる契りばかりを、捨てがたく思ひとまる人は、他の女に心を移さないで男である實直な男だと他から見え物まめやかなりと見え、さて保たるる女のためも、心にくく推し量らるる世間の夫婦を綜合して考へて見るに世の有樣を見給へ集むるままに、想像もつかず心に及ばずいとゆかしき事もなしや。君だちの上なき御えらびには、無上の選擇に對してはましていかばかりの人かはたぐひ給はむ。所せく思う給へぬに、どんな女が妻として似合ひませうぞ容姿が小綺麗でだに、身嗜みをしかたちきたなげなく若やかなる程の、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、墨の使ひ方もおぼつかにおもひて文を書けど、おほどかに言選をし、墨つきほのかに、男に心もとなく思はせつつ、又さやかにも

すべなく待たせ　いつまでもいつまでもたまらぬ思ひで男を待たせ。**なよびかに女しと**　物柔かで女らしい女だと思つて見ると。**とりなせば**　うまくあやつると色めかしい振舞をする。**はじめの難**　女には缺點が多いが、これが最初に擧ぐべき缺點だ。**喜がなかに**　主婦としての務の中で。**ついでのなさけ**　何かの機會の瑣細な風情。歌を詠むなどの事をいふ。**まめ〳〵しき筋を立てて**　堅實な實用を主義として。純家耳はさみがちに　額髮を兩耳の後ろへ挾んで家事に立働く樣。**びさうなき家刀自**　美しさのない主婦。**うちとけたる後見ばかりをして**　夫に對する氣兼ねのない世話ばかりをして。この句は後の「何事ぞなど」といふ句に續く。**朝夕の**　出仕の爲に朝夕家を出入するにつけても。**近くて見む人の**　そばに居る妻で、話を聞いて理解し同情してくれるのに相談もしようと。**さしぐみ**　じみ出。**うちもゑまれ云々**　うちもゑまれ、涙もさしぐみ心一つに思ひあまる、この三つは皆「事」につづき、これを修飾する。**あやなき**　つまらぬ。これも「事」につづき「事」を修飾する。

見てしがなと、すべなく待たせ、わづかなる（やつとの思ひで）聲聞くばかりいひ寄れど、息のしたに引きいれ、女はかすかな聲で物をいひことずくなるが、（心のうちを）（面も詞すくなであるのが）いとよくもてかくすなりけり。なよびかに女しと見れば、あまりなさけに引きこめられて、とりなせばあだめく。これをはじめの難とすべし。事がなかに、なのめなるまじき、人の後見（夫の世話といふ方）（いい加減の事ではいけない所の）（面から見れば）のかたは、物のあはれ知りすぐし、はかなきついでのなさけあり、（趣味に身を入れて居るといふ點は）をかしきに進めるかた、なくてもよかるべしと見えたるに、（實用一點張で）又まめ〳〵しき筋を立てて、耳はさみがちに、びさうなき家刀自の、偏へにうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出で入り（夫の世話）（振舞）につけても、おほやけ私の人のたたずまひ、よきあしき事（公向私向における人々の有樣や）（動作）の目にも耳にもとまる有樣を、うとき人にわざとうちまねばむ（他人にわざ〳〵話すでもなかろう）やは、近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに、語りもあはせばやと、うちもゑまれ、涙もさしぐみ、もしはあやい公憤が通いてなきおほやけはらだたしく、心一つに思ひあまる事など多かる

何にかは聞かせむ　妻はどうせわからずやだから何で聞かせるものか。

あはつかに　知慧のない顏して。

ただひたぶるに云々　これは又別の子供らしい女の事である。

さしむかひて見む程　一緒に居る間は。

さても　心もとなくても。

罪許し見るべきを　心もとないといふ缺點も我慢が出來るが。

立ち離れては　夫が遠い所に行つた場合には。

賴もしげなき咎や　賴りにならぬといふ缺點はやはり困つた事だらう。

隱なき物いひ　物事に通じないことのない論客。左馬頭の事。

を、何にかは聞かせむと思へば、うちそむかれて（自然後向に坐つて）、人知れぬ思ひいで笑ひもせられ、『あはれ』ともうちひとりごたるに（獨言ももれる）、『何事ぞ』など、いと・あはつかにさし仰ぎ居たらむは、いかがは口惜しからぬ（ざらん）。ただひたぶるに（子供らしく）子めきて、やはらかならむ人を、とかく引きつくろひてはなどか見ざらむ。（その缺點を何かと直して見たらどうだらう）賴りなく感じても心もとなくとも、なほしどころある心地すべし（直しがひが有るやうに思はれるだらう（自分のいふなりになるから））。げにさしむかひて見む程は、さてもらうたきかたに罪許し見るべきを（可憐なといふ點でのもとにいひやり）、立ち離れては、折節にしいでむわざのあだごとにもまめごとにも、わが心と思ひ得ることなく（共時々に遣瀧してもらひたい）（浮いた事でも眞面目な事でも）（行き屆いた所）深きいたりなからむは、いと口惜しく、賴もしげなき咎やなほ苦しからむ。常はすこしそばくしく（氣にくはぬ女の方が）心づきなき人の、折節につけて、いでばえする（おしだしのきくといふ事も）やうもありかし」など、隱なき物いひも、思ひさだめかねて、いたくうち歎く。

馬頭「今はただ品（種姓）にもよらじ、かたち（容姿）をば更にもいはじ。いと口惜しくねぢけがましき覺えだに（ないなら）なくば、ただ偏へに物まめやかに、しづかなる心のおもむきならむよるべをぞ、終の賴みどころには思ひおくべかりける。あまりの故由心ばへ打添へたらむをば喜びに思ひ、すこしおくれたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くば、うは（人並より劣つてゐる點があつても）（嫉妬しないこと）（附け加へる事が出來る）べのなさけは、おのづからもてつけつべきわざをや。艶に物恥して、恨みいふべき事をも、見聞き知らぬさまに忍びて、（情趣）（口に出して恨むべき事も）（表面何氣ない風して節操立てをし）うへはつれなくみさをづくり、心一つに思ひあまる時は、いはむかたなくすごき言の葉、あはれなる歌をよみおき、偲ばるべき形見をとどめて、深き山里、世ばなれたる海づらなどに、（海岸）這ひ隱れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、（侍りしに）いとあはれに悲しく心深き事かなと、涙をさへなむ（左馬頭が）（かべい）おとし侍りし。今思ふには、いとかるがるしく、殊更びたる事なり。志深からむ男をおきて、見る目の前につらき事ありとも、（愛情深い）（そこ）（その女のやり方は輕率で）（わざとらしい）（よし差當り男に無情な仕打があつたにしても）

心のおもむき　性質。

終の賴み所　結局の賴り所。生涯を託する妻。

あまりの故由　餘分の情趣や氣性などを持つて居る女をば拾ひ物に思ひ。

うしろやすく　信用する事が出來氣長な所さへ十分なら。

艶に物恥して　しなを作つてはにかんで。

偲ばるべき形見を　あとで男から思ひ出して貰ふやうな形見を殘して。

童に侍りし時　左馬頭が子供であつた時。

見る目の前につらき事ありとも　この一句は一志深からむ男をおきて」の前において解する。

人の心を　男の本心を知らぬものやうに。

心ぶかしや　女のやり方を思慮深い事だと他の女がほめるのである。

世にかへりみ　二度と還俗しようとは思はぬ。

いであな悲し　尼姿を見て傍輩のいふ詞。

はた　と雖も。如何に思ひきつたからといつて。

古御達　老女房。

君　旦那樣。旦那樣は愛情深いお方でいらつしやつたのに。惜しい御身を尼になど。

あへなく　なさけなく。

佛もなか〳〵　この方をかへつて尼にならぬよりも心ぎたない と佛も思召す。

濁りにしめる　俗人として濁世に染まつてゐる間よりも。

絶えぬ宿世淺からで　男と切れぬ因緣が深くて。

尼にもなさで　尼にしない間に探し出し連れて來たにしても。

人の心を見知らぬやうに、逃げ隱れて人をまどはし、心をも見むとする程に、ながき世の物思ひになる。いとあぢきなき事なり。『心ぶかしや』などほめ立てられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つほどは、いと心澄めるやうにて、世にかへりみすべくも思へらず。『いであな悲し。斯くはたおぼしなりにけるよ』などやうに、あひ知れる人來とぶらひ、ひたすらに憂しとも思ひはなれぬ男聞きつけて、涙おとせば、使ふ人、古御達など、『君の御心はあはれなりけるものを。あたら御身を』などいふに、みづから額髮をかきさぐりて、あへなく心細ければ、うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれそめぬれば、折々ごとにえ念じ得ず。くやしき事も多かめるに、佛もなか〳〵心ぎたなしと見給ひつべし。濁りにしめる程よりも、なまうかびにては、却りてあしき道にもただよひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿世淺からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてその思ひいで、恨めしきふしあらざらむや。あしくもよくも相添ひて、とあらむ折もかからむきざみをも見すぐしたらむなかこそ、契り深く哀ならめ。我も人もうしろめたく心おかれじやは。又なのめに移ろふ方あらむ人を恨みて氣色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見そめし志いとほしく思はばすべてよろづの事なだらかにも、さるかたのよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたじろきに、絶えぬべきわざなり。すべてよろづの事なだらかに、怨ずべき事をば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くは、わが心も、見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづからかろき方にぞ覺え侍るかし。つながぬ舟の浮きたるためしも、げにあやなし。さは侍

我も人も　一度さういふ戀をすると、男も女も怨めしく思ふ點が無からうか。普通に。よく世間にあるやうに。

心は移ろふ方ありとも　男の心は脇道にそれて居つても、男が逢はじめた當時の志をいたはしく思ふならば、初婚の妻（緣者）といふ點で、そのまゝ二人の仲は持續せられるであらうに、そんなごたゝの爲に緣が切れてしまふものだ。

怨ずべき事をば　嫉妬すべき事があるなら、夫の秘密を見知つて居る風にほのめかし、口に出して恨むべき事も、憎らしくなく婉曲にそれと分るやうに言ひましたらば。

あはれも　夫の愛情も深まるだらう。

見る人から　相手の女のし向け次第で落着きもしよう。

うちゆるべ見放ちたるも　男を全然拘束もせずほつたらかしておくのは、男の心にはゆらしい樣ではあるが。

つながぬ舟の　拘束せずに置くと男が脇にそれてしまふ。文選鳴鳥賦「澹乎若二深淵之靜一、泛乎若二不レ繫之舟一」白氏文集偶吟詩「無レ情水任二方圓器一、不レ繫舟隨二去住風一」

その思ひいで　家出したといふ思出に對して恨めしく思はれる點がなからうぞ。

わが心あやまちなくて　男にあやまちがなくて女の不心得を大目に見て居るならば、どうして女の浮氣を嬌め直して見る事が、なからうぞと考へて居つたが、事實はさうでもあるまい。

わが妹　頭中將の妹葵上。源氏の妻。

ひびらき居たり　べちや〳〵と辯じ立てて居た。

木の道の工匠　指物師。

りんじのもてあそび物　その場限りのおもちや。りんじは臨時。

跡も定まらぬ　様式が定まつてゐない。

そばつきざればみたるも　外觀が洒落て居つても。

げにかうもしつべかりけり　成程かう拵へても面白いものであつた。

らぬか」といへば、中將うなづく。中「さしあたりて、をかしと
もあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ、
大事なるべけれ。わが心あやまちなくて見すぐさば、さしな
ほしてもなどか見ざらむと覺えたれど、それさしもあらじ。
ともかくも、たがふべきふしあらむを、のどやかに見忍ばむよ
りほかに、ます事あるまじかりけり」といひて、わが妹の姫君
は、この定めにかなひ給へりと思へば、君のうちねぶりて言葉
まぜ給はぬを、さう〳〵しく心やましと思ふ。馬頭、物定めの
博士になりて、ひびらき居たり。中將は、このことわり聞き果
てむと、心に入れてあへしらひ居給へり。
馬「よろづの事によそへておぼせ。木の道の工匠の、よろづの物
を心にまかせて造りいだすも、りんじのもてあそび物の、その
物と跡も定まらぬは、そばつきざればみた・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・るも、げにかうもしつべかり

時につけつつ　時々に隨つて。

さまをかへて　この下に「作る」に―」といふやうな省文がある。補つて解釋しないと下文につゞかない。

大事として　大事にしての義で「かざりとする」を修飾する。

まことにうるはしき　本當に立派な調度品で飾とすべき一定の様式ある物を、無難に作りあげるといふ事は。

繪所　拾芥抄卷中「畫所、在建春(式乾イ)門内東腋御書所北、有別當五位藏人預墨畫等云々」

つぎ〳〵に　この下に「書くに」が省文してある。この一節は「書く」―といふ語が繰返へされるので、」以下多く省略されてゐる。

斯かれど　この接續詞は「世の常の山のたたずまひ」云々とある文を連接する。

人の見およばぬ――さてありぬべし　これは再び上手下手の鑑別のつきにくい例を挿入句の形で加へたもの。

げにと見えて　この語は「しづかに書きまぜて」を修飾する。如何にもそのとほりだと見えるやうに書きまぜる意。

けりと、時につけつつ、さまをかへて。今めかしきに目うつり
て、をかしきもあり。大事として、まことにうるはしき、人の
調度のかざりとする、定まれるやうあるものを、なんなくしい
づる事なむ、なほまことの、物の上手はさまことに見えわかれ
侍る。又繪所に上手おほかれど、墨がきに選ばれて、つぎ〳〵
に、更に劣りまさる差別、ふとしも見えわかれず。斯かれど、人
の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚のすがた、唐國の烈しき
獸のかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろ〳〵しく作りた
る物は、心にまかせて。ひときは人の目をおどろかして、じち
には似ざらめど、さてありぬべし。世の常の、山のたたずまひ、
水の流れ、目に近き人の家居有様、げにと見え、なつ
かしくやはらびたるかたなどを、しづかにかきまぜて、すくよ
かならぬ山の氣色、木深く世ばなれて疊みなし、けぢかき籬の
うちをば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいときほ

しづかに書きまぜて すくよかならぬ山の景色が背景の本體でその中に平凡な山水や見なれた人家の樣を書交ぜたのである。

けぢかき籬のうち 手ぢかな垣根の中、即ち柴垣などで圍まれた家敷。無論そこには庭園がある。これが山水を背景とした構圖の本體である。

じち 實物。

その心しらひおきてなどをなむ それをかく用意や描法などを見るに、名人は筆勢が格別で、下手は及ばぬ點が多いやうだ。この句の下に「書くに」が省かれてゐる。さう解かねば「を」を受ける動詞がない。

ここかしこの この語は「氣色ばめる」の主語である。こゝかしこが樣子ぶつて書いてあるのである。

點ながに走り書き 走筆で續けがきすれば、點は長く線にのびて、次の字にかきつゞけられることになる。

誠のすぢを 本格の筆法を守つて綿密に書きあげたものは。

うはべの筆消えて 表面引き立たないが。

取り並べて 氣取つて書いたのと實直に書いたのと兩者を。

じちに 實直に。

はかなき事 細工物、繪、書の如きつまらないもの。

睦言 內所の情話。

聞えさせつるやうに 先刻申上げたやうに。

ひ殊に、わる者は及ばぬ所多かンめる。手を書きたるにも、深き筆致はなくてきことはなくて、ここかしこの、點ながに走り書き、そこはかとなく氣色ばめるは、うち見るに、かど〳〵しく氣色だちたれど、なほ誠のすぢをこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、なほじちになむよりける。はかなき事だに斯くこそ侍れ。まして、人の心の、時に當りて氣色ばめらむ見る目のなさけをば、頼むまじく思う給へ侍る。そのはじめの事、すき〳〵しくとも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目さまし給ふ。中將いみじくしんじて、頬杖をつきてむかひ居給へり。法の師の世のことわり說き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、斯かるついで・は、おの〳〵・睦言も、え忍びとどめずなむありける。

「はやう、まだいと下臈に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに、かたちなど、いとまほにも侍らざり

若き程の 若い時代の浮氣心には。

この人を この女を本妻にとも執着しては居らず。

よるべとは 身內とは思ひながらもまだ物足りなくて。

物ゑんじを この女が嫉妬をしたので。

心づきなう 氣にくはず。

いと斯からで こんなに嫉妬せず大やうであつたらよいにと。

思ひ至らざりける 女の行き屆かぬ事でも。この女の力では出來ない事であつても。

物まめやかに 實直に夫馬頭の世話をし。

すすめる方と 氣の勝つたたちの女だと思つたが。

とかくに靡き來てなよびゆき 何かとやさしく靡き從つて。

疎き人に この醜い顏を他人に見られては夫が不名譽に思ひはせぬかと遠慮し恥ぢて。

しかば、若き程のすきごこちには、この人をとまりにとも思ひとどめ侍らず、これをよるべとは思ひながら、さう〳〵しくて、とかくまぎれありきはンべりしを、物ゑんじをいたくし侍りしかば、心づきなう、いと斯からでおいらかならましかばと思ひつつ、あまりいと許しなく疑ひ侍りしもうるさくて、かく數ならぬ身を見も放たで、など斯くしも思ふらむと、心苦しき折々も侍りて、じねんに心をさめらるるやうになむ侍りし。この女のあるやう、もとより思ひ至らざりける事にも、いかでこの人のためにはと、無き手をいだし、おくれたるすぢの心をも、なほ口惜しくは見えじと思ひ勵みつつ、とにかくにつけて、物まめやかにうしろみ、つゆにても心にたがふ事はなくもがなと思へりし程に、すめる方と思ひしかど、とかくに靡き來てなよびゆき、醜きかたちをも、この人に見や疎まれむと、わりなく思ひつくろひ、疎き人に見えば、おもてぶせにや思はむと

心をさめず侍りし 我慢が出來なかつた。

かうあながちに この女はこの通り無闇に自分におど〳〵して服從してゐる女のやうだ。以下馬頭の心中。

いかで 「やめむ」を修飾してゐる。どうか止めさせたいと思つて。

まことに憂しなども こんなに嫉妬されては、私も眞につらいなどとでも考へて、緣を切つてしまひさうな樣子を示したら。

例の 女が例の如く。

限りと思はば もうこれぎりの緣と思ふなら。

念じて 辛抱して。

なのめに思ひなりて 心持も人並になつて。

かしこく敎へ立つる 自分ながらうまくしつけるなと思ひまして。

憚り恥ぢて、みさをにもてつけて、見馴るるままに、心もけしうはあらず侍りしかど、ただこの憎きかた一つなむ、心をさめず侍りし。當時思ひ侍りしやう、かうあながちに隨ひおぢたる人なんめり、いかで、懲るばかりのわざして、おどして、このかたもすこしよろしくもなり、さがなさもやめむと思ひて、まことに憂しなども思ひて、絶えぬべき氣色ならば、かばかり我に隨ふ心ならば、思ひ懲りなむ、と思ひ給へて、殊更になさけなくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに、『かくおぞましくば、いみじき契り深くとも、絶えて又見じ。限りと思はば、かくわりなき物疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はば、つらき事ありとも念じて、なのめに思ひなりて、斯かる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。人なみ〳〵にもなり、すこし大人びむに添へて、また並ぶ人なくあるべき。』など、かしこく敎へ立つるかなと思ひ給へて、われだけくいひそし侍るに、このすこしうち笑ひて、『よろづに見だてなく、物げなき程を見すぐして、人數なる世もやと待つ方は、いとのどかに思ひなされて、心やましくもあらず。つらき心を忍びて、思ひなほらむ折を見つけむと、年月をかさねむあいなだのみは、いと苦しくなむあるべければ、かたみにそむきぬべききざみになむある』と、ねたげにいふ時に、腹立たしくなりて、憎げなる事どもをいひ勵まし侍るに、女も、えをさめぬすぢにて、指一つを引きよせて、くひて侍りしを、おどろ〳〵しくかこちて、『かかる疵さへつきぬれば、いよ〳〵まじらひをすべきにもあらず。辱しめ給ふめる官位、いとどしく、何につけてかは人めかむ。世をそむきぬべき身なめり』なんど言ひおどして、『さらば、今日こそ限りなんめれ』と、この指をかがめてまかでぬ。

『手を折りて相見し事を數ふればこれ一つやは君がうきふし

よろづに見だてなく 馬頭がまだみすぼらしく微賤である事。

人數なる 人並に出世する時節もあらうかと、それを待つて居る方はさう氣がせかず辛氣くさくもない。

年月をかさねむ 長の年月あてにもならぬ事をあてにしてゐるのは。

腹立たしく 懲りるかと思つた所案外であつたので馬頭は腹立たしくなつて。

憎げなる事どもを 憎らしい事を調子にのつてあびせかけた所が。

えをさめぬ 我慢の出來ぬたちで。

まじらひをすべきにも 官途につける譯のものでもない。辱しめ給ふめるして居られる私の官位も。

いとどしく こんな寃者になつては一段と何のとりえがあつて出世が出來ようぞ。

この指 かまれた指。

手を折りて 連れ添うた年月の事を指折りかぞへて見るに、あなたのいやなし打は、果してこの事一つだけであつたらうか。伊勢物語一手を折りて相見し事を數ふれば十といひつつ四つは經にけり」「ふし」は指の緣語。

え恨みじ　私に捨てられても恨むわけにゆくまい。

うきふしを　あなたのいやな仕打を胸一つに忍んで來たが、この事件があなたと別れる機會なのでせうか。

臨時の祭　賀茂の臨時祭は十一月の下の酉の日に行はれる。それに先だち午の日に調習がある之を調樂といつて宮中で行はれる。

これかれ　調樂に參つた人々。

まかりあかるる　退散して家路につく。

又なかりけり　あの女の家以外にはなかつたのだ。

氣色ばめる　氣取つてゐる女の家に泊るのもうすら寒い氣がする。

そぞろ寒くや　風流がつてゐて容易に暖く寢さてもくれないから、「そぞろ寒くや」といつたのである。

まかンでて　あの女の家に行つて。

なま人わろく　少々きまりがわるくてれくさかつたが。

今宵　雪の中をわざ〳〵來た事だから、今晩こそは此頃中の恨みは解けるだらうと。「解けなむ」は雪の緣語。

引きあぐべき　まくりあげる樣に出來てゐる。

物の帷子　几帳御帳壁代などの垂布。

さればよ　果せるかな。豫想通りであつた事をいふ。

え恨みじ』などいひ侍れば、（風景はしたものの）さすがにうち泣きて、

（指喩女）うきふしを心一つに數へきてこや君が手を別るべきをり

など言ひしろひ侍りしかど、（實の所別れる氣もなかつたが）まことには變るべきこととも思う・給へずながら、日頃經るまで、消息・・も遣はさず、あくがれまかりありくに、臨時の祭の調樂に、夜更けていみじう霙降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむかたは又なかりけり、（禁中に宿直するのも）うちわたりの旅寢もすさまじかるべく、氣色ばめる・・・・・あたりは、そぞろ寒くや、（殺風景だらうし）と思う・給へられしかば、いかが思へると、（あの女は何と思つてゐるかと）氣色も見がてら、雪を打拂ひつつまかン・でて、なま人わろく爪くはるれど、さりとも、今宵日頃の恨みは解けなむ、と思う給へしに、火ほのかに壁に（聽のそ）そむけ、萎えたる衣ども・の厚肥えたる・・・・・・・（ども）（曖かなるべく）おほい（き）なる籠にうち・掛けて、引きあぐべき、物の帷子などうちあげて、今宵ばかりや・と待ちけるさまなり。されば・よ、と心おご

さうじみ　正身と書くべきか。本人。

艶なる歌もよまず　折角來たのに、なまめかしい歌もよみおかず、味を見せた手紙も書いてはない。

ひたやごもりに　直隱かといふ。或は專家隱の義か。いづれにしても引籠りきり、ひつこみきりなどいふ意味。ひつこみきりで何の曲もなかつたので。

われを疎みね　私に、自分を疎んじてくれといふ下心があつたのかと。小櫛に「我は馬頭が我なり、疎みねと我を思へるにやといふ意なり、我を女の我と見たるはひがごとも云々」といつてゐるが、われを女と見なければ解けない。

思ひ侍りしに　上の「われを疎みねと思ふかたの心やありけむ」からここに續く文脈。

わが思ひ捨ててむ　女が男を見捨てた後の事まで氣を配つて面倒を見て居つた。

尋ね惑はさむとも　逃げ隱れて男をまごつかせようともせず。

（當の本人）（ののり）するに、さうじみはなし。（然るべき侍女達だけ）さるべき女房どもばかりと（留守居して）とまりて、『親の家に、この夜さりなむ渡りぬる』と答へ侍り。艶なる歌・・・・もよま・・・ず、氣色ばめる消息もせ・で、いとひたやごもりに、なさけなかりしかば、あへなき心地して、（口やかましく假借しなかつた）さがなく許しなかりしも、われを疎みね、と思ふかたの心・やありけむ・と、（氣がくしやくしてゐる爲に）さしも見給へざりしことなれど、心やましきままに、思ひ侍りしに、（その嘆めてある齊物は）着るべきもの、常よりも心とどめたる色合しざま、（仕立方）いと（申分のない出來ばえで）あらまほしくて、さすがに、わが見捨ててむのちをさへなむ、思ひやり後見たりし。さりとも、（決して私を思ひ切る事はあるまい）絕えて思ひ放つやうはあらじ、と思ひ給へて、（元通りの仲にならうと）とかくいひ侍りしを、（女は反對もせず）そむきもせず、尋ね惑はさむとも思ひ給へず、かがやかしからずいらへつつ、『ただあり（きまりわるがらせぬ程度に返事をして）（今迄通り）（の浮氣心では）し心ながらは、（我慢が出來ぬ）えなむ見すぐすまじき。（心を）あらためて、のどかに（見えぬべく）・・・・・思ひならばなむあひ見るべき』などいひしを、（女が）さり（どうせ思）ともえ思ひ離れじ、（ひきれまい）と思ひ給へしかば、暫し懲らさむの心にて、（もう暫く）

はかなくなり侍りしまつたから。　女は死んで

いひ合せたるに談のしがひがある。　相談しても相

龍田姫といはむにも　染色の技倆は龍田姫といつても不似合ではない。龍田姫は秋の女神で、春の女神、佐保姫に對する。

棚機のひけを取らない。　裁縫の腕前は織女にも

その方　裁縫の技倆。

長き契りにぞあえまし　後撰秋上「あふ事は棚機つめにひとしくて裁ち縫ふ方はあえずぞありける」

げにその龍田姫の錦には　成程女としては龍田姫が錦を染め出すその染色の事以上に大切なものはない。

はかなき花紅葉　なんでもない紅葉といふ。「花紅葉」といつても。龍田姫の緣で一染色ぐらゐなことは何でもないといつても一の意。その時節々々の色合で、あざやかでなく引立たない、少しの見ばえもなく、何事にも十分でなければならぬの義。

さて又　以下木枯の女の事。

『しか改めむ』ともいはず、いたくつなびきて見せし間に、いといたく思ひ歎きて、はかばかしくなく煩ひて、なくなり侍りにしかば、たはぶれにくくなむ覺え侍りし。偏へにうち賴みたらむかたは、さばかりにてありぬべくなむ思ひ給へいでらるる。はかなきあだごとをも誠の大事をも、いひ合せたるにかひなかりしたる風流事もらず、龍田姫といはむにもつきなからず、棚機の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむ侍りし」とて、いとあはれと思ひいで、長き契りにぞあえまし。げにその龍田姫の錦かたをのどめて、棚機の長くかはらぬ契にあやかりたい氣色たり。中將、「その棚機の裁ち縫ふには、また如くものあらじ。はかなき花紅葉といふも、折節の色合つきなく、色目のさえないのはかばかしからぬ、つゆの榮なく消えぬるわざなり。さるにより、妻の選擇は困難なものだと說を定めかねてゐるのだ難き世ぞとは定めかねたるぞや」と、いひはやし給ふ。

馬「さて又同じ頃まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせ、

人も立ちまさり　人柄も前の女（指喰女）よりもすぐれて居た。

故ありと見えぬべく　奥ゆかしい女だとおもはれるやうに、この語は「うちよみ、走り書き、かい彈く」を修飾する。手つきは文字書く事や琴彈く事、口つきは歌を作る事。

たどたどしからず　おぼつかない所はないやうに。

事もなく　無難。

さがな者　指喰女の事。

時々かくろへ　前の女に隱れて木枯の女に逢つて居つた間は。

この人の艶に好ましき事は　花やかで風流な點が有つて。河内本の「見え」に從ふ。

かれにのみ見せ　とだえがちに向けて居つた間に。

上人　殿上人。

大納言　誰か分らぬ。馬頭の父か。父の家に行つて泊らうと思つて居つた所。

人待つらむ宿　私を待つて居る女の所が妙にいぢらしく思はれる。

はた　今の「また」即ち亦にあたる。自分の目ざす家ではないがの義。

よぎぬ道なりければ　大納言の家に行くには是非通らねばならぬ道筋にあつたので。この下に「降り侍りぬ」といふ語が略されてゐる。後に「おり侍りぬかし」とあるから、重複をさけて省いたものである。

くづれより　築地のくづれ目から。

まことに故ありと見えぬべく、うち讀み、走り書き、かい彈く爪音、手つき口つき、皆たどたどしからず見聞き渡り侍りき。見る目も、事もなく侍りしかば、このさがな者を、氣の張らないうちと妻としてけたる方にて、時々かくろへ見侍りしほどは、こよなく心と木枯の女が氣に入つたより侍りき。この人亡せてのち、いかがはせむ、あはれながらも、過ぎぬるはかひなくて、しばしまかり馴るるままに、死んだ者は致方がないので木枯の女に派手すぎてすこしまばゆく、艶に好ましき事は、目につかぬ所あるに、打賴むべくも見えず、かれにのみ見せ侍りし程に、しのびて心かはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、月面白かりし夜、うちよりまかで侍るに、ある上人來あひて、この車にあひ「乘りて侍れば。大納言の家にまかりとまらむとするに、この人のいふやう、『今宵、人待つらむ宿なむ、怪しく心苦しき』とて、この女の家、はたよぎぬ道なりければ。荒れたる木枯の女くづれより、池の水、池の水に月影が見えて、影見えて、月だにやどるすみかを、過ぎ

もとより　殿上人と女とは初から打合せてあつた物と見えて。

あはれとげに見えたり　いかにも情趣深く見えた。

影もよし　倦馬樂飛鳥井「飛鳥井に、飛鳥井に、宿りはすべしおけ、影もよし、みもひも寒しみまくさもよし」

つづしりうたふ　一口づつぼつぼつ、謠ふ。笛を吹きながら、歌ふのである。

律のしらべは　一體律調といふものは。この語は一今めきたる物の聲なれば一の主語である。然るに律の調は秋のものである。即ち今は神無月で冬である。が、一時候はづれの調ではない。今の場合に似合はない。といつたのである。

今めきたる　律の調は氣のきい た音色であるから。「物の聲」と

清く澄める月に　澄み渡つた月下で奏するには不似合でない。

折つきなからず　こゝの「折」は「時季」ではない。場合とか機會とか譯すべきである。

踏みわけたる　外に來る男もない。古今秋下一秋は來ぬ紅葉は庭に散りしきぬ道踏みわけて訪ふ人はなし」

ことのねも　ことのねも月影もよい宿だが、こんなよい宿でも無情なあの人を引きとめる事は出來ない。外に通ふ男のあるやうな口振でよんだのである。

むもさすがにて、殿上人（君も下車したおり）侍りぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけむ、この男、いたくすずろぎて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いと面白くうつろひ渡りて、風にきほへる紅葉の亂れなど、あはれとげに見えたり。ふところなりける笛取りいでて吹き鳴らし、『影もよし』など、つづしり謠ふ程に、よく鳴る和琴を調べととのへたりけるを、うるはしく搔きあはせたりしほど、けしうはあらずかし。律のしらべは、女のものやはらかに搔き鳴らして簾のうちより聞えたるも、今めきたる物の聲なれば、清く澄める月に、折つきなからず。をとこいたくめでて、簾のもとに歩みきて、『庭のもみぢこそ踏みわけたる跡もなけれ』などねたまず。菊を折りて、

『ことのねも月もえならぬ宿ながらつれなき人を引やとめけるわろか・めり』などいひて、『今一聲。聞きはやすべき人のある時に、手なのこい給ひそ』など、いたくあざれかかれば、女・

わろかめり　これは失言。

今一聲　もう一曲願ひます。

聞きはやすべき　私のやうにあなたのことをほめはやす人の居る時に、手を惜しめではなりませぬ。前に「菊を折りて」差出したのは菊を「聽く」にはたらかして、この句にひゞがしたものである。

木枯に吹き合すめる　上の句は殿上人を笛にたとへたのである。あなたの言の葉はありませぬ。木枯は木の「葉」を吹き散らすものだから。

憎くなるをも知らで　私が憎く思つてゐるのもその女は知らずに。

盤渉調　盤渉を宮において成る調子。冬の調である。此度は時節相應の調子で彈いたのである。

さても　しやれのめして浮氣であつた所。さうであつても。

時々にても　木枯の女の場合はたとひ時々逢ふだけであつても世連れそふ妻と思ふには、信用がならず出過ぎた女だと氣がおけて、その夜の事にかこつけて、別れてしまつた。

この二つの事　指嗔女と木枯の女と。

さのみなむ　さうとばかり思はれる事でせう。

御心のままに　あなた方の思召の通りに。

折らば落ちぬべき　古今秋上「折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もとをに置ける白露」

時に、手なのこい給ひそ』など、いたくあざれかかれば、女・

いたう聲つくろひて、

木枯に吹合すめる笛のねを引きとどむべき言の葉ぞなき

・と、なまめきかはすに、憎くなるをも知らで、又箏の琴を盤渉調にしらべて、今めかしくかい彈きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむし侍りし。ただ時々うち語らふ宮仕人などの、飽くまでざればみすきたるは、さても、見るかぎりはをかしくもありぬべし。時々にても、さるところにて忘れぬよすがと思う給へむには、頼もしげなくさし過ぐいたりと心おかれて、その夜の事にことつけてこそ罷り絶えにしか。この二つの事を思う給へ合するに、若き時の心にだに、なほさやうにもていでたる事は、いとあやしく頼もしげなく覺え侍りき。今よりのちは、ましてさのみなむ思う給へらるべき。御心のまに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹

艶にあえかなる なまめかしいた〳〵しいやうな風流ばかりを面白く思召さうが。

おぼし知り侍りなむ 「侍り」は文法上如何。

あやまちして さういふ女は失態を演じて、相手の男の惡名を立てるものです。

かたくななる名 融通のきかない男だといふ評判。そんなにやかましくいはずともの事にやかましい男だの意。

君 源氏。

見そめたりし人の 逢ひ始めた女があつたが。この女を夕顔といふ。

さても見つべかりし こんな關係で續けていけさうな樣子であつたので。

ながらふべき 長續きのするものとも思はなかつたが。

絶えぐ〳〵 とだえがちながら。

うち頼める氣色も 私を力にしてゐる樣子も見えた。

の上の霞など・・・の、艶にあえかなるすき〳〵しさのみこそ、をかしくおぼさるらめ。今さりとも、七年あまりの程に、おぼし知り侍りなむ。なにがしが賤しきいさめにて、風流におぼれてゐる女には氣すきたわめら む女には心おかせ給へ。あやまちして、見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」といましむ。中將、れいのうなづく。君・すこしかたゑみて、さる事とはおぼすべかめり。源「いづからにしてもづかたにつけても、見つともなく具合のわるい話だ人わろくはしたなかりける御物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。

中將、「なにがしは、癡者の物語をせむ」とて、「いとしのびて見そめたりし人の、さてもみつべかりしけはひなりしかば、・・・・・ながらふべきものとしも思ひ給へざりしかど、馴れゆくままに、あはれと覺えしかば、絶え〳〵、忘れぬものに思ひ給へしを、さばかりになれば、うち頼める氣色・・・も見えき。頼むにつけては、恨めしと思ふ事もあらむと、心ながら覺ゆる折々も侍りしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも・・、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむ有樣に見えて、心苦しかりしかば、頼め渡る事などもありきかし。親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそは・・と、事に觸れて思へるさまも、らうたげなりき・・・。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりし頃、この見給ふるわたりより、なさけなくうたてある事をなむ、さるたよりありてかすめ言はせたりける、のちにこそ聞き侍りしか。さる憂き事やあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しく・・侍りしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、をさなき者などもありしに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて、涙ぐみたり。源「さてその文の言葉は」と問ひ給へば、中「いさや、異なることもなかりきや。山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露

見知らぬやうにて 女はそんな事を氣にかけないやうな風をして。

久しきとだえをも 私が久しく通つて行かなくても。

思ひたらず 「もてつけたらむ」にかゝる。思つてゐないやうな顏をしてゐるやうで。

かうたまさかなる人とも かう稀にしか通つて來ない冷淡な男だとも女は思つて居らず。

頼めわたる 末ながくたよりに思はせるやうな口をきいた事もあつた。

さらば さうまでいつてくれるなら、この男こそと。

かうのどけきに この女がかう暢氣にしてゐるので私は安心して。

この見給ふるあたり 右大臣の四の君。

うたてある事 いやな事。怖ろしい事。

さる憂き事や そんなつらい事が夕顔の身の上にあらうとも私は知らず。

をさなき者 娘の玉鬘の事。

さてその文の言葉は その撫子に添へて夕顔から手紙が來たのである。この句によつて頭中將が涙にくれて暫く物を言ひ得ずに居つた事が知られる。

山がつの 私には冷淡なし打をされても、この娘には情をかけてやつて下さい。「露」は頭中將である。撫子をうるほす露である。

例のうらもなき 例によつて女は頭中將に隔心はないものの。

蟲のねにきほへる 蟲の音に劣らず頻りに聲立てて泣いてゐる樣子。

咲きまじる 前栽に咲きまじつて居る花は何れも優劣はないが卽ち親の夕顏も娘の玉鬘も兩方とも可愛いが、やはり床夏卽ち夕顏の方がよけいに可愛い。

鬘をだに 古今夏「塵をだにすゑじとぞ思ふ植ゑしよりいもとわがぬる床夏の花」

うち拂ふ 塵を拂ふ袖も君のとだえがちなる爲に涙に濡れがちな所へ又嵐までが吹き添ふ秋が來ました。「嵐吹きそふ」は四の君の所爲をほのめかしてある。男心に飽きが來た意。

つらきをも 頭中將のとだえのつらさをも。その女は私の無情を痛切に感じて居ると私から思はれるのを非常に心苦しく思つて居たので。

はかなき世にぞ 見るかげもない狀態で漂浪して居るだらう。

あはれと思ひし 私がその女に愛情を持つて居つた間に。

煩はしげに うるさい程に附纏ふ樣子が見えたら。

斯くも かうも漂浪はさせまいものを。

さるものにしなして 本妻とまでは行かなくてもそれ相當な對遇をして。

この歌で思ひ出したので思ひいでしままに、女の家にまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いと物思ひがほにて、荒れたる家の、露しげきを眺めて、蟲のねにきほへる氣色、昔物語めきておぼえ侍りし。

頭中咲きまじる花は何れとわかねどもなほ床夏に如く物ぞなき

娘の事はあとまはしにして大和撫子をばさしおきて、まづ、塵をだに、娘よりは夕顏の方が可愛いなど親の心を取る。

夕顏うち拂ふ袖も露けきとこなつに嵐吹き添ふ秋も來にけり

大したことでもないやうな言ひ方をして心底からはかなげにいひなして、まめ〳〵しく恨みたるさまも見えず。涙を漏らしおとしても、いと恥かしく、つつましげにまぎらはし隱して、頭中將の無情をつらきをも思ひ知りけりと私に見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、私は氣樂に思つて心やすくて、又とだえおき侍りし程に、女は跡もなくこそかきけちて失せにしか。もしその女がまだ世にあらば、通つて行かずに居つた間にはかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、煩はしげに思ひまつはす氣色見えましかば、斯くもあこがれさざらまし。こよなきとだえ置かず、さるものにしなして、長く見るや長く世話する道もあつたらうも侍りなまし。かの撫子のらうたく侍りしかば、いかで尋ねむと思ひ給ふるを、今にえこそ聞きつけ侍らね。これこそ宣ひつるはかなきためしなンめれ。つれなくてつらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、やくなき片思ひなりけり。今やう忘れゆくきはに、かれはたえしも思ひ離れず、をり〳〵、人やりならぬ胸こがるる夕もあらむと覺え侍り。これなむ、保つまじく頼もしげなき方なりける。されば、かのさがなものも、思ひ出の種のある女として忘れがたいが思ひ出されないたよりない頼類の女だは、煩はしく、ようせずば飽きたきこともありなむや。ことのねすすめりけむかどく〳〵しさも、すきたる罪おもかるべし。この夕顏の事どうなんだらうの心もとなきも、疑ひ添ふべければ、何れと遂に思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や。ただ斯くぞとり〳〵にくらべぐるしかるべき。このさま〳〵のよき限りを取り具し、難ずべき非難すべき點のない女はどこにもないきくさはひまぜぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひ

人やりならぬ 自ら求めて戀に惱んで居る夕べもあらう。

かのさがなもの あのやかましや卽ち指喰女の事。

さしあたりて 現に夫婦關係を續けて居る場合には。

煩はしく 嫉妬深い女だからうるさくて。

ことのね ことの上手な才氣走つた女卽ち木咕の女の事。

疑ひ添ふべければ 夕顏は頼りない女で本心が分らぬから、外に男でもあるのかと疑ひをかけられるのである。

何れと遂に 結局どれが一番よい女だとも判定が出來なくなる。これが世の中といふものだ。

これこそ宣ひつる この女こそ先刻左馬頭がいはれた頼りない女の適例だらう。

つれなくて その女が平氣を裝ひながら心中には私を恨めしいと思つて居つたのを知らずに。

斯くぞとり〳〵に 以上のやうに各自一長一短があつて比較に困難だ。

吉祥天女 帝釋天の女で容貌端嚴な天女であると。

法氣づきくすしからむ 佛くさくて陰氣くさい點が困りものだらう。「くすし」は動詞「クスム」と同根であらう。

なてふ事か 何の聞くだけの値打のある話がありませうぞ。

頭の君 頭中將。

文章の生 文人とも進士ともいふ。大學頭の試驗に通過して擬文章生となり、それが省試を受けて及第したものを文章生といふ。

才のきは 學才の程度。

口あかすべく 口をきかせない程であつた。

主人わが二つの道 ある博士をさす。文集秦中吟十首の中の議婚「主人會二良媒一罷レ酒滿三玉壺一四座且勿レ飲、聽ニ我歌二兩途一富家女易レ嫁、嫁早輕二其夫一貧家女難レ嫁、嫁晚孝二於姑一」聞えごち ごちは「言」を働かせたもの。

かけむとすれば、法氣づきくすしからむこそまたわびしかりぬべけれ」とて、皆笑ひ給ひぬ。

中「式部がところにぞ氣色ある事はあらむ。すこしづつ語り申せ」と責めらる。式「下が下のなかには、な・でふ事か聞召しどころ侍らむ」といへど、頭の君、まめやかに、「早く話せおそし」と責め給へば、何事を・取り申さむと思ひめぐらすに。式「まだ文章の生に侍りし時、かしこき女のためしをなむ見給へし。かの馬頭の申し給へるやうに、公事をもいひあはせ、私向の處世上の心得を私ざまの、世に住まふべき心掟を思ひめぐらさむかたもいたり深く、才のきは、なまなまの博士恥かしく、すべて口あかすべ・くなむ侍らざりし。それは、ある博士のもとに、學問などし侍るとてまかり通ひしほどに、主人のむすめども多かりと聞き給へて、一すした饗舍にはかなきついでに言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、盃もていでて、『わが二つの道うたふを聞け』となむ聞えごち侍りしかど、私をさ〳〵

霞鬢の語らひにも 「教へて」を修飾する。

身の才つき 私の學問が進み又朝廷に奉公するに必要な理窟ばつた事を私に教へて。

いと清げに さつぱりと。手紙も漢字ばかりで書いて一字も假名を交ぜてゐない樣を形容していつた語。

うべ〳〵しく 文章もしかつめらしいいひまはしをするので。

腰折文 下手な詩。

妻子 家族の事。

無才の人 私のやうな無學の人間は、不體裁な振舞などを見られさうで。

はかなし口惜しと つまらぬ、殘念だと一方では思つて居ながら。

ただわが心に男しもなむ それでもたゞ自分の氣に入り前世の緣に引かれる點もあるやうだから。男といふものはわけもないものだと思はれます。

すかい給ふを 皆がおだてるのを。

心は得ながらは承知の上で。 おだてられると

うちとけてもまからず、かの親の心を憚りて、さすがにかかづらひ侍りし程に、いとあはれに思ひ後見、寢覺の語らひにも、身の才つき、朝廷に仕うまつるべき道々しき事を教へ・て、いと清げに、消息文にも假字といふものを・・・・〳〵書きまぜず、うべ〳〵しくいひまはし・・侍るに、おのづからえ罷り絶えで、そのもの・を師としてなむわづかなる腰折文つくることなど習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、・なつかしき妻子とうち頼むに、むざえの人、なまわろならむ振舞など見えむに、恥かしくなむ見え侍りし。まいて君だちの御ためには、さしもば・か〳〵・し・く、したたかなる御後見は、何にか・せさせ給はむ。はかなし口惜しとかつ見つつも、ただわが心につき、宿世の引くかた侍るめれば。男しもなむ子細なきもの・は侍るめる」と申せば、殘りをいはせむとて、中「さて〳〵をかしかりける女かな」とすかい給ふを、心は得ながら、鼻のわたりおごめきて語り

いと久しく 其後大分長らくその女の所に行かずに居りました所。が、何かの序に立寄りました所。

世のだうり 男女の道を心得て居つて。

はやりかにて 早口で。

極熱の草藥 蒜の事。蒜は解熱劑になる。

立ちいで侍るに 女の家を立去らうとしますと。

はた 返事しないのも氣の毒とは思つても、それでも。

げに 如何にも女のいふ通り。

なす。式「さていと久しくまからざりしに、物のたよりに立寄りて侍れば、常のうちとけ居たるかたには侍らで、心やましき物越にてなむ逢ひて侍りし。ふすぶるにやと、をこがましくも、又よきふしなりとも思ひ給ふるに、このさかしびと、はたかろがろしきものゑんじすべきにもあらず。世のだうりを思ひ取りて、恨みざりけり、聲もはやりかにていふやう、『月頃風病おもきに堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによりなむ、え對面賜はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむ雜事らは承らむ』と、いとあはれにうべ〳〵しくいひ出で侍り。いらへに、何とかはいはれ侍らむ。ただ、『承りぬ』とて、立ちいで侍るに、さう〳〵しくやおぼえけむ、『この香失せなむ時に立寄り給へ』と高やかにいふを、聞きすぐさむもいとほし、暫し立ちやすらふべきにはた侍らねば、げにその匂ひさへ花やかに立ち添へるもすべなくて、逃げ腰になつて、逃目をつかひて、

ささがにの この歌は古今二十の「わがせこが來べき宵なりささがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」の歌によつたもので、私の來る事も分つて居る筈の夕暮であるのに、書の間を猶豫してくれといふのはわからぬ話だ、今は現に夕暮であるから、夕暮を猶豫してくれといふのならばわかつてゐるけれども。

逢ふ事の 毎晩逢つてゐる間がならば、蒜の香のする書間に逢つても何のきまりわるい事がありませう。併し疎い仲だから。

おいらかに そんな女を妻にする位ならば、おとなしく鬼と差向の方がよい。

おりぬ 退座した。河内本の方がよく聞える。

三史 史記漢書後漢書。

五經 詩經書經易經春秋禮記。

『ささがにの振舞著き夕暮にひるまずぐせといふがあやなさいかなることつけぞや』と言ひも果てず、走りいで侍りぬるに、追ひて、

逢ふ事の夜をし隔てぬ中ならばひるまも何か眩ゆからまし

賢女だけあつてさすがに口疾くなどは侍りき」と、しづ〳〵と申せば、君だち、あきれてあさましと思ひて、「そらごと」とて笑ひ給ふ。君達「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけきこと」と、爪彈をして、

「いはむ方なし」と、式部をあはめ憎みて、

「すこしよろしからむ事を申せ」と責め給へど、式「これより珍らしき事はさぶらひなむや」とてをりぬ。

馬「すべて男も女も、わろものは、わづかに知れるかたのことを、殘りなく見せつくさむと思へるこそ、いとほしけれ。三史、五經の道々しきかたを、あきらかに悟りあかさむこそ、愛

などかは　女だからとて、何で公私上の世事に關して全く知らず理解して居らぬといふ事があらうぞ。

かどあらむ人　才氣ある女。

耳にも目にも　漢學が見聞に入る事も自然多からう。

さるままには　漢學に通じてゐるにまかせて。

眞字　漢字。

さるまじきどちの　さうはすまじき女同志の手紙に。女子は漢字を用ひないのが常であつたから、漢字を用ひてはならぬ女の手紙といつたのである。

なかば過ぎて　半分以上四角な文字で書いてあるのは。

書きすくめたる　假名を用ひなければ文章が短くなるから、書きすくめたといつたのである。

あなうたて　漢字がちに書いた手紙を見ての他人の感じ。あゝいやだ、この人が、こんなぎごちない事をせずにしなやかであつたらよいに。

心地には　書く人の心地には、そんなにぎごちなく感じないであらうが。

さるべき節會　然るべき節會、例へば五月の節會に。

さつきのせち　五月五日に宮中で行はれる節會。武德殿に行幸せられ群臣に酒を賜ひ六府騎射を行ふ。

あやめ　分別の意味の文目に菖蒲がかけてある。我が泣く菖蒲の根をからませてよみ。

菊の露を　菊の露を涙の露にこじつけて詠む。

つきなきいとなみにあはせ　心にゆとりのない折に不似合な忙しい目にあはせ。

さならでも　さういふ節會の日でなくても。

なか〳〵　氣がきいてゐるやうで却つて。

その折につきなく　時を得て居なかつた爲に。

などかはさても　小櫛「などかは斯かる事はせん、さてもあれかしといふ意なり」そんな事はすべきでない。その儘にしておく方がよいと思はれるやうな時と場合との見わけのつかぬ心では。

過ぐすべくなむ　いひ殘しておくべきもののやうに考へる。

これは　藤壺。

怪しきことどもに　この品定も結局は一定の結着を見ないで、最後は妙な話になつて一夜を明してしまはれた。

敬なからめ。などかは、女といはむからに、世にある事の公私につけて、むげに知らず至らずしもあらむ。わざと習ひまなばねども、すこしもかどあらむ人の、耳にも目にもとまること自然におほかるべし。さるままには、眞字を走り書きて、さるまじきどちの女文に、なかば過ぎて書きすくめたる、あなうたて。なり、このひとのたをやかならましかば、と見ゆかし。心地には、さしも書きすくめむと思はざらめど、自らこは〳〵しき聲に讀みなされなどしつつ、殊更びたり。これは上臈のなかにもおほかる事ぞかし。歌よむと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしき古歌をも、はじめより取りこみつつ、折々よみかけたるこそ物しきことなれ。返しせねばなさけなし。せちに、急ぎまゐるあした、何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根を引きかけ、ここぬかの宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらし、暇なきをりに、菊の露をかこちよせなどやうの、つきなきいとなみにあはせ、さならでも、おのづから、げに、後に思へば、をかしくもあはれにもあンべかりける事の、その折につきなく、目にもとまらぬなどを、推し量らずよみいでたる、なか〳〵心おくれて見ゆ。よろづの事に、などかは、さても、と覺ゆる折柄、時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみなさけだたざらむなむ目やすかるべき。すべて、心に知れらむ事をも、知らずがほにもてなし、いはまほしからむこと・をも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあンべかりける」などいふにも、君は、人一人の御有樣を心のうちに思ひつづけ給ふ。これは、足らず又さしすぎたる事なく物し給ひけるかなと、ありがたきにも、いとど胸ふたがる。いづかたに寄り果つともなく、はて〳〵は、怪しきことどもになりて明かし給ひつ。

おほ殿の御心　身の左大臣にすまないので。**大方の氣色**　邸内一帶の樣子。**人のけはひ**　葵上の樣子。

これこそは　この葵上こそは。**かの人々の**　馬頭等が「偏に物まめやかに靜なる心のおもぶきならむよるべをぞつひの頼みどころには思ひおくべかりける」などいつた事。**恥かしげに**　源氏の方で氣恥かしく思ふ程取りすまして居られるので。**中納言の君中務**　兩人とも葵上の侍女で源氏の思ひ人。

御几帳隔てて　源氏がくつろいでゐられるので左大臣が斟酌しての行動である。**中神**　天一神。この神が天上の中央にある十六日間を天一天上といつて四方に塞がりがないが已酉の日から以後四方に五日づつ、四隅に六日づつ都合四十四日間巡行する。其間此神のある方を塞がりとして、其方に出あるきする場合は方違をせねばならぬ。**うちよりは**　左大臣邸が禁中から塞がりの方向に當つて居た。

からうじて、品定の翌日　今日は日の天氣模樣　氣色もなほれり。源氏が宮中に引籠つてのみかくのみ籠りさぶらひ給ふも、おほ殿の御心いとほしければ、左大臣邸にまかで給へり。大方の氣色（有樣）も、人の（御）けはひも、はつきりとしてけざやかにけだかく、瀟洒たる所まじらず、（うしやかに）なほこれこそは、左馬頭等かの人々の捨てがたく取りいでしまめびとには頼まれぬべけれ、とお（も）ぼすものから、例にあゆた世話女房として頼りにならう葵上の端麗な樣子。あまりうるはしき御有樣の、打解けにくく解けがたく恥かしげに（とのみ）思ひしづまり給へるを、葵上のさま　源氏の心に　さう〳〵しく（思ほし）て、中納言の君、中務などやうの、十人並以上の若女房達に　おしなべたらぬ若人どもに、たはぶれごとなど宣ひつつ、暑さに亂れ給へる源氏の御有樣を、見るかひありと（皆）思ひ聞え女房達の心に　左大臣も源氏の方に　おとども渡り給ひて、うちとけ給へれば、源氏が　左大臣が物越で　御几帳隔てておはしまして、御（み）物語聞え給ふを、源「暑きに」と、にがみ給へば、女房達　人々笑ふ。源「あなかま」とて、脇息（けふそく）に寄りおはす。氣のはらない　いと安らかなる御振舞なりや。

暗くなる程に、「今宵、中神、禁中　うちよりは（こなたは）塞がりて侍

中川　京極川。賀茂川を東川、桂川を西川といふのに對する。

牛ながら　牛をかけた儘で車を引き入れ得る場所へ行きたい。**忍び〳〵の御方違所**　源氏の愛人は他に澤山あらうが。**方塞げて**　生憎方塞がりの日にやつて來て、方違をするにかこつけて他所へ行つたと左大臣から思はれるのも氣の毒なのであらう。**紀伊守に**　今夜そちらに行くからと紀伊守に内命があつたのである。**移れる頃にて**　「なめげなる」にかゝる。家が狹いから、女房たちの部屋と源氏の部屋とが近くて禮を失することがあるかも知れぬの意。**下に歎く**　内々心配してゐる。**ただ**　「うしろ」を修飾する。直ぐ後に。

りけり」と（人々）聞ゆ（る）。源「さかし、例も（避ける方角）忌み給ふかたなりけり。源氏の里邸　二條の院にも禁中から遣筋で　同じすぢにて、どちらへ方違をしよう　いづくにかたがへむ。（大儀）と惱ましきに」とて、大殿籠れり。「いとあしき事なり」とて（お伴）の誰彼が　從者　紀（き）伊（の）守（かみ）にて　源氏に　親しく（う）仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、此頃水せき入れて、涼しき蔭に侍る」と聞ゆ（れば）。源「いとよかなり。なやましきに、牛ながら引き入れつ（て）（おりぬ）べからむ所を」と宣ふ。忍び〳〵の御方違所（おんかたがへどころ）は、あまたありぬべけれど、久振に左大臣邸に來たのに　久しく程經てわたり給へるに、方塞げて、引きたがへ外（はか）ざまへとおぼさむは、左大臣に對して　いとほしきなるべし。紀伊守に仰言（おほせごと）賜へば、承（紀伊守は）りながら、源氏の前を退出　しぞきて、紀「伊豫守（紀伊守の父）の朝臣の家につつしむこと侍りて、女房なむ（紀伊守方に）まかり移れる頃にて、せばき所に侍れば、無殿　なめげなる事や侍らむ」と、下（した）に嘆く（氣色）を聞き給ひて、源「その人ぢかからむなむ嬉しかるべき。女どほき旅寢は（人の大勢居る所がよい）物怖ろしき心地すべきを、ただその（女房達の）几帳のうしろに（を）」と宣へ

いと忍びて 内證にしておいてくれ。わざと大袈裟でない所を探して行くのだから。

おとどにも 紀伊守方に行く事を左大臣にも知らせず。

守 紀伊守。

假初の御しつらひ 間に合せの設備。

そこはかとなき どこに啼いてゐるともない。夏ではあるが、こゝは涼しいのでもはや蟲が鳴き始めてゐる。併しまださすがにその聲は少かつたのである。中川の邸の涼しさを示す爲の筆である。

人々 御供の人々。

主人も 亭主の紀伊守も御馳走調達の爲に奔走して居る折。風俗玉垂れの小がめを中にすゑて、主はもや、肴まぎに、肴とりに、こゆるぎの磯の和布刈りあげに一こゆるぎの磯は相模國中郡餘綾郷。

かの中の品に 品定の折に馬頭が中流として擧げたのはこんな階級の事だらう。

ば、人々「げによろしき御座所にも」とて、使を紀伊守方に人走らせやる。源「いと忍びて。殊更にことゝ〳〵しからぬ所を」と、急ぎいで給へば、左大臣おとどにも聞え給はず、御供にも、睦まじき限りして紀伊守方へおはしましぬ。

守、「俄に」とわぶれど、源氏の供人も聞き入れず。寢殿のひんがしおもて（を取り）拂ひあけさせて、假初の（おましどころなれどつきづきしく）御しつらひしたり。泉水の趣水の心ばへなど、さる方に、風流にをかしくしなしたり。田舍家だつ柴垣し（渡し）て、前栽など、心とどめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき蟲の聲々（など）聞え、螢しげく飛びまがひて、をかしき程なり。人々（は）、渡殿より下から流れ出てゐる泉を見おろしながらいでたる泉にのぞきゐて、酒飲む。主人も肴もとむと、こゆるぎの磯にいひかけてある急ぎありく程、源氏君はのどやかに眺め給ひて、かの中の品に取り出で（べしと）て、いひし、このなみならむかし、とおぼしいづ。思ひあがれる氣色に聞き出でおき給へる空蟬の事むすめなれば、ゆかしくて、耳とど（き、耳を立てる）め給へるに、この西面（にしおもて）にぞ人のけはひする。衣（きぬ）の音なひ（さやか）、はら〳〵とし（聞え）て、若き（女たちの）聲ども憎からず、さすがに忍びて（物）笑ひなどするけはひ、殊更びたり。格子（かうし）をあげたりけれど、守「心なし」とむづかりて、格子（を）おろしつれば、燈火火ともしたる透影（すきかげ）、障子（衝立の上から）のかみより漏りたるに、源氏が靜に衝立の方にやをら寄り給ひて、見ゆやとおぼせど、隙（ひま）しなければ、暫し聞き給ふに、この近き母屋（もや）につどひ居たるなるべし。女房達の私語するのをうちささめきいふ事どもを聞き給へば、源氏の尊わが御うへなるべし。女房「いといたうまめだちて、まだきにやつきとした北の方がんごとなきよすが定まり給へるこそ、浮氣も出來なくてさう〳〵しかンめれ。されど、さるべき隈には、（い）よくこそ隱れありき給ふなれ」などいふにも、藤壺の事のみおぼす事のみ心にかかり給へれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人がこの秘密を噂してゐるのを聞きこんだら人のいひ漏らさむを聞きつけたらむ時、など覺え給ふ。格別の事もないので ことなる事なければ、聞きさし給ひつ。式部卿の宮の姫君に、朝顏奉り（れ）給ひし歌などを、すこしほほゆが

この西面 源氏の居る寢殿の西に當る部屋で。

さすがに 源氏が居るので。

守 紀伊守が、格子をあげおくのは不注意だと小言をいつて。

透影 隙間から漏れる光。

見ゆや 女の姿が見えるかと。

やんごとなきよすが 葵上といふ身分の高い本妻のある事は。

さるべき隈には 然るべき忍び所には。

式部卿の宮の姫君 桂齋院と申す。桐壺帝―桃園式部卿宮―桂齋院

朝顏奉りし 源氏が桂齋院に朝顏を贈つた時に添へた歌。この事は物語中に書いてはない。

ほほゆがめて 文句などを問違へて。

帷帳も 催馬樂我家「わいへんは、とばり帳をも垂れたるを、君來ませ、御肴に何よけむ、鮑さだをかせよけむ」 **さるかたの** 帷帳のかゝつてゐる殺風景な御寢室の用意がなくては、めざは然るべき御馳走だらう。 **何よけむとも** 何が宜しうどざいませうとも、御伺ひすることも、えうしないで。

いづれかいづれ どの子が誰の子か。 **これは故衛門の督の** 小君の事をいふ。 **いと愛しくし** 父衛門督が可愛がつて居つた。 **かくて侍るなり** 此處にかうして居るのです。

端つかたの御座 下に「奥なる御座」とあるから、これは端近い處に假に設けた御座である。

めて語るも聞ゆ。くつろぎがましく、歌ずしがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかし、とおぼす。守いで來て、燈籠掛け添へ、火あかくかかげなどして、御菓子ばかりま氏にねれり。源「帷帳もいかにぞは。さるかたの心もなくては、めざましきあるじならむ」と宣へば、催馬樂の句何よけむとも、え承らず・かしこまりてさぶらふ。源氏が端つかたの御座に、かりなるやうにて大殿籠れば、供人も人々もしづまりぬ。紀伊守主人の子ども、をかしげにてあり・。童わらはなる殿上殿の間に居る時に上のほどに御覽じ馴れたるもあり。伊豫介の子もあり。あまたあるなかに、いとけはひあてはかにて、空蟬の弟小君の事十二三ばかりなるもあり。源「いづれかいづれ」など問ひ給ふに、紀「これは故衛門の督の末の子にて、いと愛しくし侍りけるを、小君のをさなき程に父におくれ侍りて、空蟬の緣で姉なる人のよすがに、かくて侍るなり。學才ざえなどもつき侍りぬべく、萬更でもないけしうは侍らぬを、殿上殿上なども思う給へかけな

すが〳〵しうは 後見がないので、すら〳〵と童殿上が出來ずに居るのです。 **この姉君や** 小君の姉がお前の繼母か。 **聞召しおきて** 空蟬の噂を記憶して居られて。

不意に 意外にも。空蟬ははからずも伊豫介の妻になつて居るのです。」

君と 空蟬を主君とあがめて居るだらうな。 **いかがはざらむ** 「いかがはかしづかざらむ」の意。 **さりとも** いくら何でも、君等のやうな、似合つた當世男に、空蟬をさげ渡すものか。

下屋 下々の者の居る雜舍。

がら、すが〳〵しうは、えまじらひ侍らざめる」と申す。源「あはれの事や。この姉君や眞人の後の親」。紀「さなむ侍る」と申すに、「似げなき親をもまうけたりけるかな。うへにも聞召しおきて、桐壺帝帝『宮仕にいだし立てむと漏らし奏せしを・、其後空蟬はいかになりにけむ』と、いつぞや宣はせし。男女の緣世こそ定めなきものなれ」など、いとまさせた事をいふおよずけ宣ふ。紀「不意にかくて物し侍るなり。世の中といふもの・は、さのみこそ今も昔も定まりたること侍らね。就中なかについても、女の宿世は、・い・と・きまりがない・浮びたるなむあはれに侍・け・る」など聞えさす。源「伊豫介はかしづくや。空蟬を大切にするか君は私の主とこそは思ひて侍るめるを、すき〳〵しき事と、なにがしより始めて、不釣成うけひき侍らず」など申す。源「さりとも、眞人達のつき〳〵しく今めきたらむに、おろし立てむやは。かの介風流な所があつては、いとよしありて、氣氣とりやだ色ばめるをや」など物語し給ひつつ、源「空蟬は何方に皆下屋におろし侍りぬるを、えやまかりお

えやまかりおりあへざらむ 下屋が狭くて全部はおりきれずに居るのでせう。

この北の障子の 前には母屋に居たのであるが、下屋におりるやうにと言はれても下屋には下りかねて、廂の間に床をとつたのである。母屋をとつたのは源氏への斟酌である。

こなたや新くいふ人の そこが話の女の隠れて居る所だらう。

御心とどめて 下の「立ちぎき給へば」に續く。

物けたまはる 物承るの約。もし〳〵一寸の意。

客人 源氏の事。

いかに近からむと どんなに源氏の御寝所に近からうと心配して居つたが。

妹 空蟬は小君の姉であるが、姉妹共に男の兄弟に對して妹といつた。

ねたう ねたましい、もつと私の事を聞いてくれればよいにと源氏は熱意の足りないのをつまらなく思召す。

り・あへざらむ」と聞ゆ。醉ひ進みて、皆人々簀子に臥しつ・つしづまりぬ。

源氏君は、とけても寝られ給はず、いたづらぶしとおぼさるるに、御目さめて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、こなたや斯くいふ人の隠れたるかたならむ、あはれや、と御心とどめて、やをら起きて立ちぎき給へば、ありつる子の聲にて、

「物けたまはる。いづくにおはしますぞ」と、かれたる聲のをかしきにていへば、

空蟬「此處にぞ臥したる。客人は寝給ひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されど、けどほかりけり」と、いふ。寝たりける聲のしどけなき、いとよく似通ひたれば、妹と聞き給ひつ。

小君「廂にぞ大殿籠りぬる。音に聞きつる御有・様を見奉りつる。げにこそめでたかりけれ」と、みそかにいふ。

空蟬「畫ならましかば、のぞきて見奉りてまし」と、ねぶたげにいひて、顔引き入れつる聲す。

源氏の心ねたう、心とどめても問ひ聞け

あなくるし 湖月本文の異本及び河内本に從つて「くらし」とすべきである。

女君 空蟬。

しもに 中將の君は只今下屋に入浴におりて「直に歸つてくる」といつて居られました。

掛金 襖の兩側に掛金がある。源氏はこちらがはの掛金を引上げて見ると、あちら側の掛金はかけてなかつた。

いとささやかにて 小柄ななりをして寝てゐた。

なま煩はしけれど 源氏は何だか氣が咎めるけれども。

中將召しつれば あなたは中將を召されたので、私も中將の官ゆゑ、私を呼んだのかと、人知れずあなたを卷つて居つたかひのあるやうな氣がして。

かし、と、あぢきなくおぼす。

小君「まろは端に寝侍らむ。あなくるし」とて、火かかげなどすべし。女君は、ただこの障子口す・・ぢかひたる程にぞ臥したるべき。

空蟬「中將の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、物怖ろし」といふなれば、長押のしもに人々臥して答すなり。

女房「しもに・・湯におりて、『只今まねらむ・』と侍り・」といふ。

皆しづまりぬ・るけはひなれば、掛金を試みに引きあけ給へれば、あなたよりはささざりけり。几帳を障子口に・立てて、火・はほ・のぐ・らき・に見給へば、唐櫃だつ物どもを・おきたれば、亂りがはしきなかを分け入り給ひて、けはひしつる所に入り給へれば、ただ一人、いとささやかにて臥したり。

空蟬のさま

・なま煩はしけれど、うへなる衣を押しやるまで、もとめつる人と思へり。

源「中將召しつれば、なる心地して」と宣ふを、

空蟬は何とも分別がつかない

ともかくも思ひわかれず、物におそは

顔に衣のさはりて　前に「上なる衣を押しやる」とあるから、こゝの衣は源氏のかとも思はれるが、それなら「御衣」とあると見るのがよい。**うちつけに**　だしぬけな一時の出來心と思召しませう、それも尤ですが。**更に淺くは**　決して淺い因縁ではないと思つて下さい。**鬼神も**　源氏の美しい有様を見ては鬼神でも荒だつ事はしまいと思はれる御様子であるから。**はしたなく**　無躾に「此處に誰かゐた」などとわめく譯にもいかない。

違ふべくもあらぬ　人違ひをする筈もない慥な心の導きで來たのに。**思はずにも**　意外にも空とぼけるのですね。

いとちひさやかなれば　空蟬は小柄な女だから。

やや　舊註や玉小櫛は中將を呼ぶ詞だと解して居る。

る心地して、「や」（人を呼ぶ聲）とおびえたやうに呼んだが（おびえたやうに呼んだが）も立てず。源「うちつけに、深からぬ心の程と見給ふらむ、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも、聞え知らせむとてなむ。かかる折を待ちいでたるも、更に淺くはあらじと思ひなし給へ」と、いとやはらかに宣ひて、鬼神も荒立つまじき御けはひなれば、はしたなく、「此處に人」とも、えののしらず、心地はたわびしく、あるまじき事と思へば、あさましく、空蟬「人たがへにこそ侍るめれ」といふも息の下なり。消えまどへる氣色、いと心苦しくらうたげなれば、をかしと見給ひて、源「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめい給ふかな。すきがましきさまにはよに見え奉らじ。思ふこと、すこし聞ゆべきぞ」とて、いとちひさやかなれば、かき抱きて、障子のもとに出で給ふにぞ、もとめつる中將だつ人來あひたる。源「やや」と宣ふに、怪しくて探り寄りたるにぞ、いみじく匂ひみ

（人を呼ぶ聲）（おびえたやうに呼んだが）（聲が出ない）（年來あなたを思ひ續けて來た私の心の内を）（かうした好機會を得たのも）（浮氣）（空蟬を）（障子）（空蟬の氣）（死ぬほど遠方にくれて居る空蟬の）（空蟬）（源氏）（源氏は心中に）（中將が）（源氏の衣の香）

あさましう　以下中將の心。

それだに人の　よし普通の人でも、かういふ事實を大勢が知るといふ事はどんなものだらう。

動もなくて　源氏は平氣で。

曉に御迎へに　明朝空蟬を迎へに來よ。

女はこの人の　空蟬は中將の思はくまでが死ぬ程つらいので。

れいのいづくより　源氏がいつも他の女になさるやうに絲でも繰り出すやうにつきづきしくひなすさまである。

とうで　「取りいで」の音便。

あはれ知るばかり　女が感動する程情愛深さに。

おぼしくだしける　「下し」「朽し」「腐し」などの說があるが「下し」と見るがよからう。河内本にも「下」と傍書してある。思つて下さつた。

思ふ給へざらむ　「思ふ給へむ」とあるべき所。淺く思ひませうやと解かねばならぬやうに思ふ。

際は際とこそ　貴人は貴人、賤者は賤者と、互に似合の緣がある。私のやうな卑しい身分の者には、身分相應の緣といふものがございます。

ちて、顔にもくゆりかかる心地するに、（中將の顔に衣の香が）思ひよりぬ。（源氏と氣付いた）あさましう、こはいかなる事ぞ、と思ひ惑はるれど、聞えむかたなし。なみ〳〵の人ならばこそ、荒らかにも引きかなぐらめ。それだに人のあまた知らむは、いかがあらむ。心もさわぎて慕ひ來たれど、動もなくて、奥なる御座に入り給ひぬ。障子を引き立てて、源「曉に御迎へに物せよ」と宣へば、女は、この人の思ふらむことさへ死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いとなやましげなる、いとほしけれど、（源氏の心に）（何）（れいのいづく）（取出）よりとうで給ふ言の葉にかあらむ、あはれ知るばかり情々しく宣ひつくすべかめれど、なほいとあさましきに、（情合のわかるやうに）（空蟬）「うつつとも覺えずこそ。かずならぬ身ながらも、いかが淺くは思う給へざらむ。いとかやうなる際は際とこそ侍るなれ」とて、かくおし立ち給へるを、深くなさけなく憂しと思ひ入りたるさまも、げにいとほし

（中將は心配しながらついて來たが）（中將をさす）（つまらぬ私ですが）（いと斯く）（られ）（無理わざなさるのを）

その際々を その戀も身分々々といふ事もまだ辨へぬ初心の振舞なのです。

おのづから 自然私といふ者の人柄を聞かれる事もあらうが。

あながちなる 無理やりな浮氣心は嘗て持つた事はないのに。

げに斯くあはめられ あなたから輕蔑されるのも當然だと思はれる程に氣が轉倒して居るにつけても。

人がらの 空蟬は人柄が柔和である所へ、强情な心を强ひて附け加へたので。

まことに心やましくて 空蟬は心から氣がむしやくしやして。

あながちなる御心ばへ 無理無體な源氏の御心を。

く心恥かしきけはひなれば、源「その際々を、まだ思ひ知らぬ初事ぞや。なか〳〵おしなべたるつらに思ひなし給へるなむ、うたてありける。おのづから聞き給ふやうもあらむ、あながちなる好色心は更にならはぬを、さるべきにや、げに斯くあはめられ奉るもことわりなる心惑ひを、みづからも怪しきまでなむ」など、まめだちてよろづに宣へど、いとたぐひなき御有樣の、いよ〳〵打解け聞えむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見え奉るとも、さるかたのいふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人がらのたをやぎたるに、强き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、あながちなる御心ばへを、いふかたなしと思ひて泣くさまなど、いとあはれなり。心苦しくは、あれど、見ざらましかば口惜しからまし、とおぼす。

憂き身の程の 受領の妻などと不遇な身分の定まらぬ昔ながらの身で。出所不明「取返すものにもがな世の中をありしながらの我が身と思はむ」

かかる御心ばへを こんな御深切を頂いたなら。

あるまじきわれだのみにて けしからぬ自惚ではムいますが、今はとにかく、後には今と違つて眞に愛して頂かれる時もあらうかと思ひ慰めませうものを。

かりなる浮寢 假初の浮寢。

見きと 古今戀五「それをだに思ふ事として我宿を見きとな言ひそ人の聞かくに」

げにいとことわりなり これは作者の空蟬の態度に對する批判であり、同情である。紫式部も人妻として當然なことをいつてゐるのである。

女などの 女の方達なら急ぎ歸るもよからうが。

覺えなきさまなる 思ひがけず不意に逢ふのが却つて緣があるのだと思ふがよからう。

慰めがたく憂しと思へ・れば、源「など・・斯く疎ましきものに覺えなきさまなるしもこそ契りあるとは思ひしもおぼすべき。覺えなきさまなるしもこそ契りあるとは思ひ給はめ。むげに世を思ひ知らぬやうに、おぼほれ給ふなむいとつらき」と恨みられて、空蟬「いと斯く憂き身の程の定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわれだのみにて・・・見直し給ふ後瀨もやと思ひ給へ慰めましを、いと斯う・・・かりなる浮寢のほどを思ひ侍るに、たぐひなく思う給へ惑はるるなり。よし、今は見きとなかけそ」とて、思へるさま、げにいとことわりなり。おろかならず契り慰め給ふこと多かるべし。鳥も鳴きぬ。人々起きいでて、人々「いといぎたなかりける夜かな。御車引きいでよ」などいふなり。守もいで來て、紀「女などの御方達こそ。夜ぶかく急がせ給ふべきかは」などいふ。源氏君は、又かやうのついであらむ事もいと難し、さしはへてはいかでか。御文なども通はむことのいとわり

許し給ひても　空蟬をお放しになつても。

いかでか　どうして手紙をあげよう。

世に知らぬ　世に類もないあなたの無情も又私の愛情も、共に浅くない二人の間の思出は、それ〳〵に珍らしい例ですね。

さま〳〵　空蟬の心のつらさとあはれとを指してそれ〳〵といつたのである。さま〳〵は種々の意味ではない。

心あわただしくて　源氏は氣が落着かなくて。

つれなさを　あなたの無情を恨み足りない内に夜明になつてしまつたが、鶏はとるものもとりかねるほどになぜ性急に私を起すのでせう。

すく〳〵しく心づきなしと　平素は不粋で氣にくはぬ男だと輕蔑してゐる伊豫にゐる夫の事ばかりが思ひやられて。

身の憂さを　身の不遇を歎き足らぬ間に夜が明けたので、歎きの上に夜があけた事の歎きまでも取重ねて聲を立てて泣いた事でございます。

事とあかくなれば　ずん〳〵明るくなるので。

障子口まで　源氏が空蟬を襖の出入口まで見送られた。

隔つる關と　締めた襖が隔ての關のやうに思へた。伊勢物語「彦星に戀はまさりぬ天の川隔つる關を今はやめてよ」

なきをおぼすに、いと胸痛し。奥の中將も出で・て、いと苦し（迷惑がる）がれば、許し給ひ（う）ても、また引き（空蟬を）とどめ給ひつつ、源「いかでかの思ひいでは、さま〳〵珍らかなるべきためしかな」とて、うち泣（咲）き給ふ（源氏の）御氣色、いとなまめきたり。鶏もしば〳〵鳴くに、心あわただしくて、

源氏　つれなさ（き）を恨みも果てぬ東雲（しのめ）にとりあへぬ（取に鶏をきかせたもの）まで驚かすらむ

空蟬　女、身の有様を思ふに（も）、いとつきなく（不似合に恥かしい）まばゆき心地して、深め（は・・・）すく〳〵しく（う）心づきなしと思ひあなづ・る（ら・る）伊豫のかたのみ思ひやられて、夢に（この秘密が夫の夢に）や見ゆらむと、そら怖ろしく（氣がひける）つつまし。

空蟬　身の憂さを歎くに飽かで明る（あく）夜は取重ねてぞ音（ね）もなかれける（取に鶏をきかせたもの）

源氏　事とあかく（う）なれば、障子口まで送り・給（し）ふ。内も外も人騒がし（う・あわたし）・・・・・・ければ、襖を引き立てて別れ給ふほど、源氏の心細く、隔つ

そそきあげて　そゝくさと忙しさうに格子をあげて。

小障子　せの低い衝立。

好色心　浮氣な女房達。

出て給ひぬ　紀伊守の邸を。

殿　左大臣邸。

とみにも　源氏は急には寢つかれず。

すぐれたる事はなけれど　以下空蟬の事を源氏が思ひやるのである。

この程は　源氏は此頃左大臣邸にのみ居られる。

る關・（の）と見えたり。御直（源氏が）衣など着給ひて、みゝなみの勾欄（こうらん）に暫しうち眺め給ふ。西面の格子そ（し）そきあげて、人々（女房達が）のぞくべかめり。簀子の中（なか）の程に立てたる小障子（さうじ）のかみ（上）より、ほのかに見え給へる御（源氏の）有様を、身にしむばかり思へる好色心（すきごころ）どもあ・・・（べか）めり。月は有明にて、光（光は消えたが月の形ははつきり見えて）をさまれるものから、影・（顔）・さやかに見えて、なか〳〵をかしき曙なり。何心・（も）なき空の氣色も、只見る人から・（所がら）・・・・、艶（えん）にも凄くも見ゆるなりけり。人知れぬ御（源氏の）心には、いと胸いたく、（空蟬に交通すべき術）ことづてやらむよすがだになきをと、顧みがちにて出で給ひぬ。

殿に歸り給ひても、とみにも・まどろまれ給はず。又あひ見るべき方なきを、まして・（れに）かの人（空蟬の心中を）の思ふらむ心（事）のうちを、・・・（まして）・いかならむと心苦しくおぼしやる。（苦しくないやうにとりなしてゐる中流だ）やすくもてつけてもあり（空蟬には格別の美點はないが）すぐれたる事はなけれど、目（見）人（馬頭の事）のいひし事はげに、と、おぼしあはせられけり。この程は（殘らず經驗した）隈なく見あつめたる中（なか）の品かな、

かき絶えて　其後すつかり空蟬に無沙汰してゐるので。

中納言の子　前に「故衞門の督の末の子」とあつた。故衞門督で、中納言兼右衞門督であつたのであらう。

うへにも　私の手から童殿上させてやらう。

姉なる人　空蟬。

その姉君は　空蟬には、子供があるかの意。空蟬の子は紀伊守の異母弟になる譯である。

朝臣　お前の意。

かくて物し　かく父の妻になつて居りますが。

親のおきてに　空蟬の親は空蟬を宮仕にと思つて居つたのに、圖らずも受領の妻となつたから。

けしうは　不器量でもないでせう。

世のたとひにて　繼子は繼母に親しまぬといふ世間のならはしで。

こまやかに　何から何まで美しいといふ譯ではないが。

ほ・殿にのみおはします。なほいとかき絶えて、思ふらむ事のいとほしく御心にかかりて、苦しくおぼしわびて、紀伊守を召したり。「かのありし・中納言の子は、得させてむや。らうたげに見えしを、身・ぢかく使ふ・・・・人にせむ。うへにもわれ奉らむ」と宣へば、「いとかしこき仰言に侍るなり。・・姉なる人に宣ひ見・む」と申す・も、胸つぶれておぼせど、「その姉君は、朝臣の弟やもたる」。「さも侍らず。この二年ばかりぞかくて物し侍れど、親のおきてにたがへりと思ひ歎きて、心ゆかぬやうになむ聞き給ふる」。・・「あはれの事や。よろしく聞えし人ぞかし。まことによしや」と宣へば、「けしうは侍らざるべし。もてはなれて疎々しう侍れば、世のたとひにて、むつれ侍らず」と申す。

さて五六日ありて、この子ゐてまゐれり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あてびとと見えたり。召

妹の君　姉君の意。

恥かしげに　きまりのわるい程落着いて居るので。

うちいでにくし　空蟬の事がいひ出しにくい。

かかる事こそはと　かういふ關係があるのだなと、朧氣ながら氣附くにつけても意外ではあるが。

見し夢を　逢瀬が又もあらうかとはかなかつた別れを思ひ歎いてゐる間に、二人が逢へないばかりか、目さへあはずに日數が過ぎてしまつた。「見し夢を」は「歎く」につゞく。

寢る夜なければ　出所不明「戀しさを何につけてか慰めむ夢にも見えずぬる夜なければ」

目もきりて　空蟬は涙に目も曇りふさがつて。

たがふべくも　人違ひらしくもおつしやらなかつたのに。

いかがはさは　何でそんな事が申上げられませう。

し入れて、いとなつかしく語らひ給ふ。童心地に、いとめでたく嬉しと思ふ。妹の君のことも、委しく問ひ聞き給ふ。さるべき事はいらへ聞えなどして、恥かしげにしづまりたれば、うちいでにくし・・・。されど、・・いとよくいひ知らせ給ふ。かかる事こそはと、ほの心得るも思ひのほかなれど、幼心地に、深くしもたどらず、御文をもてきたれば、女あさましきに、涙もいで來ぬ。この子の思ふらむ事もはしたなくて、さすがに御文を面隠しにひろげたり。いと多くて、

「見し夢をあふ夜ありやと歎くまに目さへあはでぞ頃も經にける

寢る夜なければ」など、目も及ばぬ御書きざまも・・、・・・・・目もきりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひつづけて、臥し給へり。またの日小君召したれば、參るとて、御返り・乞ふ。「かかる御文見るべき人もなしと聞えよ」と宣へば、うちゑみて、「たがふべくも宣はざりしものを、いかが

心やましく　不快な氣がして。

さばな參り給ひそ　それでは源氏の方に參りなさるな。

この繼母　空蟬の事。

つゐしよう　追從。

なほあひ思ふまじき　矢張お前は私が思つて居る程には私を思はないのだらう。

いづら　どこの意ではない。促す意味の感動詞。

あこ　お前。

先に見し　私は伊豫介より先に空蟬に逢つた人だ。

はさは申さむ」といふに、心やましく、殘りなく宣ひ知らせけると思ふに、つらきこと限りなし。空蟬「いで、およすげたる事はいはぬぞよき。よし、さばな參り給ひそ」とむつかられて、小君「召すにはいかでか」とて參りぬ。紀伊守好色心に、この繼母の有樣を、あたらしきものに思ひて、つゐしようし寄る心なれば、この子をも、もてかしづきゐてありく。君召しよせて、源「昨日待ち暮ししを、なほあひ思ふまじきなめり」と怨じ給へば、顏うち赤めて居たり。源「いづら」と宣ふに、しかくと申すに、源「いふかひなの事や。あさまし」とて、又も賜へり。源「あこは知らじな。その伊豫の翁よりは、先に見し人ぞ。されど、頼もしげなく頸ほそし、とて、ふつつかなる後見まうけて、かくあなづり給ふなめり。さりとも、あこはわが子にてをあれよ。かの頼もしびとは、行く先みじかかりなむ」と宣へば、小君の心さもやありけむ、いみじかりける事かな、と思へるを、

この子をまつはし　小君を側に引附けておかれて。

わが御匣殿　源氏個人の裝束調進所。

御文は常に　源氏から空蟬のもとに。

この子も　小君も子供の事だから、うつかりロをすべらしなどすると、世間で君との關係をとやかくいはれる上に、子供に手紙を託したのは輕率だといふ誹りさへ附け加へるであらう所のわが身に對する世評を考へて見ると、かうした戀をつゞけることは、人妻である自分には似合はない事と自覺してゐるので。

ほのかなりし　先夜ほのかに拜した源氏の容姿態度はいかにも下さるらしく、ほり心から愛して思はれたが。

思へりし氣色などの　あの夜空蟬が煩悶して居つた樣子などを氣の毒に思つたが、その風情も忘れるすべなく思ひ續けられる。

とおぼす。この子をまつはし給ひて、禁中にもゐて參りなどし給ふ。わが御匣殿に宣ひて、裝束などもせさせ給ふ。まことに親めきてあつかひ給ふ。御文は常にあり。されどこの子もいとをさなし、心よりほかに散りもせば、かろくしき名さへ取り添へむ身の覺えをいとつきなかるべく思へば、めでたき事もわが身からこそと思ひて、うちとけたる御いらへも聞えず。ほのかなりし御けはひ有樣は、げに、なべてにやはと思ひいで聞えぬには、あらねど、をかしきさまを見え奉りても、何にかはなるべき、など思ひかへすなりけり。君はおぼし怠る時のまもなく、心苦しくも戀しくもおぼしいづ。思へりし氣色などのいとほしさも、はるけむかたなく思しわたる。かるくしく這ひまぎれ立寄り給はむも、人目繁からむ所に、びんなき振舞やあらはれむ、人のためもいとほしく、と思しわづらふ。

さるべきかたの　然るべき方塞がりの日を見付け出して。
俄にまかで　急に禁中を退出するまねして。
遣水のめいぼくと　遣水が氣に入つて來て頂けると思つてゐる紀伊守は、源氏の來訪を遣水の面目と恐縮し喜ぶ。
かくなむ思ひ寄れる　今晩かやう〱する積りだ。
さる御消息　今晩行くといふ通知があつたので。
おぼしたばかりつらむ　工面して來て下さる源氏の志の程は淺くは思はれないが。
さて待ちつけ　此儘源氏のお出をお待ちするのが恥しいから。
いとけぢかければ　此處はお客樣の御座所に近いから、きまりがわるい。
程離れてを　もつと離れて居たい。
中將といひしが　前文に中將といつたあの女房が渡殿に部屋を設けて居つたその部屋を隱れ所として引移つた。
さる心地して　源氏が空蟬の所へ行く用意をして。

れいの、うち（源氏が禁中に）に日かず經給ふころ、さるべき、かたの忌（いみ）待ちいで給ひ（う）て、俄に、まかで（大殿）給ふまねして、道の程（途中から中川の家に）よりおはしましたり。紀伊守（きのかみ）おどろきて、遣水のめいぼくと・・（喜び）かしこまり喜ぶ（る・・）。小君には、晝・・（う方）より、「かくなむ思ひ寄れる」と宣ひちぎれり。あけくれ（源氏は始終小君を手なづけておかれたから）まつはしならし給ひければ、今宵もまづ召し（小君を）いでた・（給ふ）り。女（空蟬）も、さる御消息・（の）ありけるに、おぼしたばかりつらむ程は、淺く（う）しも思ひなされねど、さりとて、うちとけ、人げなき（醜い姿を）有様を見え奉りて・・（はてん）も、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし歎き（先夜の歎の上に又新しい歎を）を又や加へむ、と思ひ亂れて、なほさ・（ま）て待ちつけ（とり）聞えさせむ事の・・（はいと）まばゆければ、小君が出でていぬる程に、（空蟬）「いとけぢかければ、傍痛し。なやましければ、忍びて打ちたたか（肩や腰などを）せなどもせむに、程（へ）離れてを（歎辭）」とて、渡殿に、中將（女房の名）といひしが局（つぼね）したる、隱れ（かくれ場所として）にうつろひぬ。さる心地して、人疾くしづめて御消息（空蟬の方に）あれど、小君、え尋ね（空蟬に）あはず。よろづの所（八方探しあるいて）求めありきて、

いかにかひなしと　源氏は私をどんなに賴みがひのない人間と思召す事でせう。
人々さげず　侍女達を自分達の局に下げないで、からだを揉ませて居ります。
あやしと　小君が空蟬を探してうろついて居つては。
いと斯く品さだまりぬる　斯く受領の妻と身分の定まつた境遇でなくて。
たまさかにも　稀にでも源氏のお出をお待ち申す身であつたら興もあらうものを。
無心に心づきなく　人情知らずの氣にくはぬ奴になつて押通さう。
いかにたばかりなさむと　小君が空蟬をどう說きつける事やらと。
まだをさなきを　まだ子供であるのを氣がかりに思ひながら待ち臥して居つた所。

渡殿にわけ入りて、からうじてたどり來たり（空蟬の隱れ場に）。いとあさましく（小君が姉の仕打を恨む心）つらしと思ひて、（小君）「いかにかひなしとおぼさむ」と、泣きぬ（お）ばかり・（に）いへば、（空蟬）「かくけしからぬ（不埒な料簡は持つものでない）心ばへは使ふものか。をさなき（前のやうな子供が）人の、かかる事いひつたふる（戀の取持などする事は）は、いみじく忌むなるものを」といひおどして、（空蟬）「『心地なやましければ（氣分がわるいから）、人々さげずおさへさせてなむ』と聞えさせよ（源氏に申上げよ）。あやしと誰も誰・も思ふ（見る）らむ」といひ放ちて（いひ切つて）、心のうちには、いと斯く品さだまりぬる（ら）・身の覺（身の上）えならで、過ぎにし（亡き親達の御傍の殘つて居る里の家に居るままで）親の御けはひとまれる故郷ながら、たまさかにも待ちつけ（源氏を）奉ら・（ん）ば、をかしうもやあらまし・・・・（あはれにも思ひ知られぬ）・・・・（べき御有樣を）、しひて思ひ知らぬがほに見消つ（志を無にする）も（源氏の志を）、いかに程知（身の程を）らぬやうにおぼす（源氏が）らむ、と心ながらも胸いた（うれ）く、さすがに思ひ亂る。とても（何れにしても）かくても、今はいふかひなき（どうにもならぬ運命故）宿世なりければ、無（む）心（じん）に心づきなくてやみなむ、と思ひ果てたり。君（源氏）は、いかにたばかりなさむと、まだをさなきを、うしろめたく待ち臥し給へ

不用なるよしを珍らかなりける心だ。 駄目だといふ旨を。　珍らしい強情

帚木の数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木　あなたの本心も知らずに私はつまらなくまごついた事だ。此歌は新古今戀一坂上是則の「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」を本歌としてゐる。受領の妻といふ賤しい名義がつらくて、死ぬやうな思ひでゐる私でございます。

わび給ふ　空蟬の動作に敬語を用たのは、こゝと八五頁の十二行と三行とである。誤か。或は記者の同情の意を示したものか。行動を批難して敬語のある管の人に對しても敬語を略することが所々にある。その反對なる筆法か。この用例は柏木の巻（一二五頁）にも見える。

すゞろにすさまじく考へてをすると何となくつまらなくなりはするが。

なほ　「心もとまれ」を修飾する。

人に似ぬ心ざまの　人と違つた空蟬の心が、まだ其儘にゆるがずに居るのがねたましく。

さも　さうも諦めがつきさうになく。

むつかしげに　嚴重に締切つてありまして。

かしこげに　あんな所へお連れ申すのは勿體ない。

いとほしと　小君は源氏に氣の毒だと思つた。

つれなき人よりは　源氏は無情な空蟬よりも却つて小君の方を可愛いと思召されるとか。

るに、不用なるよしを聞ゆれば、源「あさましく珍らかなりける心の程を。身もいと恥かしくこそ・・なりぬれ」と・、いとほしき御氣色なり、暫時とばかり物も宣はず、いたくうめきて、憂しとおぼしたり。

源氏歌「帚木のこころを知らで園原の道にあやなく惑ひぬるかな聞えむ方こそなけれ」と宣へば、女も、さすがにまどろまれざりけり。

空蟬歌「数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木」

源氏に氣の毒といとほしさに、ねぶたくもあらで滑息の取次にまどひ供人達は寢込人々はありくを、人あやしと見るらむと・・わび給ふ。例の、人々はいぎたなんでゐるのにきに、源氏の事ひと所・、すずろにすさまじく思しつづけられど、人に似ぬ心ざまの空蟬の、なほ消えず立ちのぼりけるもねたく、斯かるにつけてこそ心かう強情であればこそ却つて心が引かれるのもとまれ、とかつはおぼしながら、荒しくなめざましくつらければ、さばれ、と思せども、さもおぼし果つまじく・、・、源「隱れたらむ所にだに、なほゐていけ」と宣へど、小君「いとむつかしげにさしこめられて、人あまた侍るめれば、かしこげに」と聞ゆ。小君の心・・いとほしと思へり。源「よし、あこだに私を捨てそ」と宣ひて、御かたはらに臥せ給へり。若くなつかしき源氏の御有様を、嬉しくめでたしと思ひたれば、つれなき人空蟬よりはなかく・・あはれに・・・おぼさるとぞ。

空蟬

此巻は源氏十六歳の夏の事あり。

寝られ給はぬ 帚木巻の終りに續く。まだ紀伊守宅での事。

ながらふまじくこそ 生きて居れないやうな氣になつた。

手さぐりの 小君を手でさぐつて見ると。

似通ひたるも 姉弟相似て居るにつけても。

あながちに 無理に空蟬にこだはつてその隠れ場まで尋ねて行くのも人目がわるかからうと。

まめやかに 以下空蟬の態度に對する源氏の心。

宣ひまつはさず ちやほやいはないで。

なみ〳〵ならず 源氏の戀を拒絶した事を一通りならず氣まりわるく思つてゐるのに、源氏からは何の沙汰もない。

おぼし戀りにけると 源氏が戀り〳〵されたのだなと思ふにつけても。

やがてつれなくて 此儘そしらぬ顔に止めてしまはれたらつらい事だらう、といつて無理な迷惑なし打が續くのもいやな事だらう、いい加減な所で、此位結着をつけてしまはう。

源氏は寝られ給はぬままに、「我は斯く人に・・・憎まれてもならはぬを、今宵なむ、はじめて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥かしうて、・ながらふまじくこそ思ひなりぬれ」など宣へば、泪をさへこぼして臥したり。源氏が小君を見ていとらうたしとおぼす。手さぐりのほそくちひさき程・・、髪のいと・・長からざりしけはひのさま・、似通ひたるも、氣のせいか思ひなしにや、あはれなり。以下源氏の心あながちにかかづらひたどり寄らむも、人わろかるべく、眞實まめやかにめざましとおぼしあかしつつ、例のやうにも、宣ひまつはさず、夜ぶかう中川の邸を出で給へば、小君この子は、いとほしくさうく〳〵し・・・・と思ふ。空蟬女もなみ〳〵ならず傍心痛しと思ふに、御消息・・も絶えて・程なし。お・ぼし戀りにける、と思ふにも・・、やがてつれなくてやみ給ひなましかば憂からまし、無理な淡泊するやうなしひていとほしき御振舞の絶えざらむも、うたてあるべし、よき程に・、かくて閉ぢめてむ、と思ふものから、氣にかかつて物思ひがちである ただならずながめがちなり。

君は 源氏は女のし打を氣にくはぬとは思ひながら。

人わろく 「宣ひわたれば」を修飾する。

たいめんすべく 空蟬に逢へるやうに取計らつてくれ。

斯かるかた 戀の取持といふ役でもちやほやして下さるのは嬉しい氣がした。

國に 任國に下つたりして。

のどやかなる 閑散な。

道たど〳〵しげなる 道もはつきり見えぬ夕闇に紛れて。萬葉相聞「夕闇は道たづ〳〵し月待ちていませわがせこそのまにも見む」

さのみも さう暢氣にばかりも構へては居られなかつたから。

さりげなき姿にて 外出するらしくもない姿で。

殊に見入れ 格別世話もせず追從もしないから氣樂だ。

御邊 女房達。

あらはなり 戸をあけ放しておいては外から丸見えで困る。

源氏君は、氣にくはぬ心づきなしとはおぼしながら、此儘では濟まされさうもなく かくてはえやむまじう御心にかかり、人わろく、思案に餘つておもほしわびて、小君に、源「いとつらうもうれたくも覺ゆるに、忘れようと努めるがしひて思ひかへせど、心にしも隨はず苦しきを、さりぬべき折を見て、たいめんすべくたばかれ」と宣ひわたれば、煩はしければ、小君の心斯かるかたにても宣ひまつはすは、嬉しう覺えけり。をさなき心地に、いかならむ折にかと待ち渡るに、機會を紀伊守國にくだりなどして、女どちのどやかなる夕闇の、道たど〳〵しげなる紛れに、小君の わが車にてねて奉る。この子もをさなきを、首尾はどうか いかならむ、源氏が懸念するとおぼせど、さのみもえおぼしのどむまじかりければ、さりげなき姿にて、門などささぬさきにと、急ぎおはす。中川に人見ぬかたより引き入れて、源氏をおろし奉る。童なれば、宿直人なども、殊に見入れ追從せず、心やすし。東の妻戸に源氏を立て奉りて、我は小君 南の隅の間より、格子たたきののしりて入りぬ。御達、「あらはなり」といふなり。小君「なぞかう暑きにこの格子はおろされ給たる」と問へば、女房「晝より西の御方の渡らせ給ひて、空蟬と碁打たせ給ふ」といふ。さて對ひ居たらむを見ばや、とおもひて、妻戸の口からやをら歩みいでて、簾垂のはざまに入り給ひぬ。小君が入りつる格子は、まだささねば、隙見ゆるに、格子際に寄りて、西ざまに見通し給へば、格子際にこの際に立てたる屏風も、端のかた押したたまれたるに、邪魔になるまぎるべき几帳なども、暑ければにや、帷子を打掛けて、最りやりなどしたれいとよく見入れらる。火近うともし居たり。母屋の中柱にそばめる人空蟬やわが心かくると、人なんと、まづ目とどめ給へば、濃き綾の單襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人の、物げなき姿ぞしたる。顔などは、對坐して居る軒端荻にもさし向ひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ〳〵として、手をいたう引隱したんめり。今一軒端荻の事人は、東ひんがしむきにて、殘る所なく見ゆ。白き羅の單襲、下に

對ひ居たらむ 空蟬と軒端荻とが對座して居る所を。

この際に 源氏の居られる格子際に。

打掛けて 帷子を几帳の手に。

見入れらる 部屋の中が。

中柱 室の中にある柱。

そばめる 横向になつて居る。

濃き綾 濃紫の綾織物。これは下着である。

單襲 表著の下に重ねて著用する單衣。

二藍　表は赤味を帶びた濃い縹色。裏は濃色。

小袿　唐衣や裳を著ない時に唐衣の代りに著る婦人の服。表は浮織物、裏は平絹。

着なして　わざ〳〵無雜作に着て。

ばうぞく　遊仙窟に「凡俗」とある。若しさうならボウゾクである。なほ究めねばならぬ。

さがりば　髪の下り具合。

うべこそ　軒端荻を親が無類の娘と思つて居るのも當然だ。親は伊豫介。

心地ぞ　心もち。軒端荻を見た心地の上では。

飫さす　眦目をおすあたり。

心とげに　敏捷らしげに。

さうどけば　ざわつくので。落ちつきのないこと。

持にこそ　持も劫も碁の詞。

伊豫の湯桁　花鳥三「六花集に古歌としていだせり。伊豫の湯の湯桁の數は左八つ、右は九つ、中は十六、すべて三十三ありといへり」

二藍の小袿だつものなしがしろに着なして、紅の腰引きゆへるきはまで、胸あらはに、すこし・・・ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶ〳〵と肥えて、そぞろかなる人の、頭つき、額つき物あざやかに、まみ口つきいと愛敬づき、花やかなるかたちなり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、さがりば、肩の程いと清げに、すべていとねぢけたる所なく、をかしげなる人と見えたり。うべこそ親の世になくは思ふらめとをかしく見給ふ。心地ぞなほ靜かなるけを添へばや、とふと見ゆる。かどなきにはあるまじ、碁打ち果てて、飫さすわたり心とげに見えて、きはぎはしうさうどけば、奥の人は、いと靜かにのどめて、「待ち給へや。そこは持にこそあらめ。このわたりの劫をこそ」などいへど、軒端「いで、この度は負けにけり。隅のところ〳〵、いで〳〵」と、指を屈めて、「十、二十、三十四十」など數ふるさま、伊豫の湯桁も、たど〳〵しかるまじう

品おくれたり　下品だ。

目をしつと　しは强辭、「つと」はじつとの意。

そばめ　側目。横顏。

ねびれて　大人くさく。若さのない事。

わろきによれる　醜の部に屬する容貌を。

心あらむと　理解があらうと。河内本の如くでは、趣味を解した人の意。

隱はしく　陽氣、朗か、快活。

そばるれば　はしやぐから。

さるかたに　かういふ種類の女として。

あはつけし　薄つぺらな女だとは思ひながら。軒端荻を見ての源氏の感じ。

これもえおぼし放つ　軒端荻のやうな女でも、念頭におかぬ譯には行かなかつた。

見給ふ限りの　源氏が從來御覽になつた總ての婦人は。

そばめたる　恥らつてまともにも向はずに居る表面だけを御覽になつたのだが。

何心もなく　兩人が何も氣付かずにすつかり姿を見られて居るのは氣の毒だが。

見ゆ。すこし品おくれたり。たとしへなく口おほひてさやかにも見せねど、目をしつとつけ給へれば、おのづからそばめに見ゆ。目すこし腫れたる心地して、鼻なども、あざやかなる所なうねびれて、匂はしきところも見えず。いひ立つれば、わろきによれ・るかたちを、いといたうもてつけて。このまされる人よりは、心あらむと、目とどめつべきさましたり。振はしく愛敬づき、をかしげなるを、いよ〳〵誇りかにうちとけて、笑ひなどそばるれば、匂ひおほく見えて、さるかたに、いとをかしき人ざまなり。あはつけしとは思しながら、いとをかぬ御心は、これもえおぼし放つまじかりけり。見給ふ限りの人は、うちとけたる世なく、引きつくろひそばめたるうはべをのみこそ見給へ、かく打解けたる人の有樣垣間見などは、まだし給はざりつる事なれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう見給へまほしきに、小君出でくる心地すれ

渡殿の戸口に 前から戸口に居た風をして居るのである。

いと忝しと 源氏を戸口に立たせておいた事を恐れ多いと。

例ならぬ人 滅多に來ない客。

軒端荻の事。

かへしてむとする 私に無駄足を踏ませるのか。

いとあざましう それはあまりにつらい事だらう。

などてか どうしてそんな事がありませう。無駄足を踏ませるやうな事はありませぬ。

さも靡かしつべき 空蟬を意に從はせ得る樣子なのだらう。

童なれど 小君は子供だが、物の事情や人の顏色を見て取り得る程落着いて居るのだもの。

そよめきて そよ〳〵音して。

しづまりぬなり もう皆が寢靜まつた。

たわむ所なく 靡きさうな所もなく眞面目だから、妥協の餘地がなくて。

われにかいまみすき見させよ。 私に軒端荻を

ば、（廂の間から）やをら出で給ひぬ。

渡殿の戸口に（寄りかかつて）寄りゐ給へり。（小君の心に）いと忝しと思ひて、（小君）「例ならぬ人侍りて、え近うも寄り侍らず」。（と問ゆれば）（源）「さて今宵もやかへしてむとす（や）る。いとあざましうからうこそあンべけれ」と宣へば、（小君）「などてか。（軒端荻が）あなたに歸り侍りなば、（工面しませう）たばかり侍りなむ」と聞ゆ。（源氏の心）さも靡かしつべき氣色にこそ（ほ）あらめ、（わらは）童なれど物の心ばへ（え）、人の氣色（も）・見つべく、しづまれるを、と思すなりけり。碁打ち果てつるにやあらむ、うちそよめき（など）て、人（退散する）あかるるけはひなどもすなり。（女房）「（小君の事）若君はいづくにおはしますにか。（締めてしまはう）ならむ。この御格子はさして（格子を）む」とて鳴らすなり。（源）「しづまりぬなり。入りて、さらばたばかれ」と（小君に）宣ふ。（空蟬）この子も、いもうとの御心（氣色）は、たわむ所（も）なくまめだち（て）たれば、（相談）いひあはせむ方（も）なくて、人ずくならむ（る）折に入れ奉らむと思ふなりけり。（源氏を姉の部屋に）

（源）「紀伊守の（軒端荻）妹もこなたにあるか。われにかいまみせさせよ」と

いかでかさは どうして垣間見などが出來ませう。

さかし さうだ、併しもう疾くに見てしまつた。

見つとは もう既に見たとは小君に知らせまい、氣の毒だ。

此度は 格子はもう締めてあるから。

疊ひろげて 薄綠の疊をひろげて。

御遲戸放ちつる 女房達。妻戸をあけた女の童。

そなたに 女房達の寢てゐる東廂。

いかにぞ 首尾はどうだらう、馬鹿らしい目にでもあひはせぬか。

皆しづまれる夜の 皆寢靜まつた夜の御衣の音は、柔かなのが却つてはつきり聞えた。

さこそ忘れ給ふを 自分を源氏がお忘れになるのをさういふやうに嬉しい事には思つて居るが。

心とけたる 打解けて寢る事さへ出來ずに居る。拾遺戀二「君戀ふる涙の凍る冬の夜は心とけたるいやは寢らるる」

畫はながめ 古歌「夜はさめ畫はながめに暮されて春はこのめもいとなかりけり」

（小君に）宣へば、（小君）「いかでかさは（る事は）侍らむ。格子には几帳添へて侍り」と聞ゆ。（源氏心）さかし、されども、とをかしくお（も）ぼせど、見つとは知らせじ、いとほし、と思して、夜更くる事の心もとなさを宣ふ。（この）此度は、（こたみイ）妻戸をたたきて入る。皆人々しづまり寢にけり。（小君）「この障子口（さうじぐち）にまろは寢たらむ。風吹きとほせ」とて、疊ひろげて臥す。御達（たち）・東の廂（ひさし）にいとあまた寢たるべし。戸放ちつる童（わらは）も、（こ）そなたに入りて臥しぬれば、（小君は）とばかり空寢して、火影源氏の心火あかき方（の）に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れ奉る。（源氏の心）いかにぞ、をこがましき事もこそ、と思すに、いとつつましけれど、（小君の）導くままに、母屋（もや）の几帳の帷子（かたびら）引きあげて、いとやをら入り給ふとすれど、皆しづまれる夜の御衣（おんぞ）のけはひ（の）、やはらかなるしもいと著（しる）かりけり。（空蟬）女は、さこそ忘れ給ふを嬉しきに思ひなせど、（先夜の逢瀬）怪（りし）しく夢のやうなることを、（詠）心に離るる折なき頃にて、心とけたる寢（い）だに寢（も）られずなむ。畫はながめ、夜

春ならぬ 春ではないが、目の休まる時もない。

疊打掛けたる 單の帷子を几帳の手に打掛けてある。

うちみじろき寄る にじり寄つて來る源氏の樣子がはつきり見える。

生絹 練らぬ絹。

一人臥したるを これは軒端荻である。

二人ばかりぞ 女房が。

衣を 軒端荻が着て居る衣。

ありしけはひよりは 先夜の樣子よりは大柄に思はれたが。

あさましく心やましけれど あまりにも不愉快である。

人違とたどりて 「たどりて人違と見えむも」の意。まご〳〵して居て人違をしたのだと悟られるのも馬鹿らしく。

は寢覺めがちなれば、春ならぬこのめもいとなく歎かしきに、軒端荻碁打ちつる君、「今宵は空蟬の方にこなたに」と、暇やかに今めかしくうち語らひて寢にけり。軒端荻若き人は、何心なく、いとよくまどろみたるべし。源氏の事斯かるけはひの、源氏の御衣の香いとかうばしくうち匂ふに、空蟬が顏をもたげたるに、單打掛けたる几帳のすきまに、見れば暗けれど、源氏がうちみじろき寄るけはひ、いとしるし。空蟬心あさましく覺えて、何とも分別がつかずともかくも思ひわかれず。やをら起きいでて、部屋をすべり出でにけり。生絹なる單衣一つを着て、源氏君は入り給ひて、女がただ一人臥したるを、心やすくおぼす。床のしもに、二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄り給へるに、ありしけはひよりは、手あたり物々しく覺ゆれど、人違とは氣付かぬおもほしも寄らずかし。寢坊な所がいぎたなきさまなどぞ、怪しく變りてるを、やう〳〵人違である事を見あらはし給ひて、源氏の心あさましく心やましけれど、人違とたどりて見えむもをこがましく、女が不審に思ふだらう怪しと思ふべし。

267333

本意の人を 目ざす空蟬を。

かひなく 探した所で探しがひもなく。

をこにこそ 空蟬が源氏を馬鹿な男と思ふだらう。

火影 燈火の光に見た人。軒端荻の事。

何の心深く 氣の毒なといふ念を起させるやうな何の深い心構へもない。

われとも 自分は源氏だといふ事も知らせまいと思ふけれど。

いかにして斯かるぞ どうしてこんな事になつたのかと、後になつて女がかれこれ思ひめぐらした所で、源氏は自分に取つては何でもないが。

たび〳〵の 實は度々の方違にかこつけて逢ひに來たのだといふ事を、巧に取繕つてお話にない る。

えしも思ひわかず どうしたのか見わけがつかぬ。

憎しとはなけれど 源氏は軒端荻を憎く思ふ譯ではないが。

いみじく 大層恨めしく。

本意の人をたづね寄らむも、かばかりのがるる心あめれば、かひなく、をこにこそ思はめ、とお・ぼす。かのをかしかりつる火影ならば、人違でもまよいかがはせむ、と思しなるも、わろき御心淺さなンめりかし。軒端荻がやう〳〵目ざめ・て、いと覺えずあさましきに、あきれたる氣色にて、何の心深くいとほしき用意もなし。風流氣のある方で用心深い點もなく氣の毒に思はれるやうな樣子もない世の情の道中をまだ思ひ知らぬ程よりは、ざればみたるかたにて、小供々々したまざつき方もしぶいにも思ひ惑はず。われとも知らせじとおもほせど、いかにして斯かる事ぞと、軒端荻がのちに思ひめぐらさむも、わが・ためには事にもあらねど、あの無情な空蟬がつらき人の、むやみに世を憎るのも氣の毒故あながちに世をつつむも、さすがにいとほしければ、たび〳〵の御方違にことつけ給ひしさまを、いとよういひなし給ふ。思ひ察しのよい人は悟るだらうがたどらむ人は心得つべけれど、軒端荻はまだいと若き心地に、あんなに出しやばりのやうだがさこそさし過ぎたるやうなれど、えしも思ひわかず。源氏の心に憎しとはなけれど、御心とまるべき故もなき心地して、なほかのうれたき人の心を、いみじくお・ぼす。いづこ

かく執念き人は こんなに強情な女は滅多にないのだものと思ふと、却つて空蟬の事が意地わるく忘れがたく思ひ出される。

かやうなるは こんな忍びの戀の方が一層情の深いものだと昔の人もいつて居る。

あひ思ひ給へよ 私が愛するやうに私を愛して下さい。

身ながら 自分ながら。此處は河内本の方がよく通ずる。

又さるべき人々も こんな忍び事はあなたの身内の人達も許すまい。

うらもなく 隔意もなく思つた所を其儘いふ。

なべての人に 皆の人に知らせたらとにかく。

ちひさき上人 宣殿上の小君。

に這ひまぎれて、（氣の利かぬ男と思つて居るだらう）かたくなしと思ひ居たらむ、かく執念き人の心はありがたきものを、とおぼすにしも、（意地わるく忘れ難く）あやにくにまぎれがたく思ひいでられ給ふ。（空蟬の事が出で給ふ）軒端荻

この人の、何心なく若やかなるけはひもあはれなれば、（氣に入らぬながらも）さすがに、（情愛の深さうに）なさけ〳〵しく契りおかせ給ふ。源「（世間晴れての戀より）人知りたる事よりも、かやうなるは、あはれも添ふ事と・なむ昔の人もいひける。あひ思ひ給へよ。（世間に憚る事がないでもない）つつむ事なきにしもあらねば、身ながら、心にもえまかすまじくなむありける。又さるべき人々も許されじかしと・・・、（軒端荻の父兄など）かねて胸痛くなむ。（私を）忘れで待ち給へよ」など、（通り一遍に）なほ〳〵しく・語らひ給ふ。（他人の思はくが恥かしいから）軒端「人の思ひ侍らむ事の恥かし・・・きになむ、え聞えさすまじき」と、（手紙はあけられない）うらもなくいふ。源「なべての人に知らせばこそ・あらめ、このちひさき・・・上人などに傳へて聞えむ。（何氣ない風をして）氣色もなくもてなし給へ」などいひおきて、（空蟬が脱ぎ捨てた）かのぬぎすべしたるうすぎぬを取りて出で給ひぬ。小君ちか

うしろめたう 心配しながら寝て居つたので、直に目をさました。

老いたる御達 老女房。

あれは誰ぞ 其處に居られる方は誰か。

なぞありかせ給ふ なぜお出歩きなさいますか。

あらず いゝや、出かけるのではない。

人の影 源氏の姿である。

けしうはあらぬ 中々立派なお背長だこと。おもとは、女房の尊稱、たけだちは身長。

老人これを 老女房は、小君が民部と一緒にあるいて居るのだと思つて。

今只今 小君にいふ詞。もう直に民部と同じ位の背丈になりませう。

このおもと 老女房の事。

おもとは 源氏を民部と思つていふ詞。

うへ 主人の居る所。此處は空蟬の所をさしていふ。

に臥したるを・・・おこし給へば、（小君は）うしろめたう思ひつつ寝・・・ければ、ふとおどろきぬ。（目ざめた）戸をやをら押しあくるに、（小君が妻戸を）老いたる御達の聲にて、「あれは誰ぞ」と、（大袈裟な聲で）おどろ〳〵しく問ふ。（小君）・・・頬心にらはしくて、「まろぞ」といらふ。（私だ）女房「夜中に、こはなぞありかせ給ふ」と、さかしがりて、（いらぬ世話をやいて）・・・とざまへ來。（こなた）・・・憎くて、（小君）「あらず。ここもとへ出づるぞ」とて、（源氏）君を押しいで奉るに、暁近き月隈なくさしいでて、ふと人の影・見えければ、（一人）女房「またおはするは誰ぞ」と問ふ。（少貯イ）女房「民部のおもとなんめり。けしうは・あらぬおもとの・たけだちかな」といふ。（背の高い民部が）たけ高き人の、常に笑はるるをいふなりけり。老人、これをつらねてありきけると思ひて、（老女）女房「今只今立ちならび給ひなむ」といふ〳〵、（老女房も）われもこの戸より出でて來。（源氏心に）わびしけれど、（老女房を）えはた押しかへさで、渡殿の口にかい添ひて、（寄り添つて）隱れ立ち給へれば、このおもとさし寄りて、（女房）「おもとは今宵はうへにやさぶらひ給ひつる。一昨日

しも 下屋。
人ずくなり 人ずくなで困るからと空蟬が召したので。
まうのぼり うへ即ち空蟬の所に。
腹々 腹が痛い〳〵。
いま聞えむ あとで又話さう。

有樣宣ひて 昨夜の首尾を小君に。
をさなかりけり お前のやり方は幼稚だった。
いと深う憎み給ふ 空蟬が私を憎む。
餘所にても 途はないまでも。
伊豫介に劣りける 伊豫介に劣る我身が悲しい。
ありつる小袿 空蟬の脱ぎすべしの。
さすがに 空蟬を恨めしく思ひながらもさすがに源氏はその小袿をわが御衣の下に敷いて。

より腹を病みて、いとわびしなければ、しもに侍りつるを、『人ずくなり』とて召ししかば、昨夜まうのぼりしかど、なほえ堪ふまじくなむ」と憂ふ。いらへも聞かで、女房「あな腹々。いま聞えむ」とて過ぎぬるに、源氏からうじて出で給ふ。なほ斯かるあぢきはかろ〳〵しく危かりけり、と、いよ〳〵おぼし懲りぬべし。

小君、御車に陪乘源氏の車に陪乘の尻にて、二條の院におはしましぬ。有樣宣ひて、源「いとをさなかりけり」と麁率だとけなすあばめ給ひて、空蟬かの人の心を、爪弾をしつつ恨み給ふ。小君心にいとほしうて、物も聞えず。源「いと深う憎み給ふべかんめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などか餘所にてもなつかしきいらへばかりはし給ふまじき。伊豫介に劣りける身こそ」など、心にくはない事と心づきなしと思ひて宣ふ。ありつる小袿を、さすがにお・んぞの下に引入れて大殿籠れり。・小君をお前に臥せて、よろづに恨みかつは語らひ給ふ。源「あこはらうたけれど、

つらきゆかり 無情な空蟬の縁者故愛し遂げられぬ。
わびしと思ひたり つらいと思つて居る。

書きすさび給ふ 筆を走らせる。
空蟬の行くやう 蟬が木蔭に殼を殘して姿を隱したあなたではあるが、やはりあなたの薄衣が懷しい、あなたが。「人がら」の「人」は枕詞。人品の意味に人と殼とを結びつけた言ひ懸けの枕詞で、やがて空蟬の人品の義がひゞかせてある。
御ことづても 軒端荻には源氏から傳言もない。
かのうすぎぬは 河内本の方が文の續きがよい。

あさましかりしに 源氏の入り來た事。
とかくまぎらはしても とやかくとごまかしはしても、人の疑は避けられなくて大變困る。
左右に 小君は源氏からは恨まれ空蟬からは恥しめられて。
かのもぬけを かの脱ぎ捨ての小袿を、どんなに著古して垢じみて居た事やらと思ふにつけても。後撰戀三「鈴鹿山伊勢をの海士の捨衣鹽馴れたりと人や見るらむ」

つらきゆかりにこそ、え思ひ果つまじけれ」と、まめやかに宣ふを、小君の心にいとわびしと思ひたり。源氏は暫しうち休み給へど、寢られ給はず。・・御硯いそぎ召して、わざと遣すさしはへたる御文にはあらで、ただ手習のやうに書きすさみ給ふ。

源氏歌
空蟬の身をかへてける木の下になほ人がらの懷かしきかな

と書き給へるを、小君が懷に引入れて持たり。軒端荻かの人もいかに思ふらむ、といと源氏の心にほしけれど、かたく〳〵おもほし返して、・・御ことづてもなし、かのうすぎぬは・、小袿のいとなつかしき人香にしめるを、身ぢかく馴らしつつ見居給へり。小君かしこにいきたれば、空蟬姉君待ちうけて、いみじく宣ふ。空蟬「あさましかりしに。とかくまぎらはしても、人の思ひむ事さりどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心をさなき心ばへを、源氏かつはいかにおもほすらむ」とて、小君をはづかしめ給ふ。左右に苦しく思へど、源氏のかの御手習・取りいでたり。さすがに空蟬が取りて見給ふ。かのもぬ

渡り給ひにけり　西面のわが部屋に。
あさましと　呆れた事だと實際の事情を悟る事もなくて。
ざれたる心地に　洒落た心の中にも何となく物思はしい事であらう。
さこそしづむれど　さういふやうに情を制して見るけれども。
取りかへす　古歌「取りかへすものにもがなや世の中をありしながらの我身と思はむ」
この御疊紙の　源氏が書かれた疊紙。疊紙は懷紙ともいふ。引合せ紙などを、懷一枚の儘横二つ竪四つに折つて懷中し詠草や鼻紙などに用ひる。
空蟬の　私はあなたを避けて隱れては居りますが、あなたの御情を思つて人知れず泣いてをります。

けを、いかに伊勢をの海士（あま）の鹽馴れてやなど思ふも、ただなら（氣にかかって）
ず、いと・（と）よろづに・・（思ひ）亂れたり。西の君（軒端荻）も、物恥かし・・・（うはし）
・・（たな）き心地して、渡り給ひにけり。また（外に知る人のない秘密故）知る人もなき事なれば、
人知れずうちながめて居たり。小君の渡りありく（二條院と中川の宿との間を）につけても、
胸（うち）のみふたがれど、御消息（源氏から後朝の文がない）もなし。あさまし（軒端荻は）、と思ひ得る方も
なくて、ざれたる心地に（にも）、物あはれなるべし。つれなき人（無情な空蟬も）も、
さこそしづむれど、いとあさはかにもあらぬ御氣色（源氏の淺くないなさけを）を・・・（思ひ知る）
・（に）、ありしながら（昔ながらの）のわが身ならばと、取りかへす（引歌）ものならねど
忍びがたければ（怺へかねて）、この・・（おほん）御疊紙（たゝうがみ）の片つ方に、

空蟬の羽（は）におく露の木（こ）がくれて忍び〳〵に濡るる袖かな

・・・・・・（とてやみにけり）

夕顔

源氏十六歳の夏より、十月までの事見えたり。

六條わたりの 六條御息所は此處に初めて見える。

一院 ─┬─ 桐壺帝
　　└─ 前坊

六條御息所 ═══ 秋好中宮

中宿 途中の休み所。

大貳の乳母 源氏の乳母で惟光の母。

大貳乳母 ─┬─ 惟光 ─┬─ 山の阿闍梨
　　└─ 少將命婦 ─ 三河守の妻

五條なる家 五條に在る。大貳の乳母の家は檜垣 檜の薄板を網代のやうに編んで張つた牆。**かみは半蔀** 檜垣の上部が半蔀になつて居るのを。半蔀は一枚の上半を蔀として外へあげるやうにし、下半は格子又は鎖板（はたいた）を打つて固定した物。**透影** 簾垂の隙間から見える人影。**下つ方** 顔から下の部分を想像して見ると。**あながちにたけ高き つゝゐるからである。**誰とか知らむ** 自分を源氏だとは誰が知らうぞと。**見入れの** 外から見入れた所は手狹であつて假初の住居ではあるが。**いづこかさして** 古今雜下「世の中はいづれかさして我がならむ行きとまるをぞ宿と定むる」**玉のうてなも** すべて假の宿で

源氏が六條御息所に忍んで通はれる頃

六條わたりの御忍びありきの頃、禁中から六條に行く途中うちよりまかで給ふ中宿に、大貳の乳母・いたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて、五條なる家尋ねておはしたり。御車入るべき門はさしたりければ、人して惟光召させて、待たせ給ふ程、むつかしげなる大路のさまを見わたし給へるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの・・・新しうして、かみは、半蔀四五間ばかりあげわたして、簾垂などもつきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちにたけ高き心地ぞする・・。いかなる者のつどへるならむと、やうかはりておぼさる。御車もいたうやつし給へり、さきも追はせ給はず、誰とか知らむと打解け給ひて、車の物見からすこしさし覗き給へれば、門は蔀のやうなるをおしあげたる、見入れの、程なくものはかなきすまひ・・・を、あはれに、いづこかさしてとおもほしなせば、玉のうてなも、同じ事なり。

切懸だつものに、いと青やかなる葛の、心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれ、獨笑の眉開けたる。源「遠方人に物申す」と、ひとりごち給ふを、御隨身ついゐて、隨「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしうちよろぼひて、むね〳〵しからぬ軒のつまなどに、這ひまつはれるを、源「口惜しの花の契りや。一房折りて參れ」と宣へば、この押しあけたる門に入りて折る。さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴、長く着なしたる童の、をかしげなる出で來て、うち招く。白き扇のいたうこがしたるを、童「これに置きてまゐらせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて取らせたれば、門あけて惟光の朝臣の出で來たるして奉らす。惟「鎰をおきまどはし侍りて、いと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へわくべき

あるからかういふ侘住ひも立派な御殿も同じ事だ。

切懸 板を横にして柱にめんどり羽に重ねて切りかけ、外から透かぬやうに拵へた板圍。

おのれ獨笑の 白い花が自分獨りだけ得意げに咲きほこつて居る。夕顔といふ名の人らしいといふ所から、すべて擬人法で書いてある。

遠方人に 古今旋頭歌「打渡す遠方人に物申すわれ、そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」

御隨身 上皇攝關大臣納言參議大將の外出の時、弓箭を帶して警固する近衛府の官人。

このもかのも あちらこちらと。

さすがに みすぼらしい住居だが。

遣戸口 引き戸口。

童 女の童。

門あけて 其時丁度惟光が門をあけて出て來たので、隨身は惟光に頼んで源氏に差上げさせた。

不便 不都合千萬。

人も侍らぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」と、かしこまり申す。引入れており給ふ。惟光が兄の阿闍梨、聟の三河守むすめなど渡りつどひたる程にて、かくおはしましたるよろこびを、またなき事にかしこまる。尼君も起きあがりて、尼「惜しげなき身なれど、捨てがたく思ひ給へつることは、只かくお前にさぶらひ御覽ぜらるることの變り侍りなむことを、口惜しう思ひ給へたゆたひしかど、忌むことのしるしに、よみがへりてなむ斯く渡りおはしますを見給ひ侍りぬれば、今なむ阿彌陀佛の御光も心清く待たれ侍るべき」など聞えて、弱げに泣く。源「日頃をこたりがたく物せらるるを、安からず歎き渡りつるに、かく世を離るるさまに物し給へば、いとあはれに口惜しうなむ。命長くて、なほ位高くなども見なし給へ。さてこそ九品の上にも、さはりなく生れ給はめ。この世にすこし恨み殘るは、わろ

らうがはしき 亂雜な。

よろこび うれしい御來車をの意。

捨てがたく この世を捨てかねて居りましたのは。

忌むことのしるし 戒を受けた效驗で蘇生致しまして。

今なむ阿彌陀佛の 今こそ西方淨土からの阿彌陀様の御來迎もさつぱりした氣分で待つ事が出來ませう。

なほ位高く 私がもつと位の高くなるまで生きながらへて見てもらひたい。

さてこそ九品の上にもさはりなく それでこそ上品上生にも障りなく往生が出來ませう。九品は極樂往生の階級で、上中下の三品に更に各品がそれ〲上中下の三生に別れてゐる。

きわざとなむ聞く」など、涙ぐみて・宣ふ。かたほなるをだに、・乳母などやうの思ふべき人は、あさましうまほ・に見なすものを、ましていと面立たしう、なづさひ・・仕うまつりけむ身も、いたはしう忝く・おもほゆべかめれば、すゞろに涙がちなり。子どもはいと見ぐるしと思ひて、「背きぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ御覽ぜられ給ふ」と、つきしろひ目くはす。君はいとあはれとお・ぼして、「いはけなかりける程に、思ふべき人々の、・打捨てゝ物し給ひにける名殘、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく・思ひむつぶるすぢは、また・なくなむおもほえし。人となりてのちは、限あれば、朝夕にしもえ見奉らず、心のまゝにとぶらひまうづる事はなけれど、なほ久しう對面せぬ時は、心細くおぼゆるを、さらぬ別れはなくもがなと・・なむ」など、こまやかに語らひ給ひて、おしのごひ給へる御袖の匂ひも、いと所せきまでかをりみちたるに、げ

かたほなるをだに　滿足でもない子供をさへ、乳母のやうな、その子を愛する筈の人は、慾目から呆れる程立派な子だと思ふのが常であるのに。

ましていと面立たしう　まして源氏のやうな立派な方をお育て申した此の尼君は、大層面目に思つて、馴れ親しんでお事へ申した自分の身をも。

子ども　大貳の乳母の子供。即ち惟光など。

思ふべき人々　私を愛してくれる筈の人。母更衣や祖母などをいふ。

名殘　この名殘といふ語に、母や祖母から受けた慈愛が後までひゞいてゐて、心から人になじんでゆくことが出來なかつたといふ意味がひゞかせてある。

はぐくむ人　乳母たちの事。

親しく思ひむつぶる　私の親身に睦じく思ふ人はあなた以外にない。

さらぬ別れは　死別など無ければよいと思ふ。伊勢物語古今雜上「世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子の爲」

げに思へば　成程母君の思つたとほりで考へて見ればお母さんは並々でない仕合なのだと、尼君を非難する目で見て居た子供達も。

に思へば、・・おしなべたらぬ人の御宿世ぞかし、と、尼君・をもどかしと・見つる子どもも、・皆うちしほたれけり。修法などまた〳〵始むべきことなど、おきて宣はせて、いで給ふとて・、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば、もてならしたる移香、いとしみ深うなつかしうて、をかしうすさび書きたり。・・・・・

心あてにそれかとぞ見る白露のひかり添へたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたる・も、あてはかに故づきたれば、いとおもひのほかにをかしう覺え給ふ。惟光に、「この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば、例のうるさき御心とは思へど、さは・申さで、「この五六日此處に侍れど、ばうざの事を思ひ給へあつかひ侍るほどに、隣のことは・え聞き侍らず・・」など、はしたなげ・に聞ゆれば、「憎しとこそ思ひたれな。されど、・・この扇の尋ね・・べき故あり

修法　尼君の病氣平癒の祈禱。

いで給ふとて　尼君の家を辭去しようとして。

紙燭　脂燭。松の木を長さ一尺五寸徑三分位に丸く削り火を點ずる手燭。手元には紙を卷く。また紙縷に油をしまして用ひる。

心あてに　白露が光彩をそへて居る夕顔の花即ちあなたを、私は推量で源氏の君かと思ひます。

ばうざ　病者。尼君の事。病人を看護して居たので。

はしたなげに　とりつきはもないやうに。問うたのもきまりわるくおもはれるやうな態度で。

尋ぬべき故ありて　詮索して見ねばならぬ譯があるやうに思はれるから。

入りて　西隣の家に。

揚名介　介といふ官名だけで職掌もなく俸祿も無いもの。

男は　夫である人は田舎へ行き、妻は若く風流人で、その姉妹などが宮仕人で時々此處に來るのです。

下人　宿守のやうな下人は知り得ないのでせう。

さして聞えかかれる　自分を目ざして歌を詠んでよこした女の心根が憎からず捨ておかれないのが、例によつて、色の道にはかろ〳〵しい源氏の御性質なのだらう。

あらぬさまに寄りてこそ　自分の筆蹟ではないやうに書風をかへて。近寄つて見てこそ慥にその人とも分らうが、夕暮時にかすかに見ただけでそれが私だといふ事がどうして分らうぞ。

ありつる　さいぜんの隨身にこの返歌を持たせて女のもとに遣はす。

まだ見ぬ御さま　女の方では源氏の御姿はまだ見た事はなかつたが。

いとしるく　それが源氏であるとは横顔を見てもはつきり推定がつけられたので、その機を逸せずに歌を贈つたのであるが、源氏から返歌もなくて時が立つたので、きまりわるがつて居る所へ。

て見ゆるを、なほこのあたりの心知れらむ者を召して問へ」と宣へば、入りて、「この宿守なる男を呼び出して問ひ聞く。惟「揚名介なる人の家になむ侍りける。」『男は田舎にまかりて、女なむ若く、事好みて、はらから、など宮仕人にて、來かよふ』と申す。委しきことは、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と聞ゆ。さらばその宮仕人なり、したりがほに物馴れていへるかな、と、めざましかるべき際にやあらむ、とおぼせど、さして聞えかかれる心の、憎からず過ぐしがたきぞ、例のこのかたには重からぬ御心なめりかし。御疊紙に、いたらあらぬさまに書きかへ給ひて、

寄りてこそ

ありつる御隨身してつかはす。まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしるく思ひあてられ給へる御側目を見過ぐさで、さしおどろかし、聞えたりけるを、御いらへもなく程經ければ、なまはし

御前のまつ　前驅のともす松明の光もほのかで。

出て給ふ　源氏が尼君の家を。

螢よりけに　螢火よりもずつとかすかで。古今戀二「夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき」

うちとけぬ　いつも氣をゆるされない御息所の御樣子。

あさけの御姿　源氏の朝の寢起き姿。

この蔀　かの夕顔の宿の半蔀の前をお通りになる。

來しかたも　以前にも度々通り過ぎた所だが。

はかなき一ふしに　歌をよこしたといふ一寸した點に御心がとまつて。

煩ひ侍る人　病人即ち大貳の乳母。

たなきに心地しつるを、かくわざとめかしければ、圖にのつて女あまえて、房共「何と返事しようましと思ひて、隨身はまねりぬ。御前のまつほのかにて、いと忍びて出で給ふ。半蔀はおろしてけり。隙々より見ゆる火の光、螢よりけにほのかにあはれなり。御志のところには、木立、前栽など、なべての所に似ず、いとのどやかに心にくく住みなし給へり。うちとけぬ御有樣などの、氣色ことなるに、夕顔の宿の事ありつる垣根おもほしいでらるべくもあらずかし。つとめてすこし寢過ぐし給ひて、日さしいづる程に、出で給ふ。あさけの御姿は、げに人のめで聞えむもことわりなる御さまなりけり。今日もこの蔀の前渡し給ふ。來しかたも過ぎ給ひけむわたりなれど、只はかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人のすみかならむとは、往來に御目とまり給ひけり。惟光、數日たつて源氏方に日頃ありて參れり。惟「煩ひ侍る人、なほ弱げに侍れば、

見給ひあつかひて　看護して居りまして。

はかゞしくも　隣の事情を知つて居る者がはつきりも言はぬ。

いと忍びて　以下は隣の事情を知つて居る者の語つた趣を取次ぐのである。

中垣の垣間見し侍るに　隔ての垣からすき見しましたところ。

透影　物の間から透いて見える人影。

褶　「うはみ」とも「ひらびし」ともいふ。裳と殆ど同じもの。

かしづく人　女房達があがめかしづいて居る主人。この主人が夕顔である。

ある人々も　そばに居る女房達も。

覺えこそ　惟光の心中。源氏は世間の名望から云へば輕々しい動作は出來ない御身分ではあるが。

御よはひの程　お年のお若い點といひ、女達が心を寄せてほめそやしてゐる事など考へて見ると。

とかく見給ひあつかひ・・・てなむ」など聞えて、近く參り寄りて聞ゆ。惟光が人を介して「仰せられ・・しのちなむ、隣の事知りて侍る者呼びて、問はせ侍りしかど、はかゞゞしくも申し・・侍らず。『いと忍びて・・・五月の頃ほひより物し給ふ人なむあるべけれど、その人とはさら・に家のうちの人にだに知らせず』となむ申す。時々中垣の垣間見し侍るに、げに若き女どもの透影・・見え侍り。褶だつものかごとばかり引掛け・・・て、・・かしづく・・・に、文書くとて居て侍りし人の顔こそ、いとよく侍りしか。物おもへるけはひして、ある人々も、忍びてうち泣くさまなどむしるく見え侍る」と聞ゆ・・。君うちゑみ給ひて、知らばやとおもほしたり。覺えこそ・・おもかるべき・・御身の程なれど、御よはひの程、・・・人の靡きめで聞えたるさまなど思ふには、・・すき給はざらむも、なさけなくさう〳〵しかるべ

人のうけひかぬ　あの男なら浮氣するのも當然と世間で承認してくれぬ身分の男でさへ。

なほさりぬべき　矢張相當な婦人については、懸想の念も生ずるのに。

いとゞ惜しうは　さう醜くはない若女房達。

尋ね知らでは　調べあげなくては氣がすまぬ。

下が下と　品定の折に馬頭が、下のなかの下と輕蔑した住居ではあるが。

やみぬべきを　やみぬべきをやみなむを「を」は共に咏嘆の「を」。「ものを」と譯してよい「を」である。

なみ〳〵までは　平凡な女は念頭になかつたのに。

いぶかしく　わからなくなる色色の階級の女があるので。

おいらかならましかば　空蟬がおとなしい女であつたら、氣の毒な過ちをした位で濟まされさうでもあるのに。

しかし。人のうけ引かぬ・・程にてだに、なほさりぬべき・・・あたりの事・は、このましう覺ゆるものを、惟光が と思ひをり。惟「もし見付け出す事もあらうかと見給へ得ることもや侍ると、一寸した機會をはかなきついで作りいでて、せうそこなどつかはし・たり侍。書き馴れたる手筆して、口疾く返りごとなどし侍りき。いと口惜しうはあらぬ若人ども・なむ侍るめる」・と聞ゆれば、源「なほ言ひ寄れ、尋ね知らではさうざうしかりなむ」と宣ふ。かの下が下と思ひ捨てしすまひな・れど、そのなかにも、案外捨てたものでもない女を思ひのほかに口惜しからぬを見つけたらばと、珍らしう・・・おもほすなりけり。

さてかの空蟬のあさましう・つれなきを、この世の普通の女とは・・・ておぼすに、おいらかならましかば、・心苦しきあやまちにて・・・もやみぬべきを、いとねたく負けてやみなむを、・心にかからぬ折なし。空蟬のやうなかやうのなみ〳〵・・・まではおもほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定ののち、詮議してみたくなる品々のある

いとど隈なく 一層何もかもとおもふやうになられたのであらう。

つれなくて 空蟬が何喰はぬ顔して聞いて居るのが恥かしいから。

まづこなたの まづ空蟬の本心を見きはめての後にと思つて居る内に。

船路のしわざとて 船路の旅をした爲に。

人も賤しからぬ 伊豫介は身も賤しくない種姓で。

ねびたれど 年寄つてはゐるけれども。

氣色よしづきてなど 氣色よしづきてなど風情があるといつたやうな男であつた。

湯桁はいくつ 伊豫の樣子を問ひたく思ふけれども。

あいなく 軒端の荻のことがあるので。（空蟬の卷、九六頁）

物まめやかなる 伊豫介のやうな實直な年寄に對して源氏が斯く氣恥かしい感じを抱くのも。

馬頭のいさめ 雨夜品定の時の事。

に、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし。うらもなく待ち聞えがほなる片つ方の人を、あはれと思さぬにしもあらねど、つれなくて聞き居たらむことの恥かしければ、まづこなたの心見果ててとぉぼす程に、伊豫介のぼりぬ。まづ急ぎまゐれり。船路のしわざとて、すこし黑みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。されど、人も賤しからぬすぢに、かたちなどねびたれど、清げにて、ただならず氣色よしづきてなどぞありける。國の物語など申すに、湯桁はいくつ、と問はまほしく思せど、あいなくまばゆくて、御心のなかに、おぼしいづる事もさまざまなり。物まめやかなる大人をかく思ふも、げにをこがましう、うしろめたきわざなりや。げにこれぞなのめならぬかたはなめる、と、馬頭のいさめおぼしいでて、いとほしきに、つれなき心はねたけれど、人のためはあはれとおぼしなさる。むすめをばさるべき人にあづけて、北の方をばね

一方ならず 空蟬の方と軒端荻の方と兩方に對して氣が落着かなくて。

今一度は もう一度空蟬にあふ事は出來まいかと。

人の 女が合意した上の事でさへ。

かろらかに 簡單には忍んで行けさうもない御身分なのに。

まして似げなき 況んや身分が違ふので空蟬は不似合の事に思つて、今更逢ふのも見苦しからうと斷念してゐるのである。

絶えておもほし忘れなむ 源氏が全然空蟬を忘れてしまふのも大變つまらなくつらい事に空蟬は思つて。

言の葉 「言の葉も」とある河内本がよい。

あはれとは 源氏が心を動かされさうな空蟬の人柄であるから。

つれなくねたき 無情で恨めしいけれども、源氏は忘れられないものに思召す。

心づくしに 氣を採んで心配される事があつて。藤壺や空蟬に關する戀の苦勞である。古今秋上「一本の間より漏りくる月の影見れば心盡しの秋は來にけり」

て下りぬべしと聞き給ふに、一方ならず心あわただしくて、「今一度は、ぇあるまじき事にや」と、小君を語らひ給へど、人の心をあはせたらむ事にてだに、かろらかにえしもまぎれ給ふまじきを、まして、似げなき事に思ひて、今更に見ぐるしかるべし、と思ひはなれたり。さすがに、絶えておもほし忘れなむ事も、いとかひなく憂かるべき事に思ひて、さるべき折々の御いらへなど、なつかしく聞えつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしうらうたげに、目とまるべきふし、加へなどして、あはれとはおぼしぬべき、人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきにおぼす。いま一方は、主つ秋にもなりぬ。人やりならず心づくしにおもほし亂るる事どもありて、大殿には絶間おきつつ。恨めしくのみ思ひ聞え給へり。

引きかへ うつてかはつて御息所を冷淡にするのは氣の毒だ。

餘處なりし まだ我がものでなかつた當時のやきもきした心もちのやうなむやみに熱するといふ事が無いのも一體どういふわけか。

女は 御息所は極端に物事を思ひつめる性質で。

艶の程など 源氏十七、御息所二十四。

人の漏り聞かむに 人が二人の仲をもれ聞いたら、年も似あはしくないと思ふだらうのに、斯くつれない御夜がれの寢覺の折に。

いとど この語は「おぼししをるゝ」を修飾する。「いとど」は物を思ひつめる性質だから、人一倍にの意。

さま〳〵なり それ〴〵である「さまざま」とは空蟬の物思ひと六條御息所の物思ひとを指す。

紫苑色の 中將の君の樣子。時節に相應した紫苑色の衣に、羅の裳を手ぎはよく引結んで居る腰の樣子は、さつぱりとしてあるやかである。紫苑色とは表は蘇芳、裏は萌黃。

六條わたりにも、とけがたかりし御氣色を、おもむけ聞え給ひてのち、引きかへしなのめならむはいとほしかりし。されど餘處なりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなき。されども、いかなる事にかと見えたり。女はいと物をあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡の程も似げなく人の漏り聞かむに、いとど斯くつらき御夜がれの寢覺、おぼしをるる事、いとさま〳〵なり。霧のいと深きあした、いたくそそのかされ給ひて、ねぶたげなる氣色に、うち嘆きつつ出で給ふを、中將のおもと、御格子一間あげて、見奉り送り給へとおぼしく、御几帳引きやりたれば、御ぐしもたげて見いだし給へり。前栽のいろ〳〵亂れたるを、すぎがてにやすらひ給へる樣、げにたぐひなし。廊のかたへおはするに、中將の君御ともにまゐる。紫苑色の折にあひたる、羅の裳あざやかに引きゆひたる腰つき、さわやかになまめきたり。

容易に心をゆるさうとなさらなかつたのに口説き落されて後

御息所の侍女

御息所が頭をあげて引きのけたので

御息所方に泊つた翌朝

源氏が女房達にせき立てられて

源氏の通つて來られない夜

御息所に源氏を見送り給へとの意味らしく

行過ぎ躊躇に躊躇

隅の間 間は柱と柱との間。隅の方。

匂欄 てすり。

めざましくも つばなものだ。

咲く花に 源氏は思召す。花に對しては移るといふ言葉は惜しまなければならないが、中將の今朝の美しい顏を見ると氣がうつつて手に入れずに通り過ぎるのはつらい。「移」るは色の衰へる意味である。「咲く花に云々」といつたもので、さて六條御息所からは中將に氣のかはる意味を表はしたものである。

朝霧の 朝早々お歸りになる所から考へると、御息所にお氣をとめさせられぬのでせうとめぬとぞ」とあるべき所であるが、それでは調子が惡いから、わざと破格にいつたものであらう。

おぼやけごとにぞ 源氏は中將によみかけたのに、中將は主人御息所の事にそらして返歌をした。

侍童 源氏が連れて來たお側付の男の子。

殊更めきたる 態とがましい。露にぬれるのを避ける爲に殊更指貫をはいたのである。

大方にうち見奉る 特別の關係なしに源氏を見奉る人でさへ。

賤しきにても 賤しい地位でもよいから。

さりぬべきついでの御言の葉も 下の一いかがはおろかに思ひ聞えむ一に續く。まして近く奉仕して源氏のなつかしい御樣子を見返り給ひて、隅の間の勾欄に、暫し引きすゑ給へり。うちとけたらぬもてなし、髮のさがりば、めざましくもと見給ふ。

源氏が中將を

源氏の「折らで過ぎうき」とよまれたのを小供心に眞正直にうけたのである

垂れ具合

強直にしてゐる

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎ憂きけさの朝顏いかがすべき」とて、中將の手をとらへ給へれば、いと馴れて疾く、朝霧の晴れ間も待たぬ氣色にて花に心をとめぬとぞ見る

と、おほやけごとにぞ聞えなす。をかしげなる侍童の、姿この戚じがよましう、殊更めきたる指貫の裾露けげに、花の中にまじりて、朝顏折りてまゐる程など、繪にかかまほしげなり。大方にうち見奉る人だに、心しめ奉らぬはなし。物のなさけ知らぬ山賤も、花の蔭にはなほやすらはまほしきにや、この御光を見奉るあたりは、ほど〳〵につけて、わがかなしと思ふむすめを、仕うまつらせばやと願ひ、もしは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、賤しきにても、なほこの御あたりにさぶらはせむと、思ひ寄らぬはなかりけり。ましてさりぬべきついでの御

源氏の美しい姿を

愛してゐる娘を

見奉る女で、少しでも物のわかつた人は、然るべき樣會の源氏のお言葉をもどうして紐略に思はうぞ。

明暮うちとけても　源氏がくつろいで此處においでにならぬ事を。

心もとなき事に　中將などは氣が氣でなく思つて居るらしい。

あづかりの垣間見　惟光が擔當してゐる夕顔の宿の探査。

案內見とりて　樣子を見て取つて。

その人とは　あの女が誰であるかは一切わからぬ。以下源氏への報告。

この主とおぼしきも　あの二人と思はれる女も、これが夕顔である。

遣ひわたる　家內を歩く樣。

かたちなむ　夕顔の容姿。

さき追ひて　先拂をしながら前を通る車。

右近の君こそ　右近の君さん。「こそ」は人を呼ぶ時に名の下につける敬助詞。

これより　宅の前を。

いかでさは　どうして中將殿とは分るか。

いで見む　さあ私も見よう。

言の葉も、（中將の如き女房を指す）なつかしき御氣色を（言の葉も）見奉る人の、すこし物の心を思ひ知るは、いかがはおろかに思ひ聞えむ。明暮うちとけてしもおはせぬを、心もとなき事に思ふべかめり。まことや、かの惟光があづかりの垣間見は、いとよく案內見とりて申す。惟「その人とは更に思ひより侍らず。人にいみじく隱れ忍ぶる氣色になむ見え侍るを、つれ〳〵なるままに、南の半蔀ある長屋にわたり來つつ、車の音すれば、若き者ども、外をのぞきなどすべかめるに、この主とおぼしきも、這ひわたる時は（長屋に）ベンめる。かたちなむ、ほのかなれど、いとらうたげに侍る。一日、さき追ひてわたる車の侍りしを、のぞきて、童べの（側れたる）急ぎて、童『右近の君こそ、まづ物見給へ。中將殿こそこれより（此處をお通りになる）わたり給ひぬれ』といへば、又よろしき大人いで來て、右近『あなかま』とて、手かくものから、右近『いかでさは知るぞ。いで、見む』と、て、這ひわたる。打

打橋　四頁參照。

葛城の神　一言主神の事。役の行者が葛城山と金峰山との間に岩橋を架けさせた時、この神は容貌が醜いといつて、晝は出ず夜だけ工事に從つた爲に、架橋が中絕したといふ傳說が水鏡本朝神社考などに見える。

なにがしくれがし　童女が、あれは誰、これは誰と名ざしたのは。

小舍人童　近衞の中少將等の召連れる童。

しるしに　頭中將である事を證明する爲に隨身や童の名をあげたのである。

たしかにその車を　その車を見たしかめるべきだ。

もしかのあはれに　もしか頭中將が品定の折に語つた女ではなからうかと氣づくにつけても。

わたくしの懸想も　自分にもそこの女房によく〳〵いひ寄つて置いて。

ただわれどもと　先方では全然女房同志だけで主人は居らぬものやうに見せかけて物などいふ若い女が居るのを。その若い女が主人夕顔である。

そらおぼれして　空とぼけて。

ことあやまりしつべきも　子供がいひそこなつて、主人にいふやうな言葉遣ひしさうなのも他の女房がごまかして。

また人なき　女房以外には主人らしい人の居らぬ樣子を。

橋だつものを道にてなむ通ひ侍る。（長屋に）急ぎ來るものは、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋（打橋）よりも落ちぬべければ、（心）陰呑に捧へて置いたもんだ女共『いで、この葛城の神こそ。さかしらしおきたれ』とむづかりて、物のぞきの心もさめぬめり。（頭中將）君は御直衣姿にて、御隨身ども（御）もありし。『なにがし、くれがし』とかぞへしは、頭中將の隨身（ども）、その小舍人童（どねりわらは）をなむ、しるしにいひ侍りし。」なかのあはれに（と）忘れざり（がたに）し人にや、と思しよるも、いとくしおきて（侍り）、案內（樣子は匠にすつかり見極めておくのに）も殘るところなく見給へおきながら、だわれどもと知らせて物などいふ若きおもとの侍るを、そらおぼれ（めき）してなむ、はかられまかりありく。（彼等は）いとよく隱し（おき）たりと思ひて、ちひさき子供などの侍るが、ことあやまりしつべきも、（を）（いとよう）ごま化して）いひ紛らはして（つつ）、また人なきさまを（なん）強ひ

かりにても いくら假住居にせよ、身分ある女なら場末のあばら屋に住んで居る筈はないから、この宿る住居の樣を思ふと、これこそ、馬頭が輕蔑した下の品の人なのであらう。

思ひのほかに 帚木卷に「淋しくあばれたらむ葎のかどに思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられ居たらむこそ、限りなく珍しくは覺えめ」とある。

忍びておはしまさせ 源氏をこの女の許に忍んで通ひ始めなさるやうに取持つた。

女をさして 源氏は女を格別誰と詮索もしなければ。

わりなうやつれ むやみと貧弱な姿にやつして。

例ならず いつになく熱心に通はれるのは。

懸想人の 自分のやうな色事師が。

てつくり侍り」など語りて笑ふ。源「尼君のとぶらひに物せむついでに、垣間見せさせよ」と宣ひけり。

早舞に行く序に

仮住居にせよ

かりにても、やどれるすまひの程を思ふに、これこそ、馬頭かの人の定めあなづりし下のしなならめ、そのなかに、思ひのほかにをかしき事もあらば、などおもほすなりけり。惟光、聊かの事も、源氏の御心に、あやまちたがはじと思ふに、おのれも隈なき好色心にて、いみじくたばかり惑ひありきつつ、忍びておはしまさせそめてけり。

ためぐらして

其の當時の事

この程のこと、くだくしければ、背きもらしつ。女をさしてその人と尋ねいで給はねば、われも名のりをし給はで、いとわりなうやつれ給ひつつ、例ならずおりたちありき給ふは、おろかにはおぼさぬなるべし、と見れば、惟光わが馬をば奉りて、御供に走りありく。惟「懸想人の、いと物げなき足もとを見つけられて侍らむ時、からくもあるべきかな」とわぶれど、人に知らせ給はぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身

女を一通りには思はぬ

源氏は誰にも秘密にして居るので

顔むげに 誰も全然顔見知りのない子供一人だけを。

もし思ひ寄る 萬一先方で感づく樣子もありはせぬかと。

隣 大貳乳母の家。

御使に 源氏からの御使に人を附けてやつたり、源氏が曉に歸る道を窺はせたりして、ありかをつきとめようとするが。

見てはえあるまじく 逢はずに居れない程夕顔の事が源氏の心にかかるので、源氏は女の家に通ふ事を不都合な輕率な爲業だと反省してつらい思ひをしながら甚だ頻繁に通はれる。

怪しきまで 下の「思ひわづらはれ給へば」に續く。晝間の隔ても晩に逢ひに行くまでの晝の隔てをも待遠しがられたりして。

かつはいと物ぐるほしく 源氏は夕顔を思つて煩悶する一方、自分ながら狂氣じみた感じがして、さ程迄執心すべき事柄でもないのにと、ひどく冷靜に考へて見られる。

おもきかたは 重々しい點は乏しくて。

ばかり、さては、顔むげに知るまじき童一人ばかりぞゐておはしける。もし思ひ寄るけしきもやとて、隣に中宿をだにし給はず。女も、いと怪しく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ窺はせ、曉の道をうかがはせ、御ありか見せむとたづぬれど、そこはかとなく惑はしつつ。さすがにあはれに、見で居れない程はえあるまじくこの人の御心にかかりたれば、びんなくかるがるし、くびんなかるき事とも、おもほし返しわびつつ、いとしばく女の家におはします。戀の道はかかる筋は、眞面目な人まめ人の亂るる折もあるを、源氏は立派に自重していと目やすくしづめ給ひて、人の咎め聞ゆべき振舞はし給はざりつるを、怪しきまで、別れての朝の間今朝の程、晝間の隔てもおぼつかなくなど、思ひわづらはれ給へば、且はいと物ぐるほしく、さまで心とどむべき事のさまにもあらずと、いみじく思ひさまし給ふ。人の女のけはひ、いとあさましくやはらかにおもきかたは重々しい點は乏しくて、物深く

併しこの女がかはゆくて

逢はずに

やつれたる狩の御衣　みすぼらしい狩衣。源氏の身分では直衣を着るべきものだから「やつれたる」といつたものである。

物のへんぐ　物の變化。化けもの。

この好色者　惟光をさす。

大夫　惟光をさす。惟光は五位であるから大夫といふ。「たゆう」と發音する。

女がたも　この句は「いかなる事にかと云々」の上に移して考へる。

怪しやうたがひたる　不思議に様子の變つた物思をした。男が冷淡なのを心配するのが常であるのに、この心配はさうでないから「やうたがひたる」といつたのである。河内本は「……心得がたく女方も思ふに、いと浮びたる……」となる。

うらなく　心中に隠す所なく。

いづ方にも　女がいつ何處へ移つて行くとも知れたものでないと源氏は思ふにつけて。

ひなどはおくれて見ゆれど、何ら何まで若々しいがひたぶるに若びたるものから、世馴い身分でもあるまいをまだ知らぬにもあらず、いとやんごとなきにはあるまじ、いづくにいとかくしも殊更めきて、御裝束をも、やつれたる狩の御衣を奉り、さまを變へ、顔をもほの見せ給はず、夜深き程に、人をしづめて夜深き程に女の家に出で入りなどし給へば、昔ありけむ物のへんぐゑめきて、うたて思ひ歎かる女は。れど、人の御けはひ有様は、はた手さぐりにもしるきわざなりければ、誰ばかりにかはあらむ、なほこの好色者のしでかしたしわざひながら、惟光がせめてつれなく知らずがほにて、何けなく少しも かけて思ひ寄らぬさまに、たゆまずあざけて居るのでいかなる事にかと心得がたく、女がたも、怪しうやうたがひたる物思ひをなむしける。思ふに君も、斯くうらなく油断させて たゆめて這ひ隠れなば、いづこを目あてはかりとか我も尋ねむ、假初のかくれがとはた見ゆめれば、い

おひ惑はして　取り逃がしてもいい加減に諦めておけるものなら、只これだけの慰み事としても済まされさうではあるが。

誰となくて　人にはこの女を誰とも知らせずに。

聞えありて　噂が立つて、よしそれが不都合な事であつても。

おもほしよる　これも何かの因縁だと解決の道を因縁に求められる。

げにいづれか　成程私とあなたと二人の内どちらかが狐だらうな。まあ私にだまされて居なさい。

さもありぬべう　源氏の言ひなりになつてもよからうと女は思つた。

かたはならむ　缺點だらけの人であつても。

ひたぶるに隨ふ心は　只管源氏の言ひなりになつて居る女の性質は、大變可憐な人柄であると思ふにつけて。

づ方にも移ろひ行かむ日をいつとも知らじ、とおぼすに、おぼ惑はして、なのめに思ひなしつべくば、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべき事を、更にさて過ぐしてむとおぼされず、人目をおぼして隔ておき給ふ夜々などは、いと忍びがたく、苦しきまでおもほえ給へば、なほ誰となく忍びて二條の院に迎へてむ、もし聞えありてびんなかるべき事なりとも、さるべきにこそは、わが心ながら、いとかく人にしむ事はなきを、いかなる因縁契りにかはありけむ、などおもほしよる。源「いざ、いと心気楽やすき所にて、のどかに聞えむ」など語らひ給へば、女「なほ怪しう。かく宣へど、世間並でない仕向けづかぬ御もてなしなれば、物おそろしくこそあれ」と、いと若びていへば、げにとほほゑまれ給ひて、源「げにいづれか狐ならむな。ただはかられ給へかし」と、なつかしげに宣へば、女もいみじく靡きて、大へん心ゆるして さもありぬべう思ひたり。世になくかたはならむことなりとも、ひたぶるに隨ふ心は

床夏　床夏の歌をよんだ女ではなからうかと。「疑はしく」は「語りし」を修飾すべきもので、「疑はしく」と切る語勢ではなつて、河内本のやうに「床夏ぞと思ふが」、河内本のやうに解かなければ、文法的説明がつかないから、しばらく河内本に従つておく。

忍ぶるやう　女が自分の種姓を隠す子細があるのだらうと察して。

隠るべき心ざまなどはなければ　「心ながらも」云々に續く。「かれ〳〵に……思ひかはることもあらめ」の意で下文を修飾する。

さやうに思ひかはる　此女が逃げ隠れるといふ事もあらうが。

心ながらも　こちらが打捨てておかない以上は氣の變る女でなければ、こちらで少しでも氣の變るといふことがあるのは、かはいさうなことまで自分ながらも思はれた。「さへ」は捨てることより「少し移ろふ事も」の意。

田舎の通ひも　田舎へ商賣に行く氣にもならないから。

北殿こそ　北隣さん、私のいふのを聞いて居て下さるか。

程なきを　間近に聞えるのを。

艶だち　風流がつたりする女ならば。

されどのどかに　けれども夕顔は暢氣で、つらい事でも、悲しい事でも、恥かしい事でも、深く氣にして居る樣子ではなく。

らうがはしき　亂雑な。

鳴る神よりも　古今戀四「天の原踏み轟かし鳴る神も思ふなかをばさくるものかは」

碓　杵を機上に裝置し足で踏んでつくふみうす。

枕上　枕元。

白栲　楮の皮などの纖維で織つた白い布。

取り集めて　色々な事が一緒になつて。

・く、いとあはれげなる人と見給ふに、なほかの頭中將の床夏・疑はしく語りし心ざままづ思ひいでられ給へど、忍ぶるやうこそはと・・・、あながちにも問ひいで給はず。氣色ばみて、ふとそむき隠るべき心ざまなどは・なければ。かれ〳〵にとだえおかむ折・こそは、さやうに思ひかはることもあらめ・、心ながらも、・・・・・・・すこし・移ろふ事・あらむこそあはれなるべけれ、とさへおぼしけり。

八月十五夜、隙なき月影、隙おほかる板屋・、殘りなく漏り來て、見ならひ給はぬすまひのさまも珍らしきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々・・・・・・、あやしき賤の男のこゑごゑ目さまして、「あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも賴むところすくなく、田舎の通ひもおもひかけねば、いと心細・けれ。北殿こそ、聞き給ふや」などいひかはすも聞ゆ。いとあはれ・なるおのがじしの營みに起きいでて、そそめきさわぐも・

程なきを、女・いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべきすまひのさまなめりかし。されどのどかに・・・・・・・・・・・、つらきも憂きも傍痛き事も・・、思ひ入れたるさまならで、わがもてなし有樣は、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なさを、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なか〳〵恥ぢかがやかむよりは、・・・・・、罪許されてぞ見えける。ごほ〳〵と、鳴る神よりもおどろ〳〵しく踏みとどろかす碓の音も、枕上とおぼゆ。あな耳かしがましと、これにぞ・・・・・おぼさるる。何の響きとも聞きいれ給はず、いとあやしう目ざましき音なひとのみ聞き給ふ。くだ〳〵しき事のみ多かり。白栲の衣うつ砧のおとも、かすかにこなたかなた・聞きわたされ、空飛ぶ雁の聲・・・、取り集めて、忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引きあけ給ひて、もろともに見いだし給ふ

壁のなかの 源氏は壁の中のこぼろぎへ間を置いて時々聞えて來るのを聞きつけて居られるのだから、庭の蟲の聲も、耳にさしあてて鳴くやうに間近く聞えるのを、却つて風變りで面白いと感ずるのも、源氏の愛情が深い爲に、一切の缺點が許されるのであらう。

あな心苦しと あゝいぢらしいと。

心ばみたるかたを 氣取つた所を少し附け加へたらばと。

この世のみならぬ 現世だけでない、來世かけての約束などまでして、女に力づよく思はせると。

程なき庭に、風流なされたる呉竹、前栽の露は、なほ斯かる所にも同じごときらめきたり。蟲の聲々亂りがはしく、壁のなかの蟋蟀だに、間遠に聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるやうに鳴き亂るるを、なか〳〵さまかへて、おぼさるるも、御志一つの淺からぬに、よろづの罪許さるるなめりかし。白き袷、薄色のなよよかなるをかさねて、花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立ててすぐれたる事もなけれど、ほそやかにたを〳〵として、物うちいひたるけはひ、只いとらうたく見ゆ。すこし心地ばみたる方をすこし添へたらばと見給ひながら、なほうちとけて見まほしくおぼさるれば、

源「いざ、ただこのわたり近き所に、心やすくてあかさむ。かくてのみはいと苦しかりけり」と宣へば、女いかでか。俄ならむ」と、いとおいらかにいひて居たり。この世のみならぬ契りなどまで頼め給ふに、うちとくる心ばへなど、あやしくやうかはりて、世馴れたる人とも覺えねば、人の思はむところもえ憚り給はで、右近を召しいでて、御身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。このある人々も、かかる御志のおろかならぬを見知れば、おぼめかしながら、頼みをかけ聞えたり。明方も近うなりにけり。鳥の聲などは聞えで、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。起居のけはひ、堪へがたげに行ふ。いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにか。と聞き給ふに、「南無當來の導師」とぞ拜むなる。源「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがり給ひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて來む世も深き契りたがふな

長生殿の古きためしはゆゆしくて、羽をかはさむとは引きかへて、彌勒の世をぞかねて給ふ。行くさきの御頼め、いとこちた

右近 夕顔の侍女。

このある人々も 此處に居る夕顔の侍女達も。

御嶽精進 御嶽は大和の金峰山をいふ。役の行者が此の山で千日の精進をして藏王權現を感得したので、修驗者は此山に入るのに先立つて千日の精進を行ふ慣例であつた。

朝の露に 文集秦中吟「朝露貪二名利一、夕陽愛二子孫一」

南無當來の導師 南無は歸命、敬禮と譯する。當來の導師は彌勒菩薩の事。當來は未來の意で、彌勒は釋尊滅後五十六億七千萬年の後に生れるからいふ。

この世とのみは 彼等も現世だけとは思はぬ。故に私共も二世かけて契らう。

優婆塞が 優婆塞とは俗の儘で佛道を修行する男子で、此處は御嶽精進をする人をいふ。あの優婆塞が來世を祈るのを私達の道しるべとして、來世に於てもあなたは此深い契りを違へて下さるな。

長生殿の 玄宗と楊貴妃とが長生殿で契つた古事は緣起がわるいから。

ゆゆしくて 忌はしいので。

羽をかはさむ 長恨歌「在天願作二比翼鳥一」、彌勒出現の世をかねて末永く契られる。

前の世の　今のつらさから想へば前世の宿縁の拙さが分つてゐる私の事故、豫め將來を頼みに思ふ事は出來ませぬ。

かやうのすぢ　歌よむ事など。

いさよふ月　山の端に沈まうとしてまだ沈まず、暫くある間の月。出る時の月もいふが、こゝは沈む時の月。

はしたなき程に　明るくなると人に見られてきまりがわるくなる故に、さうならぬ先に出かけようと。

なにがしの院　源氏の別荘である。河海抄では河原院に擬してゐる。

簾垂をさへ　さうでなくても露けきに簾垂までも擧げられたから。

古へも　私が今始めて經驗するやうな苦しい朝の道を、斯く古人もまごつきながらあるいた事でせうか。

し。（女）

前の世の契知らるる身の憂さに行末かねて頼みがたさよ

かやうのすぢ・・・なども、さるは心もとなか・・めり。いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむ事を、女は・・・思ひやすらひ、とかく宣ふほどに、俄に・・雲隠れてあけゆく空、いとをかし。はしたなき程にならぬ先にと、例の急ぎいで・給うて、かろらかにうち乗せ給へれば、右近ぞ乗りける。そのわたり近きなにがしの院におはしましつきて、あづかり召しいづる程・・・荒れたる門の忍ぶ草繁り・・て見あげられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾垂をさへあげ給へれば、御袖も・・いたう濡れにけり。「まだかやうなる事をならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

古へもかくやは人の惑ひけむわがまだ知らぬしののめの道ならひ給へりや」と宣ふ・。女、・・恥ぢらひて、

山の端の　君の御本心も知らずに隨ひ行く私は、途中で捨てられて消えてしまふかも知れませぬ。

かのさしつどひたる　あの今迄大勢一緒にゐた習慣がついてゐるからであらう。

御座など　御座の設備などする間。

來しかたの事　頭中將が通つて來た當時の事。

けいめいしありく　世話を焼いて居る樣子によつて。

この御有樣　事を悟つた。これが源氏である

御供に　御供に誰もついて來ませんでしたね。それは甚だけしからぬ事です。

陸まじき下家司にて　この留守番は源氏が親しく召使ふ下家司で。家司（けいし）はいへづかさともいひ、親王、攝關以下三位以上の家の家政を執る者で、その下役を下家司といふ。

殿にも　左大臣方にも。

口がためさせ　口どめされる。

「山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ心細く」とて、物おそろしうすごげに思ひたれば、かのさしつどひたるすまひの心ならひならむと、源氏はをかしくお・ぼす。御車入れさせて、西の對に御座などよそふ程、・・廊の勾欄に御車引きかけて立ち給へり。右近、艶なる心地して、來しかたの事なども、人知れず思ひいでけり。あづかりいみじくけいめいし・あり・く氣色に、この御有樣・知り果てぬ。ほの〴〵と物見ゆるほどにおり給ひぬめり。假初なれど・・、清げにしつらひたり・。

預「御供に人もさぶらはざりけり。いと不便なるわざかな」とて、陸まじき下家司にて、殿にも仕うまつる者なりければ、參り寄りて、預「さるべき人召すべきにや」など申すれど、源「殊更に人く・まじき隠處求めたるなり。更に心よりほかに漏らすな」と、口がためさせ給ふ。

（女の歌）

（預の下家司にて陸まじく つかまつる者なれば參り寄りて殿ぎありく）

御粥・・・など急ぎ

おきなが川と 萬葉二十「鴻鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ（新勅撰四語らふ）事盡きめやは」息長川は近江。一説に海中を流れる川といふ。

いといたく荒れて なにがしの院の有様。

うとましく物ふりたり 氣味わるきを覺える程時代がついてゐる。

曹秋の野らにて 古今秋上「里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」

けうとげに 氣味わるく。河内本の「怖ろしげなり」に從ふのがよい。

別納 離れ家。

曹司などして 局などをしつらつて。

顔はなほ隱し給へれど 細流抄に、昔は覆面をたれて面をかくしてありく事ある也とある。

事のさま 事情にそぐはない。

夕霧に 私が今顔をあらはす程の仲になつたのは、道の通りがかりにお目にかかつた緣によつてなのです。玉鉾は「道」の枕詞を代用語として用ひたもの。

源氏に差上げたが參らせたれど、取りつぐ御給仕まかなひ・・・・・・・・・・・・・・・うちあはず。まだ知らぬ事（心地し給へば只をかしく哀）・・・・・・・・・・・・・・・なる御旅寢に、御身と語らふ事は長く遊きないとおきなが川と契り給ふよりほかの事なし。

日（さしあが）・・・・たくる程に起き給ひて、格子（ひとま）・・・・手づからあげ給ふ。源氏

いといたく（う）荒れて、人目もなく、廣々とはる〳〵と見わたされて（る）、木立いとうとましく物ふりたり。手近のけぢかき草木（前栽）などは、ことに見しけうとげになりにける所かな。別納（べつなう）のかたにぞ、曹司（ざうし）などして怖ろしい（怖）と思ふ（ひたぶる）ければ、げにかばかりにて隔てあらむも、事のさま（に）たがひたりとおぼして、

源氏「夕露に紐とく花は玉鉾の便りに見えしえにこそありけれ

西の對

氣味わるく

緣

露の光やいかに」と宣へば、女は流し目に源氏の方を見て尻目に見おこせて、

光ありと見し夕顔のうは露はたそがれ時の空目なりけり

とほのかにいふ（を）。つまらない歌だが源氏は興味を持たれたをかしとおぼしなす。げにうちとけ給へる源氏のさま世になく、所がら（は）、まいてゆゆしきまで見え給ふ。源「際限盡

もなく きせず隔て給へる（が）つらさに、顔をあらはさじと思ひつるものを。

（ねたく）・・・今だに名のりし給へ。いとむくつけし」と宣へど、（ほ）女「海士（あま）の子なれば」とて、宿なしの賤しい者故さすがにうちとけぬさま、いと（いたく）・・・あいだれたり。（えてゐる）源「よし、これもわれからなめり（な）」と（と）、恨みかつは語らひ暮し給ふ。惟光尋ね聞（尋ね聞）えて、御くだもの・・・など參らす。右近がいはむ事（の）、さすがにいとほしければ、源氏の近くもえさぶらひ寄らず。源氏がこの女故にかくまでたどりありき給ふも（を）、をかしう（く）さもあり（おほさむ）・・・ぬべきさまにこそは、と推し量（思ふ）らるるにも、自分が手に入れる事の出來た女をわがいとよく思しら（き事を）・・・思ひをる。源氏は たとしへなくしづ（のど）かなる夕べの空を眺め

露の光や 前に女が「心あてにそれかとぞ見る云々」とよんだ歌についていつた詞で、私の顔は美しいかの意。

光ありと 君の御顔を美しいと見たのは、私が夕暮に見た見そとなひでございました。反對にいつたのである。

海士の子なれば 新古今雜下、朗詠下雜「白波の寄する渚に世をつくす蜑の子なれば宿も定めず」

これもわれから 御身が種姓を隱すのも私が今迄隱したからだらう。古今戀五「蜑の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそ泣かめ世をば恨みじ」

右近がいはむ事 源氏に取持つた事を右近がかれこれ言ひ出さうかと惟光はつらく思つて。

きかしうざもありぬべきさま 美しくてそれだけの價値ある女だらうと想像されるにつけても。

めざましう 寵愛の甚しいのをあんまりだと。

夕ばえを 夕日に映えて美しく見える姿を二人互に見かはして。

若う心苦し 夕顔の様子が若々しくいぢらしい。

名殘なく すつかり見せてしまつた間柄でありながら。一三二頁を見よ。

うちに 以下源氏の心。主上がどんなに私を探しておいでの事だらう。

いづこに尋ぬらむ 勅命によつて探しに出た人達は何處にさがしに行つてゐるだらう。

いとほしきすぢは 氣の毒と思ふ人の事は。御息所のことは。

思ひくらべられ 夕顔のいぢらしい樣を見るにつけて、御息所の事が自然思ひくらべられる。

給ひて、奥の方は暗う・・物むつかしと女は思ひたれば、端の簾垂をあげて、添ひ臥し給へり。夕ばえを見かはして、女もかかる有樣を、思ひのほかに怪しき心地はしながら、よろづの歎き忘れて、すこし打解けゆく氣色、いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮して、物をいと怖ろしと思ひたるさま、若う心苦し。格子疾くおろし給ひて、御となぶら・・・参らせて、源「名殘なくなりにたる御有樣にて、なほ・心のうちの隔て殘し給へるなむつらき」と恨み給ふ。禁中うちにいかに求めさせ給ふらむを・、いづこに尋ぬらむ、・とおぼしやりて、又一方では自分ながらかつは怪しの心や、六條御息所も六條わたりにも、自分が通つて行かぬからいかに思ひ亂れ給ふらむ、恨みられむも・苦しうことわりなり、と、いとほしきすぢはまづ思ひ・・聞え給ふ。無心な夕顔のさま何心もなき源氏との對坐をさしむかひを、かはゆいと思ふにつけてあはれとおぼすままに、御息所があまり心深く、相手の人見る人も苦しき御・・・・有樣を・すこし取り捨てばや、と思ひくらべられ給ひける。

尋ねもおもほさで あなたは私を氣にかけても下さらないで。

物におそはるる 魔物にうなされるやうな氣がして。

太刀を引き拔きて 妖魔を拂ふ爲である。

紙燭さしてまゐれ 紙燭をつけて持つて來い。紙燭は一一一頁參照。

いかでかまからむ 暗くて渡殿までは辿も行けませぬ。

疎まし いやらしく聞える。

人はえ聞きつけで 誰も手の音を聞きつけないで參るものがない。

宵過ぐるほどに、時分すこし寢入り給へるに、源氏が御枕上・・の方に、いとをかしげなる女居て、女「私があなたを大層美いと思つてゐるのに おのがいとめでたしと見奉るをば、尋愛して尋ねても下さらないで ねもおもほさで、かくことなる事なき人をねて連れて來て おはして時めかし給ふこそ、いと心外でめざましくつらけれ」とて、この御かたばらの・夕顔人をかき起さむとすと夢に見給ふ・・。源氏は物におそはるる心地して、驚き目をさます給へれば、燈火も消えにけり。うたていやな心持であるからおぼさるれば、太刀を引き拔きて、うち置き給ひて、右近が近く臥したるを起し給ふ・・。これも右近物・怖ろしと思ひたるさまにて、氣色源氏のそばにまゐり寄れり。源「渡殿なる・・・・宿直人起して、『紙燭さしてまゐれ』といへ」と宿直人に宣へば、右「暗くて・・・いかでかまからむ。暗うて」といへば、源「あな若々し」と、うち笑ひ給ひて、宿直人を召す爲に手をたたき給へば、山彦の反響するたふる聲・・・・、いと疎まし・・。人はえ聞きつけで・・・・参らぬに、この女夕顔君、いみじく怯へてなきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどびつしよりになりて、われかの氣色なり。正體もない 右「物おぢをなむ夕顔の性質をいふ

わりなく 夕顔は無闇に物をことはがりなさる御性質ですから。

引き寄せ給ひて 右近を夕顔のそばに引寄せなされて。

渡殿の火も 前頁に「火も消えにけり」とあるのを受けていふ。

この院の この院の留守番の子で源氏が親しく使用する若者、それは瀧口である。

睦まじく使ひ給ふ 源氏が。

上童 殿上童。

御こたへして 預りの子が。

弦打 鳴弦ともいふ。妖魔を拂ふ爲に矢を番はずに弦を鳴らす事。

來たりつらむは 來たであらうが何處に行つた。

さぶらひつれど 惟光は伺候して居りましたが、お召しがないので。

瀧口 清涼殿の艮の御溝水の落ちる所を瀧口といひ、そこに候して禁中を警護する武士をも瀧口といふ。この預の子は瀧口であつたのである。

ゆづる 弓弦。

わりなくせさせ給ふ御本性にて、いかにおぼさるるにか」と右近も聞ゆ。いとかよわくて、晝も空をのみ見つるものを、いとほし、と源氏がおぼして、源「われ人を起さむ。手たたけば、山彦の こたふるいとうるさし。ここに暫し夕顔のそばに居よ近く」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸にいでて、戸を押しあけ給へれば、渡殿の火も消えにけり。風すこしうち吹きたるに、宿直人はすくなくて、宿直の者は皆さぶらふ限り、皆寢たり。この院のあづかりの子、睦まじく使ひ給ふ若きをのこ、また上童一人、例の御隨身ばかりぞありける。召せば、御こたへして起きたれば、源「紙燭さして參れ。『隨身も弦打して、油斷して寢込んで居るべきでない絶えずこわづくれ』と仰せよ。人ばなれたる所に、心とけていぬるもの か。惟光の朝臣の來たりつらむは」と問はせ給へば、預の子「さぶらひつれど、仰言もなし。曉に御迎へに參るべき由申してなむ、歸宅まかで侍りぬる」と聞ゆ。このかう申す者は、瀧口なりければ、ゆづるい

名對面 名謁とも聞籍ともいふ。家の一刻に宿直の官人が姓を問はれて名のる事。

宿直奏 瀧口の武士が姓を名のる事。一八頁參照。

歸り入りて 源氏が元の所へ。

さながら臥して さつきの儘にうつぶしになつて。

こはなぞ これは何とした事だらう。

物ぐるほしの 氣狂じみた程のことはがりやうだ。

けおそろしう 「け」は接頭語。

お前にこそ 夕顔樣こそつらく思つておいでの事でせう。

などかうは なぜかう怖ろしがるのか。夕顔にいふ詞。

なよ〳〵として 體がぐにやぐにやして。

いといたく若びたる 夕顔の人柄。

せむ方なき 何とも爲樣のないやうな氣がなさる。

似合はしくとつきづきしく打鳴らして、「火の用心火危し」 といふ〳〵、父なる人あづかりが曹司のかたへにいぬるなり。源氏が禁中の事をうちをおぼしやりて、名對面は過ぎぬらむ、瀧口の宿直奏 今こそ とおし量り給ふは、まだいたう更けぬにこそは。歸り入り てさぐり給へば、女君は さながら臥して、右近は、夕顔のかたはらにうつぶしる所は、狐などやうのものの、人おびやかさむとて、けおそろしう思はするならむ。自分が居るからまろあれば、さやうのものには おどされじ」とて、右近を引起し給ふ。右「いとうたて。怖ろしい氣分がわるい亂り心地のあしう侍れば、うつぶし臥して侍るなり。夕顔の事お前にこそわりなくおぼ さるらめ」といへば、源「そよ。などかうは」とて、夕顔をかいさぐり給ふに、息もせず。引き動かし給へど、夕顔のさまなよ〳〵として、われにもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、正氣もない有樣魔物に正氣を奪はれたものにけどられぬるな めりと、せむ方なき心地し給ふ。

近き御几帳を 源氏は自ら手近にある御几帳を引寄せて。瀧口に女の姿を見せぬ爲である。**なほもて參れ** 紙燭をもつと近く持つて來い。

例ならぬ事にて 源氏の近くに寄るなど嘗てない事故。

お前近くもえ參らぬつつましさに お前近くも參る事の出來ないさうした遠慮から。

昔物語などに 昔物語などにこそこんな不思議な話は聞いた事があるが。

やや これ〳〵。人を呼びかける聲。

ただ冷えに すつかり冷えこんで。

頼もしく 頼りにして、どうしたらよからうかと相談すべき人もない。

斯かる方の 人が死んだといふやうな場合の相談相手にならうが。

さこそ心強がり あのやうに氣丈夫な事を仰しやるが。

くして紙燭もて參れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引寄せて、源「なほもて參れ」と宣ふ。例ならぬ事にて、お前近くもえ參らぬつつましさに、長押に もえのぼらず。源「なほもてこや。所に隨ひてこそ」とて、召寄せて見給へば、只この夕顔の枕上に、夢に見えつるかたちしたる女、幻のやうに面影に見えて、ふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞け、と、いと珍らかに無気味むくつけけれど、まづこの夕顔の人は自分の身の上も知られ給はず、添ひ臥して、源「やや」とおどろかし給へど、ただ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。いはむかたなし。頼もしくいかにといひ觸れ給ふべき人もなし。法師などをこそは、斯かる方の頼もしきものにはおぼすべけれど。さこそ心強がり給へど、御心地にて、斯く夕顔が死んだのをいふかひなくなりぬるを見給ふに、

あが君 對者を親しみ敬うて呼びかける詞。

いきいて給へ 生き返つて下さい。

けはひ物うく 死相をあらはしてくるのである。

南殿の鬼 南殿は紫宸殿。大鏡中卷太政大臣忠平の條に、忠平が南殿の御帳の後ろを通る時に鬼が出たので、太刀を抜いて鬼の手を捉へた所が、鬼は艮の隅の方に逃げたとある。

いたづらに 死なれる事はあるまい。

急ぎ參るべき由いへと仰せよ 河内本の意味では、瀧口自身に惟光を呼びに行けといふのである。

かの尼君などの かの尼君などが聞きつけるといけないから大袈裟にいふな。

う慰めるすべがなくて、やる方なくて、つと抱き給ひて、源「あが君、いきいで給へ。いみじき目な見せ給ひそ。」と宣へど、冷え入りにたれば、樣子が眠はしけはひ、物うくなりゆく。右近は何心なさまで、ただあなむつかしと思ひける心地皆さめて、泣きまどふしけるためしをおぼしいでて、氣を強くして心強く、源「さりとも、いたづらに なりはて給はじ。夜の聲はおどろ〳〵し。あなかま」と、いさめ給ひて、心が落着かない故いとあわただしきに、あきれたる心地し給ふ。瀧口この男を召して、源「ここにいと怪しう、物におそはれたる人の物おぢして苦しきうにして居るからなやましげなるを、『只今惟光に來るやうに急ぎ參るべき由いへ』と使に命ぜよ仰せよ。なにがしの阿闍梨大貳乳母の兄そこに物する程ならば、忍びて此處に來べきよし忍びていへ。かの尼君大貳乳母などの聞かむに、おどろ〳〵しくいふな。尼君はかかる忍びあるきありき許さぬ人なり」など、物宣ふやうなれど、胸はふた

むなしくしなしてむ　夕顔を死なしてしまふ事の悲しさに加へて、あたり一帶の氣味のわるさは譬へやうがない。

風やや荒々しう　風の音によつて夜中も過ぎ稍曉方に向つた事をきかしたのである。**まして**　晝目で見たよりも夜風の音で聞くと一層。

こなたかなた　どちらを見ても人げ遠く無氣味な感じがする上に人聲も聞えない。

くやしさも　くやしさの慰めやうもない。

これもいかならむと　源氏の御心。夕顔だけでなく右近も。**心空にて**　源氏はうはの空で右近をつかまへて居た。**隱々しく覺え給ふ**　河内本に從ふのがよかからう。

惟光疾く參らなむ　惟光が早く來てくれればよいと源氏はお思ひになる。

がりて、夕顔この人を・・・むなしくしなしてむ事のいみじくおぼさるるに添へて・・、大方の・・・むく〳〵しさ・・・、たとへむ方なし。

夜中も過ぎにけむかし、風やや荒々しう吹きたるは。まして松の響き・木深く聞えて、氣色ある鳥のからごゑに鳴きたるも、思ひめぐらすに、こなたかなた・、けどほくうとましきに・人聲せず。などて斯くはかなき宿りは取りつるぞと、くやしさもやらむ方なし・。右近は物もおぼえず、君につと添ひ奉りて、わななき・死ぬべし。又これもいかならむと、心・空にてとら へ給へり。われ一人さかしき人にて、おぼしやる方ぞなきや。火はほのかにまたたきて、母屋のきはに立てたる屏風のかみ、ここかしこの・・・隱々しく覺え給ふに、物の足音ひし〳〵と踏み鳴しつつ、後より寄りくる心地す。惟光・・疾く參らなむ

ありか定めぬ　惟光は何處へ行くやらわからぬ男で。**ここかしこ尋ねける**　使が惟光をあちこち尋ねまはつてゐる間に。**夜のあくる程の**　夜のあける迄の時の長さは。

わが心ながら　自分の心からとはいひながら。**おぼけなくあるまじき**　身の程知らずの不埒な料簡を持つて居つた報いによつて。**斯く來し方行く先の**　斯く過去未來の話の種にもなりさうな事件が起るのだらう。**忍ぶとも**　隱しても。**人の思ひ**　世人の思はくや評判。

宣ひ出でむ事の　言ひ出すのが**恥合がないので。**　惟光の來た音を聞くにつけても。

とおぼす。ありか定め・ぬものにて、ここかしこ尋ねける程に、夜のあくる程・の久しきは、千代・を過ぐさむ心地し給ふ。からうじて鳥の聲はるかに聞ゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかるすぢに、おほけなくあるまじき心の報いに、・・・・・斯く來し方行く先のためしとなりぬべき事はあるな・めり、忍ぶと・・も、世にあること隱れなくて、うちに聞召されむ事をはじめて、・・人の思ひいはむ事・、よからぬ童べの口ずさびになりぬべき・な・めり、あり〳〵て、をこがましき名を取るべきかな、と思しめぐらす・。からうじて惟光の朝臣まゐれり。夜中曉といはず、御心に隨へるものの、今宵しもさぶらはで、召しにさへ怠りつるを、憎しとおもほすものから、召し入れて、宣ひ出でむ事の・・・・・

われ一人さかしがり 今までは源氏が自分一人氣丈夫らしく右近を抱いて居つたが。

この人に息をのべ 惟光が來たのでほつと一安心して、そこで始めて悲しさを感じた。

あさましといふにも あさましいといふ言葉では言ひつくせない。

かかるとみの事には 急の出來事が有る場合には。斯ういふ

誦經などをこそは 誦經などをするのが常だと思つて誦經をさせたいし、それに願なども立てさせたいと思つて阿闍梨の來るやうに言うてやつたがどうなつた。

かねて例ならず かねがねの氣分のわるい事でもありましたか。

さる事も 病氣らしい樣子もなかつた。

さいへど さうはいふものの。前に「この人に息をのべ給ひて」とあるのを受けていつた言葉である。

しほじみぬる 物事に經驗ある。

泣くを、源氏君もえ堪へ給はで。われ一人さかしがり抱き持ち給へりけるに、惟光この人に息をのべ給ひてぞ、悲しきこともおぼされける。暫時とばかり、いといたく、えもとどめず泣き給ふ。ややためらひて、源「ここにいと怪しき事のあるを、あさましといふにもあまりてなむある。かかるとみの事には、誦經などをこそはすなれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむとて、阿闍梨物せよといひやりつるは」と宣ふに、惟「昨日叡山へまかりのぼりにけり。まづいと珍らかなる事にも侍るかな。かねて御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらむ」。源「更にさる事もなかりつ」とて泣き給ふさま、惟光美しく愛らしくいとをかしげにらうたく、見奉る人もいと悲しくて、惟光おのれもおいくよよと泣きぬ。何をいふにも、年とつて世事に經驗ある人はさいへど年うちねび、世の中のとある事も、かかる事にしほじみぬる人こそ、物の折節は賴もしかりけれ、源氏惟光もいづれもいづれもわかきどちにて、いはむ方もなかりけれど、

院守 院の留守番。前にあづかりとあつた人。

この人一人こそ 院守一人だけは睦まじくて他に漏らす事はあるまいが。

眷族 院守の身内の者。

かの故郷は 五條の夕顔の家。

隣しげく 隣家が多く、目を附ける里人が多からうから。

かやうの事おのづから こんな事が自然ありがちで。

むかし見給へし 私が昔懇意にして居つた女で尼になつて居るのが。

惟光が父の朝臣の その尼といふのは。

かごか 周圍は物に取圍まれてひつそりしてゐる。

この人をえ抱き 源氏は夕顔を抱く事も出來ないから。

惟「この院守などに聞かせむ事は、いと便なかるべし。この人一人こそ睦まじうもあらめ、おのづから、物いひ漏らしつべき眷族も立ちまじりたらむ。まづこの院を出でおはしましね」と聞ゆいふ。源「さてこれより人ずくななる所はいかでか。あらむ」と宣ふ。惟「げにさぞ侍らむ。かの故郷は、女房などの、かなしびに堪へず泣き惑ひ侍らむに、隣しげく、咎むる里人多く侍らむに、おのづから評判聞え侍らむを、山寺こそ、なほかやうの事おのづからゆきまじり、物目立まぎるる事侍らめ」と、思ひまはして、惟「むかし見給へし女房の尼にて侍る、東山の邊に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母にはべし者の、非常に年とつてみづはぐみて住み侍るなり。あたりは人繁きやうに侍れど、いとかごかに侍る」と聞えて、明け離るる程のまぎれに、御車寄す。この人をえ抱き給ふまじければ、上席にましくくみて、惟光乘せ奉る。夕顔は小柄でいとささやかにて、

うとましげもなく 死體ではあるが厭はしい樣子もなく愛らしげである。

目くれまどひて 源氏は悲しさに目もくらんで。

おはしまさなむ 歸つて頂きませう。

右近を添へて 夕顔の車には右近を同車させて。

出でたつ 東山に行く準備をする。

かつはいと怪しく 惟光は色々死骸の世話はして居るけれども事情がはつきりせぬから、一方では不思議に思ひがけない野邊送りではあるが。

人々 二條院の人々。

いづこより 源氏は何處から歸宅されたのだらう。

御帳 御帳臺。寢所に用ひる。

生きかへり 夕顔が蘇生した時自分がそばに居なかつたら、どんな氣持がするだらう、見捨てて餘處に行つて了つたと恨めしく思ふ事だらう。

うとましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれまどひて、あさましう悲しとおぼせば、なり果てむさまを見むとおぼせど、「はや、御馬にて二條の院へおはしまさなむ。人さわがしくなり侍らぬほどに」とて、右近を添へて乘すれば、君に馬は奉りて、われはかちより、くくり引上げなどして出でたつ。かつはいと怪しく、覺えぬ送りなれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てて ゆくに、君は物もおぼえ給はず、われかのさまにておはし著きたり。

人々、「いづこよりおはしますにか。なやましげに。見えさせ給ふ」などいへど、御帳の内に入り給ひて、胸をおさへておもふに、いといみじければ、などて乘り添ひてゆかざりつらむ、生きかへりたらむとき、いかなる心地せむ、見捨てていきわかれにけりと、つらくや思はむ、と心惑ひのなかにも

まどはれ給へば 御心地が動搖なさるので。

はかなくて わけもなく「いたづらになりぬる」を修飾する。

人々 二條院の人々。

うちより御使 禁中から御見舞の勅使が參つた。左大臣の君達である。

おほとのの 左大臣の君達が勅使として來られたが。

立ちながら つい一寸こちらにお立寄り下さい。源氏は臓に觸れられたので斯くいふ。

御簾の内ながら 源氏は御簾ごしに頭中將と話をされる。病氣だからである。

いときなきより 私の幼少時代から馴れ親しんだ乳母の臨終の際に、見舞に行かなくては私を無情と思ふだらうと思つて。

おぼすに、御胸せきあぐる心地し給ふ。御ぐしも痛く身もあつき心地して、いと苦しくまどはれ給へば、かくはかなくて、我もいたづらになりぬるなめりとおぼす。日高くなれど、起き あがり給はねば、人々あやしがりて、御粥などそそのかし聞ゆれど、苦しくて、いと心細くおぼさるるに、うちより御使あり。昨日もえ尋ねいで奉らざりしより、おぼつかながらせ給ふ。おほとののの君だち、參り給へど、頭の中將ばかりを、「立ちながらこなたに入り給へ」と、宣ひて、御簾の内ながら、宣ふ。源「乳母にて侍る者の、この五月の頃ほひより、おもく煩ひ侍りしが、頭そり、忌む事受けなどして、その しるしにや、よみがへりたりしを、此頃また起りて弱くなむなりにたる、『今一度とぶらひ見よ』と申したりしかば、いときなきよりなづさひしものの、今はのきざみに、つらしとや思はむと思ひ給へてまかり、しに、その家なりける下人の病しけ

神事なる頃は 神事の行はれる時分は、穢にあつた身で参内するのは不都合な事と恐縮して。

無禮にて 簾垂越しといふやうな失禮な有樣でお話致します。

かしこく 畏多くも主上が源氏をお探しになつて。

行觸 穢れに出合す事。

胸うちつぶれ 源氏ははつとして。頭中將に痛い所を衝かれたからである。

たいぐし 怠々し。

いふかひなく 何というても詮なく悲しい事（夕顔の死）をお思ひになると。

藏人の辨 頭中將の弟

るが、俄に（他所に移す暇もなくて死んだ）え出であへでなくなりにけるを、（私に遠慮して）おぢ憚りて、日を（夜になつて死體を）暮してなむ取り出で侍りけるを聞きつけ侍りしかば、神事な（多か）る頃は、いと不便なることと思う給へかしこまりて、（參内せぬ）まゐらぬなり。この曉より、（咳の出る病氣）しばぶきやみにや侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無禮にて聞ゆること」など宣ふ。中將、「さらば、（その趣を）さる由をこそ奏し侍らめ。（昨夜も管絃によべも）御遊びに、（畏多く）かしこく求め奉らせ給ひて、（帝御機嫌あしく）御氣色あしく侍りき」と聞え給ひて、（又引退して）立ち歸り、中「（さても）いかなる行觸にかからせ給ふぞや。（辨解なさる事が）のべやらせ給ふ事こそ、誠とも思う給へられね」といふに、（まづ御）胸うちつぶれ給ひて、源「かくこまかにはあらで、ただ覺（參内しないのはけしからぬ事です）えぬけがらひに觸れたるよしを奏し給へ。いとこそたいぐし（穢にけがらひにえぬけがらひに）く侍れ」と、つれなく宣へど、（源氏の）心のうちには、いふかひなく悲しき事をおぼすに、御心地もなやましければ、人に目も見あはせ給はず、藏人の辨を召寄せて、まめやかに斯かるよしを奏せ

おほとの 左大臣殿の所へなどにも、斯くの譯で參上が出來ぬ由の御消息を差上げなさる。

日暮れて 八月十七日の夕方。

立ちながら 一寸來て直に歸るので。

いかにぞ 樣子はどうであつたか。もう蘇生はせぬと見極めたか。

ながながと さう長く死體を東山の尼の家にこめおくのも不都合故、明日は日柄がよいから。

とかくのこと 葬儀。

あひ知りて侍るに 知合ひの尊い老僧に。

添ひたりつる 死骸に附添つて行つた右近はどうか。

今朝は谷にも 古今誹諧「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ淺くなりなめ」

故鄕人 五條の夕顔の宿の人。

させ給ふ。おほ（い）とのなどにも、かかる事ありてえ（まうで）參らぬ御消息（給は）息（ぬよし）など聞え給ふ。（あれにもあらぬさまにて臥し給ふまゝに）（いみじう苦しがり給ふ）。

日暮れて惟光まゐれ（た）り。かかるけがらひあり（穢）と宣ひて（はすれば）、（來訪者）まゐる人々も、皆立ちながらまかづ（で）れば、人（目）繁からず（ぬに）、（惟光を）召寄せて、源「いかにぞ。今は（最後と見きはめたか）と見果てつや」と宣ふ（おつしやるなり）ままに、袖を御顏におしあてて泣き給ふ（まいみじ）。惟光も泣く〳〵、「今（駄目）は限りにこそは物し給ふめれ。（も何）ながく〳〵と籠り侍らむ（はとて）も便なきを、明日なむ日よろしく（き日に侍る）侍れば、とかくのこと（し奉りてん）、いと尊き老僧の（まめなるが）あひ知りて侍るに、いひ語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。源「添ひたりつる（右近）女はいかに（が）」と宣へば、惟「（右近）それなむ又（あ）え生くまじう（く）侍るめる。『われもおくれじ』（自分も一緒に死なう）と惑ひ侍りて、今朝は谷にも（身投げをしさうに見受けました）落ち入（イニナシ）りぬべくなむ見給へ（え侍り）つる。『かの故郷人（さと びと）に告げやらむ』と申せ（し侍りつれ）ど、『暫し思ひしづめよ。（心を落着けよ）

こしらへ　なだめる。

何か更に　今更何事をお欺きになるのです。

人にも　この秘密を誰にも知らせまいと思ひますから。

さみな思ひなせど　さうは何事も皆諦めては居るが。

少將の命婦　惟光の妹。

尼君　大貳乳母。

さらぬ法師ばら　それらの人々は勿論の事、その外の法師達にも。

いひなすさま異に侍る　それぞれ話を別々にかへてしておきました。

かかり給へる　それを力に源氏はよりかゝつてゐられる。

ほの〳〵　うす〳〵不思議がる。

さらに　少しも手ぬかりなくやりおほせよ。

の事情を考へてから・事のさま思ひめぐらして』となむこしらへおき侍りつる」と語り聞ゆるままに、いといみじと思して、源「われもいと心地なやましく、死ぬやうな氣がするいかなるべきにかとなむおぼゆる」と宣ふ。惟「何か更におもほし物せさせ給ふ。萬事運命さるべきにこそよろづのことも侍らめ。人にも漏らさじと思ひ給ふれば、私が一切引受けて處置して居ります惟光おり立ちてよろづは物し侍り」な・ど申す。源「さかし。さみな思ひなせど、浮氣ぐれた浮氣心からびたる心のすさびに、人の身・をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが、いとからきなり。少將の命婦などにも聞かすな。尼君・ましてかやうの事などいさめらるるを、人を死なした怨みを受けるのが聞かれると私は恥かしい心恥かしくなむおぼゆべき」と口がためき給ふ。惟「さらぬ法師ばらなどにも、皆・意見されるから・いひなすさま異に侍る」・と聞ゆるにぞかかり給へる。ほの聞く・二條院の女房女房など、「あやしく何事ならむ。けがらひの由宣ひて、禁中うちにも參り・給はず、また斯くささめき歎き給ふ」と・・・・の語らひ合せて、ほの〳〵怪しがる。源「さらに・・・・・事なくしなせ」・と、葬送の折その程の作法・・・宣へど、惟「何か。事々しくすべきにも侍らず」とて立つが・・いと悲しくおぼさるれば、源「・・・・びんなしと思ふべけれど、今一度夕顔のかのなきがらを・見ざらむが・いといぶせかるべきを、馬にて物せむ」と宣ふを、いとたいけしからぬ事たい〳〵しき事とは思へど、惟「さ思されむ・はいかが・せむ。東山にはやおはしまして、夜更けぬさきに歸らせおはしませ・・・・・・侍らん・・・」と申せば、此頃の御やつれにまうけ給へる狩の御さうぞく着かへなどして出で・・給ふ。御心地かきくらし、いみじく堪へがたければ、かく怪しき道に出でて立ちても、危かりし・物懲りに、いかにせむ、とおぼし煩へど、なほ悲しさのやるかたなく、只今の骸を見では、又いつの世にかありしかたちをも見む、とおぼし念じて、例の大夫、隨身を具して出で給ふ。道・遠く覺ゆ。十七日の月さし出でて、河原の程、御前の火もほのかなるに、

何か　いや御心配には及びませぬ。

立つが　其處を立去るのが。

いと悲しく　惟光があまりあつさりした態度で出かけてゆくにつけても源氏はこれが夕顔の最後と悲しく思はれるのである。

さおぼされむは　さうお思ひになるなら爲方ありませぬ。

狩の御さうぞく　狩衣。

御心かきくらし　眞暗闇になつて。

危かりし　昨夜の危難に懲りて居るので。

只今の骸を　火葬に附する前に今すぐ死骸を見ておかなくては。

例の大夫　惟光。

御前の火　前驅の松明。

何ともおぼえ 今晩は何とも怖ろしさを感じない。

あたりさへ 周圍の樣子までが凄い感じがする所へ。

すきて 板屋の透からちら〳〵見える。

その屋 板屋。

外のかた 右近と屍骸のある部屋の外の方。

わざとの髮立てぬ念佛 殊更に小聲で念佛を唱へる。葬送前に無言念佛を唱へれば十五功德を得る由佛敎にいはれてゐる。

初夜 午後十時頃の勤行。六時（晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜）の一。

大德 僧。

入り給へば 源氏が板屋に。

火取りそむけて 燈火をあちらの方へ向けて。

屏風隔てて 屍體と屏風を隔てて。

怖しきけも 屍骸は怖ろしい樣子もなく。

聲をだにて 蘇生はせずともせめて聲をだけでも。

鳥部野のかたなど見やりたる程など、物むつかしきも何とも おぼえ給はず、かき亂りる心地し給ひて東山におはしつきぬ。あたりさへすごきに、板屋のかたはらに堂建てて、勤行する尼のすまひ、いとあはれなり。御燈明の光も影ほのかにすきて見ゆ。

その屋には、女一人泣く聲のみして、外のかたに、法師ばらの二三人ばかり物語うちしつつ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする。寺々の初夜も皆行ひ果てて、いとしめやかなり。清水のかたぞ光おほく見えて、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大德の、聲尊くて經うち讀みたるに、涙落涙のこりなくおぼさる。入り給へれば、屏風引きつぼねてほの暗きにうしろの方にだに火取りそむけて、右近は屏風隔てて臥したり。いかにわびしからむと見給ふ。夕顔のさま怖ろしきけも覺えず、いとらうたげなるさまして、まだいささか變生時とりたる所なし。夕顔の手をとらへて、源「我に今一度聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契宿緣りにかありけむ、暫しの程に

心をつくして 心のたけを盡して。愛情を傾け盡して。

誰とは知らぬに 源氏をも死者をも誰とは知らないが。「涙おとしけり」を修飾する。

年頃をさなく侍りしより これまで長の年月、私の小さい時から。

いかになり給ひにきとか 女君がどうおなり遊ばしたと人に話が出來ませうか。

かなしき墓をば 女君の死なれた悲しさはそれはそれとして。

人にいひさわがれ 夕顔の死は右近のしわざだなどと騷がれるのが。

けぶりにたぐひて 火葬の煙と一緒に私も姫君の跡を慕つて行きませう。

ことわりなれど お前のいふ所も尤もだが。

とあるもかかるも 普通の病氣で死ぬのも夕顔のやうに不慮の事で死ぬのも、その別れには さまざまあつても、要するに定命の限りがあつて別れるのだから今は諦めて私を賴りなさい。

宣ひこしらへても 言ひきかせても。

心をつくしてあはれに覺えしを、打捨てて（斯く途方にくれさすのが悲しい）惑はし給ふがいみじきこと」と、聲も惜しまず泣き給ふ事限りなし。大德たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひて、皆涙おとしけり。右近を、源「いざ二條の院へ」と宣へど、右「年頃、をさなく侍りしより、片時立ち離れ奉らず馴れ聞えつる人に、俄に別れ奉りて、いづこにか歸り侍らむ。いかになり給ひにきとか人にもいひ侍らむ。かなしき事をばさるものにて、五條の女房達に人にいひさわがれ侍らむがいみじきこと」といひて、泣きまどひて、右「けぶりに火葬の煙について浮世は皆さなたぐひて、慕ひまゐりなむ」といふ。源「ことわりなれど、どんな事で死む世の中はある。別れといふものの悲しからぬはなし。とあるもかかるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、今は我を賴め」と宣ひこしらへても、源「かくいふわが身こそは生きとまるまじき心地すれ」と宣ふも、賴もしげなしや。惟光、「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ」と聞

顧みのみせられて　夕顔に心殘りがあつて、うしろ髪を引かれる氣持で。

いとどしき朝霧にが立ちこめるので。　非常に朝霧

うちかはし給へりしが　あの院で二人一緒に掛けて寢た儘に自分の紅の下著を夕顔が着て居つた。

堤　賀茂川堤。

はふれぬべきにや　どうにかなつてしまふのかしら。死んでしまふのかしら。

さ宣ふとも　行きたいと仰しやつても。

かかる道に　屍骸見になどお連れ申すのではなかつたと思ふと大層心が落着かないから。

御心を起して　氣を引立てて。

ゆれば、顧みのみせられて、胸もつとふたがりて出で給ふ。　塞つた儘でお歸りになる

道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなく惑ふ心地し給ふ。　生前の儘で

ありしながらうち臥したりつるさま、うちかはし給へりしが、わが紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけむ契りにかと、歸る途上道すがらおぼさる。御馬にも、はかばかしく乘り給ふまじき御さまなれば、また惟光添ひて御送り仕うまつる。

助けて歸らせ申す途中おはしまさするに、堤の程にて、馬よりすべりおりて、いみじく御心地まどひければ、氣分が惡いので源「かかる道の空にて、はふれぬべきにやあらむ。更にえいきつくまじき心地なむする」と宣ふに、惟光も心地まどひて、二條院に　わがはかばかしくば、さ宣ふとも、かかる道にゐて出で奉るべきかはと思ふに、いと心あわただしければ、川の水にて手を洗ひて、清水の觀音を念じ奉りても、すべなく思ひまどふ。君もしひて御心を起して、心の内に佛を念じ奉りて、給ひて、又とかく助

人々　二條院の女房達。

例よりも　いつもよりそはそはと落着かぬ忍びあるきの頃りにある中にも。

誠に　下の「苦しがり給ひて」にかかる。今迄は物思ひや觸穢を紛らはす爲の假病であつたが、今度は本當の病氣で、源氏は寢たきりひどく苦しがられて二三日たつたけれども、すつかり弱りこんで了ふやうにされる。

ゆゆしき　あまり美しい人や賢い人は若死にすると考へられたのである。

局など　部屋などを源氏の近くに賜はつてお置きになる。

心地も騷ぎ惑へど　源氏の病氣について心配して居るが。

思ひのどめて　氣を落着けて。

けられ給ひてなむ二條の院へ歸り給ひ・・・

まじらひつきたり 他の女房達と馴染んだ。

服 喪服。

かたはに見苦しからぬ かたはならず見苦しからぬの意。

あやしう 不思議に短かつた夕顔との御縁に引かされて。

もしながらへば もし私が生きて居れば。

程もなく 夕顔の死亡後間もなく。

又立ち添ひぬべきが 私も又夕顔のあとを追つて死んでしまひさうなのが殘念だ。

いみじう惜しと 右近は源氏が死なれるのかと思つて惜しがるのである。

けに 一層。

おぼし歎き 主上の御歎を聞く につけても。

大殿 左大臣。

日々にわたり 毎日二條院に。

さぶらはす。君は（心地もよろしく）・・・・・聊か（氣分のよい時には）ひまありて思さるる時は、召し出（近を）でて使ひ（馴らし）・・・・などし給へば、程なく交らひつき（に）たり。服（ふく）いと黒（く）うして、かたちなどよからねど（すれば イ 美しくはないが）、かたはに見苦しからぬ若人なり。源「あやしう（く）短かかりける（人のおほん）・・・・御契りに引かされて、我も（も）・世にえ（も）あるまじきなン・めり。（年來頼みにした主人を失つて）年頃の頼み失ひて心細く思ふらむ慰めにも、もしながらへ（ふるやうあら）・・・・・ば、よろづに（世話をしよう）はぐくまむとこそ思ひしか。程もなく（て）・、又立ち添ひぬべき（かめる）・が口惜しくもあるべ・きかな」と、忍びやかに宣ひて、（いと）・・弱げに泣き給へば、（夕顔の死の悲しさはさしおいて）いふかひなき事をば（さるものにて）・・・、いみじう（く）惜しと思ひ（右近の心に）聞ゆ。（二條院の）殿の内の人（々）・、足を空に（て）・思ひ惑ふ。うちよ（の）り御使、雨の脚よりもけに繁し。おぼし（めし）・・歎きおはします（事）・を聞き給ふに、（源氏は）いと忝くて、（強ひて）せめて強くおぼし（つよ）・なる。（おはいどの）大殿も いみじくけいめいし給ひて、日々にわたり（まね）給ひつつ（て）、（祈禱加持など）さまざまに・・・・・

いつの程にてかは お馴染になつてまだ何程にもならぬのに、どうして取るにも足らぬ御名のりを申上げなさいませう。

御名隠しも あの方が御名を隠して居られるのは、御名を隠さねばならぬだけの身の上なのだらう。

なほざりにこそ 自分に冷淡な爲に名をうちあけないで居られるのだらう。

所せう 窮屈に考へて。人はそれを大袈裟に考へて。

うるさき身の有様 身分が身分故。

はかなかりし 夕顔につけて歌の贈答のあつた夕方から。

かう長かるまじきにては 短い緣であつたなら。

か・・・・りし」と宣へ・・・ば、右「などてか深く隠し聞え給ふ事は侍らむ。いつの程にてかは何ならぬ御名のりを聞え給はむ。はじめより怪しう覺えぬさまなりし御事なれば、『うつつとも覺えずなむある』と宣ひて、『御名隠し・も、さばかりにこそは』と・・・・聞え給ひながら、『なほざりに・・・こそ・・紛らはし・給ふらめ』となむ憂きことにおぼしたりし」と聞ゆれば、

源「あいなかりける心くらべどもかな。我は、しか隔つる心もなかりき。ただかやうに人に許されぬ振舞をなむまだならはぬ事なる。うちにいさめ宣はするをはじめ・、つつむ事おほかる身にて、はかなく人にたはぶれごとをいふも、所せう取りなし、うるさき身の有様になむあるを、はかなかりし夕べより、あやしう心にかかりて、あながちに見奉りしも、かかるべき契りにこそは物し給ひけめと思ふも・・・・、あはれになむ又打返しつらう・・・おぼゆる。かう長かるまじきにては、などさしも

七日々々の 七日毎の供養に佛の名を書かせても。湖月抄に師說として「これ十三佛を七々日の間にあてて書きて亡者のために供養する事也」とある。十三佛とは、不動、釋迦、文殊、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、勢至、阿彌陀、阿閦、大日、虛空藏の十三の佛の稱。

たがためとか 名が分らなくては、誰が爲の供養として心中に念じよう。

みづから忍び 御本人が隱して居られた事を、その死後に、口やかましく私から漏らすでもあるまいと思ふだけです。

わが身の程の 父三位中將は、自分の出世の遲い事を歎いて居るやうでしたが、其後命までなくなられてから。

はかなき物の便にて 一寸した機會で。

かの右大臣殿より 右大臣の娘四の君の所から。四の君は頭中將の本妻である。その結婚の事は桐壺卷の終にあつた。

愛いと思はれたらう心にしみてあはれと覺え給ひけむ。なほ委しう語れ。今は何事を隱すべきぞ。七日々々の佛書かせても、たがためとか心の内にも思はむ」と宣へば、右「何かは隱し申さうぞ聞えさせ侍らむ。みづから忍び過ぐし給ひし事を、亡き御うしろに、口さがなくやはと思ひ給ふるばかりになむ。夕顔の親たちは早う亡せ給ひにき。三位中將となむ聞えし。いとらうたきものに思ひ聞え給へりしかど、わが身の程の心もとなさをおぼすめりしに、命さへ堪へ給はずなりにしのち、はかなき物の便りにて、頭中將まだ少將に物し給ひし時、見そめ奉らせ給ひて、三年ばかりは志あるさまに通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右大臣殿の愛情深いやうに

おぼいどのわたりより、いと怖ろしきことの聞えまうで來しに、夕顔はむやみに怖ろしがる性質で物おぢをわりなくし給ひし御心に、せむかたなう思しおぢて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむ、這ひ隱れ給へりし。それも共乳母の家もいと見苦しきに住みわび給ひて、山里に移ろ

怖ろしい事をいうてよこしたので

今年よりは その山里が今年から方塞がりになつて居るので、まづ方違をする爲に五條に居つたのを源氏に見あらはされたのだと夕顔が嘆いて居られた。

世の人に似ず 夕顔は普通の人と違つて引込思案で、物思ひをして居る樣子を人に見られるのを恥かしがつて。

おぼしあはせて 品定の折の頭中將の話を。

しか さ樣でございます。

さていづくにぞ さうしてその娘はどこに居るのか。

さとは知らせて さうとは知らせずに。

とざまかうざまにつけて 夕顔の形見でもあり、又頭中將の子で、源氏の妻葵上の姪でもあるから。

夕顔＝玉鬘
頭中將＝葵上＝源氏

ひなむとおぼしたりしを、・・・今年よりは、ふたがりたる方に侍りければ、たがふとて、あやしき所に物し給ひしを、見あらはされ奉りぬる事と、おぼし歎くめりし。世の人に似ず、物づつみをし給ひて、人に物思ふ氣色を見えむは、恥かしきものにし給ひて、つれなくのみもてなして、御覽ぜられ奉り給ふめりしか」と語りいづるに、されば、とおぼしあはせて、いと愛情が深まつたよ〳〵あはれもまさりぬ。源「をさなき人惑はしたり。と中將の憂へしは、さる人や」と問ひ給ふ。右「しか。一昨年の春ぞ。物し給へりし。女にていとらうたげに。なむ」と聞ゆ。源「さていづこにぞ。人に。さとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いと嬉しかるべくなむ」と宣ふ。源「かの中將にも傳ふべけれど、いふかひなきかごと負ひなむ。とざまかうざまにつけて、はぐくまむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにも、ことざまにいひなして、物せよかし」など語

かの西の京にて 今玉鬘は乳母の居る西の京に居るのですが、西の京で生長するのは氣の毒です。

はかゝしく 外にしつかり養育してくれる人がないので乳母の家に居るのです。

心よりほかに 思ひがけずも二條院といふ風流な所に生活する事よと、かの五條の宿を思ひ出すにつけても恥かしい。

この鳥の鳴きしを かの院で家鴿の鳴いた事は物語の上には書いてない。

御乳母の 右近は夕顔の乳母の娘である。

三位の君 夕顔の父三位中將。

らひ給ふ。右「さらばいと嬉しくなむ。侍るべき。かの西の京に生ひいで給はむは、心苦しうなむ。はかゝしくあつかふ人なしとて、かしこになむ」と聞ゆ。

夕暮のしづかなるに、空の氣色いとあはれに、お前の前栽かれ〳〵に、蟲のねも鳴きかれて、紅葉やう〳〵色づくほど、繪にかきたるやうに面白きを見わたして、心よりほかにをかしきまじらひかなと、かの夕顔の宿りを思ひいづるも恥かし。竹のなかに家鴿といふ鳥の、ふつつかに鳴くを聞きて給ひて、かのありし院に、この鳥の鳴きしを、いと怖ろしと思ひたりしさまの、面影にらうたくおもほしいでらるれば、源「年はいくつにか物し給ひし。あやしう世の人に似ずあえかに見えしも、かく長かるまじきなりけり」と宣ふ。右「十九にやなり給ひけむ。右近は、なくなりにける御乳母の捨て置きて侍りければ、三位の君のらうたがり給ひて、かの

いかて世に 夕顔の死後、どうしてながらへようと思ひませう。

いとしも人に 拾遺戀四「思ふとていとしも人に馴れざらむしかならひてぞ見ねば戀しき」

物はかなげに 私は、頼りにもならなさうな姫君を頼りにして今迄馴れ親しんで來ました。

見む人の心には 夫の心には服從するのが可憐で。

わが心のままに それを自分の好み通りに矯め直して見ると。

このかたの御好みには 姫君はさうしたお好みには背かない方だつたと思ふにつけても。

見し人の あの雲は夕顔の火葬の煙であると思つて眺めると夕方の空も親しみを覺える。

かやうにて 姫君がかうして此處に居られたらと思ふにつけても。

御あたりさらずおほし立て給ひしを思ひ給ひいづれば、いかでか世に侍らむとすらむ。いとしも人にとくやしくなむ。物はかなげに物し給ひしひとの御こころを、頼もしき人にて年頃ならひ侍り・けること」と聞ゆ。源「はかなびたるこそ女はらうたけれ。・・・・かしこく人に靡かぬ、いと心づきなきわざなり。私自身がしつかりしない無愛相に出來ない心の癖でみづからはかく〳〵しくすくよかならぬ心ならひに、女は只やはらかにて、取りはづしては、人に欺かれぬべきが、それでるて内氣でさすがに物づつみし、見む人の心には隨はむなむあはれにて、わが心のままに取り直して見むに、なつかしく覺ゆべき」など宣へば、右「このかたの御好みには、もてはなれ給はざりけりと思ひ給ふるにも、口惜しく侍るわざかな」とて泣く。空のうち曇りて風冷かなるに、いといたううちながめ給ひて、

源氏 見し人のけぶりを雲と眺むれば夕べの空も睦まじきかな

と獨りごち給へど、右近は遐歌も出來ないえさしいらへも聞えず。かやうにておはせ

まさに長き夜 文集十九聞夜砧「八月九月正長夜、千聲萬聲無二止時」

承りなやむを 御病氣と承つて案じて居ますが、言葉に出しては申上げられませぬ。

問はぬをも 「えこそ問はぬ云々」舞申上げ得ずに居る事につい、何故見舞つてくれぬかとお尋ねがなくて程經たので、私はどんなに思ひ亂れて居る事でせう。

益田は 拾遺戀四「ねぬなはの苦しかるらむ人よりも我ぞますの田のいけるかひなき」益田池は大和高市郡。

生けるかひなきや 生きがひがないとは何事です。それは誰の言ふべき詞でせう。

空蟬の 浮世はつらいものと知りましたが、お言葉によつてつながれてゐる命です。

ましかばと思ふ・も、右近は胸のみふたがりて覺ゆ。夕顔の宿で耳かしがましかりし砧の音をおぼしいづるさへ戀しくて、源「まさに長き夜」とうちずして臥し給へり。

かの伊豫の家の小君參る折あれど、殊に以前のやうなる言傳も空蟬は、源氏が無情な女だと思ひ切つた事をし給はねば、憂しとおぼし果てにけるを、いとほしと思ふに、源氏の病氣をかく煩ひ給ふを聞きて、・・・・さすがにうち歎きけり。遠く夫に從つて伊豫に下りなむとするを・・・、さすがに心細ければ、源氏が自分を忘れたかとおぼし忘れぬるかと、試みに・・・、空蟬「承り惱むを、言にいでてはえこそ、問はぬをもなどかと問はで程經るにいか許かは思ひ亂るる益田は誠になむ」・と聞えたり。珍らしきに、空蟬に對しても愛情を忘れぬこれもあはれ忘れ給はず。源「生けるかひなきや、たがいはましごとにか。

空蟬の世は憂きものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかなしや」と、御手の事故もうちわななかるるに、亂れ書き給へる、いと・美しげなり。なほかのもぬけを忘れ給はぬを、いとほし

いふかひなからずは 全くの情知らずだとは思はれたくない。

いかに思ふらむ 少將が自分と軒端荻との關係を知つたら何と思ふだらう。

ほのかにも 前に夢のやうな逢瀨がなかつたら、あなたが少將と結婚したとて、少しのいひがかりでもする種が無かつただらう。「露の」は荻の緣語。「かけまし」は露の緣語。

高やかなる荻に 空蟬の卷に「てゝろかなる人」とある。軒端荻は背が高かつたから、それをあてこすつたいたづらである。

少將のなき折に 小君が少將の留守にこの文を軒端荻に見せると、女は源氏を恨めしいとは思ふものの。

うもをかしうも思ひけり。かやうに・憎からずは聞えかはせど、逢はうとはけぢかく・とは思ひ寄らず、さすがにいふかひなからずは見え奉りてやみなむと思ふなりけり。

かの片つ方は、藏人の少將をなむ通はすと聞き給ふ。怪しや、いかに思ふらむ、と少將の心のうちもいとほしう、またかの人の氣色も・ゆかしければ、・・・小君して、源「死にかへり思ふ心は、知り給へりや」と言ひつかはす。

ほのかにも軒端の荻を結ばずば露のかごとを何にかけまし
高やかなる荻につけて・・、「忍びて」と宣へれど、取りあやまりて、少將も見つけて、われなりけりと思ひあはせば、さりとも罪ゆるしてむ、とおもふ御心おごりぞ、あいなかりける。少將のなき折に見すれば、・・心憂しと思へど・、かく・おぼし出でたるもさすがにて、御返り、口疾きばかりをかごとにて取ら

ほのめかす ほんの一言のお便りを承るにつけても、半ばは嬉しく半ばは物思ひをさそはれます。

火影に見し顏 碁を打つて居つた夜の軒端荻の顏が思ひ出される。

何の心ばせ 容姿は好かつたが然し何も別に思慮がありさうもなく。

誇りたりしよ ほがらかであつた。

懲りずまに 古今戀三「懲りずまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にしすまへば」

またもあだ名は 又しても浮名が立ちさうな氣まぐれ心だ。

かの人の 夕顔の四十九日の供養。

寡そがす 諸事を簡略にせず。

裝束よりはじめて 僧に贈る裝束を初として。

こまかに 懇ろに布施として贈る。ここの文は河内本がよい。

誦經 誦經の布施のこと。

願文作らせ 源氏が願文を。

その人となくて その願文には誰のためにとはつきり書かずに。

ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜に結ぼほれつつ
手はあしげなるを、紛らはしざればみて・・・書いたるさま、品なし。火影に見し顏・・・・・おぼし出でらる。打解けて向ひ居たる・・・人は、えうとみ果つまじきさまもしたりしかな、何の心ばせありげもなく、さうどき・誇りたりしよ、と思しいづるに、憎からず。なほ懲りずまに、またもあだ名は立ちぬべき御心のすさ・びなめり。

かの人の四十九日、忍び・・・比叡の法花堂にて、・・・・・忍びたれ・事そがず、裝束よりはじめて、さるべき物ども、こまかに誦經など・せさせ給ふ。經・、佛の・飾・・までおろかならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、・・・二ならしけり。御書の師にて睦まじくおぼす文章博士召して、願文作らせ給ふ。その人と・なくて、あはれと思ひし人のはかなきさまになりにたるを、阿彌陀佛に讓り奉るよし、あはれげに書きいで給へれば、

ただかくながら　この文句の通りで一言も加筆する事はありませぬ。

いみじくおぼしたれば　大層悲しく思つて居られるので。

何人ならむ　亡者は誰だらう。誰それといふ名前も聞えないのに、こんなにまで源氏を悲しませる程の運の良さよ。

泣く〳〵も　涙ながらに今日結ぶ契約がいつの世になつたら果されて相逢ふことが出來るだらう。袴の紐を結ぶことを絲を結ぶに譬へていつたのである。

この程までは　四十九日の間は魂が中有の空に漂つてゐるのだが。

いづれの道に　六道の内どの道に魂が定まつて落着くのであらうと。

いづかたにか　夕顔はどこへ行つたか。

けはひをさばかりにや　源氏を取持つたのは惟光だらうと様子を見てとつて女房達が囁いたので。

博士「ただかくながら。加ふべき事・侍らざめり」と申す。（この文章のままで）

源氏は怪び給へど、御涙もこぼれて、いみじくおぼしたれば、博士「何人ならむ。その人とは聞えもなくて、かうおぼし歎かすばかりなりけむ宿世の高さよ」・といひけり。忍びて調ぜさせ給へりける裝束の袴を取寄せ給ひて、

源氏泣く〳〵も今日はわがゆふ下紐を何の世にかとけて見るべきこの程までは漂ふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむと、おもほしやりつつ、念誦をいとあはれにし給ふ。頭中將を見給ふに、つけても、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つ有様・聞かせまほしけれど、かごとにおぢて、うちいで給はず。

かの夕顔の宿りには、いづかたにと思ひ惑へど、そのままに・え尋ね聞えず、右近だに音づれねば、・・・・・・怪しと・・・思ひ歎きあへり。たしかならねど、けはひをさばかりにやとささめきしかば、惟光をかこちけれど、いとかけ離れて、氣色なくいひなして、なほ同じごとすきありきければ、いとど夢の心地して、もしずりやうの子ども・・・のすき〳〵しきが、頭の君・・・・・・

女房の 空蟬のことでない。侍女も下るだらうからといふので実は空蟬への志をしたのである。空蟬とは言はれないから。

又うち〳〵にも その上内々にもわざ〳〵贈物をして。

贈 絹や紙を細かく切つたもので、幣袋に入れておいて道々神に奉つた。餞別には必ず扇をする。

餞扇 逢ふといふ語音から再會を祈る縁起にとりなしたものであらう。

逢ふまでの この小袿は再會迄のせめての形見と見てゐた間に戀の涙の爲にずん〳〵と紬がくさつてしまつた。再會の望もたえてしまつた。

こまやかなる事 懇な文言が書かれてゐたが。

蟬の羽も 蟬の羽のやうな薄い紬も裁ちかへてしまつてある（源氏の歌に「朽ちにける一とあるのをうけて君の心がかはつてゐるといふ意味をひびかせたものゝ）夏衣を返へすのを見ても泣けてくる（形見の品をかへすといふ事は絶縁のしるしであるから）。

思へど どう考へても、不思議に空蟬は人と違つた强情で遂に自分から遠ざかつてしまつた事よと。

過ぎにしも 死んだ夕顔も今別れゆく空蟬も、二人共にそれぞれ何處とも知らず自分から離れていつてしまつた秋の暮ではある。

伊豫介（は）、神無月の朔日頃に（ぞ）くだ（りけ）る。女房の下らむにとて、たむけ、心殊に（源氏から特別に贈つた餞別を）せさせ給ふ。又うち〳〵にもわざとし給ひて、こまやかに（上品に）をかし（風流な恰好の）きさまなる櫛扇多くして、かの（脱ぎ捨ての）小袿もつかはす。

源氏 逢ふまでの形見許りと見し程にひたすら紬の朽ちにける哉

こまやかなる事どもあれど（も）、うるさければ書かず。（此處には記さぬ）御使歸り（源氏からの使は歸つたが）にけれど、小君して小袿の御返り（さと）ばかりは聞えさせたり。（空蟬から源氏に作つたやうに立涙にして）

（小袿は夏のなれば又衣がへのも旅のきぬにてぞありける）

源氏 蟬の羽もたちかへてけり夏衣返すを見てもねは泣かれけり

思へど（ば）、あやし（く）う人に似ぬ心强さにても振り離れぬるかな、と（源氏が）思ひつづけ（られ）給ふ。今日ぞ立冬の日冬立つ日なりけるもしるく、（いつしか）うちしぐれて（時雨）空の氣色いとあはれなり。ながめ暮し給ひて、

源氏 過ぎにしも今日別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮かな

などか御門の いくら皇子だからといつて、その行爲を事實見て居る人までが、なぜ缺點もないものゝやうにほめ立てるのかと。

作り事めきて この物語を作り話のやうにいひたてる人があつたので、一切を殘らず書いたのだ。併しあまり口がわるいといふ非難は免れない。

なほかく人知れぬ事は苦しかりけり、と思し知りぬらむかし。（秘密の戀は隱滅した事だらう）

かやうのくだ〳〵しき事は、あながちに隱ろへ忍び給ひしも（源氏が强ひて内密にして居たのも氣の毒で）いとほしくて、皆漏らしとどめたるを、「など御門の御子ならむからに、見む人さへ、ちなる」と（世人も見聞き）ばなむ。あまり物いひさがなき罪さりどころなく（事多かりとなん）。

（書き漏らしたのだが）

（をこがましく）かたほならず物ほめが（を）

（と本には）

（やう）作り事めきて取りなす人物し給ひけれ

若案

源氏十七歳の三月より冬までの事見えたり。

わらはやみ　瘧病。おこり。

北山　京都の北方に在る山。

なにがし寺　舊註には鞍馬寺をこれに擬する。

やがてとどむるたぐひ　直に祈禱して直す例が澤山あつた。

うたて侍るを　よくないから。

疾くこそ　早く北山の聖に祈禱させて見るがよからう。

いかがはせむ　それなら爲方がない。私がそちらへ行かう。

やや深う入る所　聖の居所は山深く分け入る所であつた。

山の櫻はまださかりにて　玉葉春下躬恒一里は皆散り果てにしを足引の山の櫻はまだ盛なり」

かかるありさま　「かかる御ありきもならひ給はぬ」とある河内本がよい。

所せき　自由に出あるきの出來ぬ窮屈な身故。

源氏がわらはやみに煩ひ給ひて、よろづにまじなひ、加持なンどせさせ給へど、しるし・なくて、あまた度起り給へ・ば、ある人の申すやう、「北山になむ、なにがし寺といふ所に・・、・・かしこき行人侍る。去年の夏も世・・に瘧病がおこりて、人々まじなひやがてとどむるたぐひあまた侍りき。ししこらわづらひしを、北山の聖は直に召しつる時・は、うたて・・侍るを、疾くこそ試みさせ給はめ」聖に聖を召しにつかはしたるに、聖「老いかがまりなど聞ゆ・・・れば、聖を召しにつかはしたるに、聖「老いかがまりて、室の外にもまかンで侍らぬ由と申し・たれば、源「いかがはせむ・・忍びて物せむ」と宣ひて、御供に、睦まじき・四五人ばかりして、まだ曉におはす・・。

やや深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花ざかりは皆過ぎにけり・。山の櫻はまださかりにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひも、風流にをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひ給はず、所せき御身にて、源氏は珍らしうおぼされけり。

聖 上の「かしこき行人」の事。

雖とも知らせ給はず 源氏の忍び給ふさま。

しるき御さまなれば 貴人である事明かな御風采故。

一日 先日私をお召し下さつた方でせうか。

驗方の行ひ 加持祈禱などいふ效驗を目的とした行法。即ち現世利益を祈る修驗道。

いかでか斯う どうして態々おいで下さつたのでせう。

さるべきもの 効驗のあるべき御符など。

高き所にて 聖の住所は。

たゞ此の すぐ近くの。

同じ小柴 他と同樣な小柴垣だが。柴は木竹の小枝である。

うるはしうしわたして きちんと構へて。

心恥かしき人 氣恥かしさを覺える人。僧都をさしていふ。先方が美しいとか高德であるとか貴人であるといふ場合には、その人に對してこちらが氣恥かしさを感ずる。それを心恥かしと

寺のさまもいとあはれなり。峯高く・深きいはのなかにぞ聖入り・居たりける。のぼり給ひて、誰とも知らせ給はず、いといたうやつれ給へれど、しるき御・・さまなれば、・・・・・・・・・見奉りけん・・聖「あなかしこや。一日召し侍りしにやおはしますらむ。私は老年故今は來世の事を專らとしてこの世の事を思ひ給へねば、驗方の行ひも捨て忘れ・て侍るを、いかでか斯うおはしまし・つらむ」と、驚き騷ぎ・、うちゑみつつ見奉る。いと尊き大德・・・・なりけり。さるべきもの作りて飲ませすかせ奉る。加持など參る程、・・・日高くさしあがりぬ。すこし立ち出でつつ見わたし給へば、高き所にて、ここかしこ・の僧坊どもあらはに見おろさるる。源「たゞ此のつづら道の曲折して居る所をりの下に、同じ小柴・なれど、うるはしうしわたして、清げなる屋・・廊などつづけて、木立いとよ趣あるは・・・・・・・・、何人の住むにか・・」と問ひ給へば、御供なる人、「これなむなにがし僧都の、この二年こもり侍る坊に侍るなる」・・・と聞ゆ・・源「心恥かしき人・住

闕きもこそすれ 僧都が源氏の來た事を聞きつけるかも知れぬが困つた事だ。

閼伽奉り 佛に。閼伽は水。

女子 「をんなご」と讀む。

とかう なにかと氣を紛らかして。

うしろの山 聖の岩窟の後ろの山。

そこはかとなう どことなく霞み渡つて居る樣子は。

心に思ひ殘すこと 雜念をすべて拂ひながして、すがすがしい事だらう。

これはいと淺く こゝはまだ山が淺うございます。

人の國 京に對して地方又田舍などの意。

御繪いみじう 源氏が繪に上達なさる事だらう。源氏の言葉に「繪によく似たるかな」とあるのを受けていつた言葉である。

むなる所にこそあンなれ。あやしうも、あまりやつし・けるかな。聞き・・もこそすれ」など宣ふ・・。清げなる童・などあり、花折りなどするもあらはに見ゆ。供「また出で來て、閼伽奉り、女をかしこに・女こそありけれ。僧都はよもさやうには据ゑ給はじを、いかなる人・ならむ」と口々いふ。おりてのぞくもあり。供「をかしげなる女子・ども、若き童べなむ見ゆる」・といふ。源氏君は行ひし給ひつつ、日たくるままに、病氣はどうかと心配せぬ方がよいいかならむと思したるを、供「とかうまぎらはさせ給ひて、おもほし入れぬなむよく侍る」と聞ゆれば、源氏うしろの山に立ちいでて、京の方を見・・給ふ。源「はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれる程、繪にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ殘す事はあらじかし」と宣へば、供「これはいと淺く侍り。人の國などに侍る海山の有樣などを御覽ぜさせて侍らば、田舍いかに御繪いみじうまさらせ給はむ。富士の山、なにがしの嶽」

なほ殊に侍れ　やはり他とは違つて美しい。**何のいたり深き隈**　目のとじかぬやうな隅々があつて奥ゆかしい深い感じを與へるやうな景色はないけれども。**かの國の前の守新發意**　播磨の前國司で今は入道してゐる人。これを明石入道といふ。**いたし**　引きつけられながら手のとどかぬ意。**大臣の後にて**　明石入道の事。**申し賜はれりける司**　播磨守は入道自身が願ひ出て頂戴した役ではあるが。**すこし奥まりたる**　出家の身は山深く隱棲するのが常であるのに。**さる海面にで居るのは。**　人繁い海邊に住んで居るのは。**さも人の**　出家の人が籠居するのに適當な所も有るものの。**かつは**　海邊に住んで居るもう一つの理由は。

など語り聞ゆるもあり。また西の國の面白き浦々磯のうへをいひつづくるもありて、よろづにまぎらはし聞ゆ。良清「近きところには、播磨の明石の浦こそ、なほ殊に侍れ。何のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてを見わたしたる程なむ、あやしく異所に似ず、ゆほびかなる所に侍る。播磨かの國の前の守新發意の、むすめかづき・たるいへ、いといたしかし。大臣の御のちにて、出世もすべきかりける人の、世のひがものにて、宮仕へせずまじらひもせず、近衛の中將を捨てて、申し賜はれりける司なれど、播磨かの國の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか又都にもかへらむ』といひて、頭もおろし侍りにけるを、すこし奥まりたる山住もせで、さる海面に出で居たる、非常識のひが〳〵しきやうなれど、げにかの國播磨の内に、さも人のこもり居ぬべき所々もありながら、深き里は、人ばなれ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれ

有樣見給へに　明石入道の樣子見に。**京にてこそ**　京では不遇のやうであつたが。**そこら遙に**　廣大な地所を占めて、邸宅を莊嚴に構へてゐる樣子は、何といつても、國守の威光を以てしておいた爲事故、餘命を裕福に送る準備も無類にしておいた。「いかめしう」は「作れる」を修飾し、「しめて」を修飾するのではない。**後の世の勤め**　極樂往生を祈る勤行。**法師まさり**　法師となつて却て人柄のまさる事。**けしうはあらず**「かたち心ばせなどけしうはあらず侍るなり」といふ意。**用意殊にして**　格別の心づかひを以て。**この人一人に**　子供はこの娘一人だ。後にその名を明石上という。**思ふさま殊なり**　この娘については特別の考を持つてゐる。

る家でするすまひになむ侍る。先頃さいつごろ、播磨にまかり下りて侍りしついでに、有樣見給へに、そところ得ぬやうなりけれ、そこら遙にいかめしうしめて作れるさま、いと珍らしく、さはいへど、國の司にてしおきける事なれば、多かりけれ、殘りの齡ゆたかに經べき心構へも、二なくしたりけり。後の世の勤めも、いとよくして、即つてなか〳〵法師まさりしたる人になむ侍りける」と申せば、源「さてそのむすめは」と問ひ給ふ。良清「けしうはあらず、こまかには知り給へず、かたち心ばせなど侍るなり。代々の國の司など、用意殊にして、聞になりたいといふ心持を示すさる心ばへ見すなれど、更に人道にうけ引かず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人一人にこそあれ、國司などいふつまらぬ身分に思ふさま殊なり。もし我に私の死後に立身の素志を遂げずおくれてその志とげず、この思ひおきつる宿世たがはば、海に入りね』と、常に遺言しおきて侍る」など聞ゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々、「海龍王の

心高さ苦しや 入道の氣位の高さがつらい。

冠得たる 從五位下に敍すること。この男を良清といふ。

かの入道の遺言 良清はかの入道の遺言を反故にして娘を自分のものにしようといふ心があるのだらう。それで其家に近寄るのだらう。

さいふとも 氣位は高く構へて居つても。

母こそ 母親だけは由緒ある人だらうけれども。かういふ語勢で修飾語に用ひられる時は被修飾語の前に、即ち「をさなくより」の前に置かれるのが普通である。

類に觸れつつ 縁を辿つてつれて來て、見る目もまばゆい程に娘の世話をして居る。

なさけなき人に 今の國守は理解がある人だけれど、今後來る國守が心の無い人だつたら、その娘をおくまい。なさけなき人」を娘と解く說が近來有るけれど、それでは河内本は解けない。こゝは河内本を參酌して舊說のやうに解かなければならぬ。

何心ありて 入道はどういふ積りで海の底に沈めとまで思ひこんだのだらう。餘り御大層で、世間體が不體裁だ。以下供人の心の中。

かやうにても 以下供人の心の中。

なべてならず 源氏といふ人は並外れの一風變つた事を好みなさる方故、この娘にお耳がとまる事だらうと人々は思つた。

瘧病は

后になるべきいつきむすめなン。なり。心高さ苦しや」とて笑ふ。

今の話をした人は

かくいふは、播磨の守の子の、藏人より今年冠得たるなりけり。

良淸は好色者故

供「いとすきたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらむかし。さてたたずみ寄るならむ」といひあへり。

供「いでや、さいふとも田舍びたらむ。をさなくよりさる所に生ひ出でて、若式な ふるめいたる親にのみ隨ひたらむ。

は。母こそゆゑあるべけれ。よき若人童など、都のやんごとなき所々に劣らず。

となき所々より、類に觸れつつ尋ね取りて、

になり。ゆかば、さて心やすくてしもえ置きたらじをや」などいふもあり。君は、「何心ありて海の底まで深う思ひ入るらむ。

見る目と海松布の掛詞

底のみるめも物むつかしう」など宣ひて、ただならずおもほしたり。かやうにても、なべてならずもてひがみたる事を好み給ふ御心なれば、御耳とどまらむや、と見奉る。

御物怪など加はれる 瘧病の外に憑物などもついて居るやうですから。

斯かる旅寢も 源氏は旅寢の經驗もあまりない事故、淋しい山中だがそれでも面白く感じて、では明朝歸らうと仰しやる。

人々はかへし給ひて 人目を忍ぶ爲である。

ただこの西面に ついすぐ前の西面の部屋に。

持佛 常住傍に安置して信仰する佛。

中の柱 中柱。室内の柱。

に

供「暮れかかりぬれど、瘧病がおこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ。今は はや 京に歸らせ給ひなむ」とあるを、大德、「御物怪など加はれるさまにおはしましける」を、今宵はなほ靜に加持申す。明日お歸りなさいでさせ給へ」と申す。「さもある事」と皆人源「さらば曉に」と宣ふ。

日もいと長きに、つれ〴〵なれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、僧都の坊の小柴垣のもとに源氏が立ち出で給ふ。人々は皆聖の坊にかへし給ひて、惟光ばかり御供にて、僧都の坊をのぞき給へば、ただ此の西面にしも、持佛する奉りて、行ふ尼なりけり。紫上の祖母簾垂すこし上げて、あげて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に經を置きて、いとなやましげに讀み居たる尼君、ただびととは見えず。四十あまりばかりにて、少し痩せたれど、いと白く上品であてに、痩せた

髪のうつくしげにそがれ 尼は髪を剃らずに肩のあたりで切り揃へてある。

出て入りあそぶ 西面の部屋を出たり入つたりして遊ぶ子供の中に。

白き衣山吹などの 白い下着に山吹襲の上着の著ふるして糊氣のなくなつたのを著て。山吹襲は花山吹に同じく表は薄朽葉に裏は黄。

生ひ先見えて 生長後美人になる事が今から豫想されて。

いぬき 紫上に事へる童女の名前。

伏籠 伏せて上に衣を覆うて暖め又は内に香を薫じて衣にたきしめるのに用ひる籠。

例の心なし 例の不注意者。いぬきの事をいふ。

烏なども 烏などが見つけると大變だ。

れど、つらつき・ふくらかに、まみの程、髪のうつくしげにそがれたる末も、なか〳〵長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。清げなる大人二人ばかり、さてはわらはべぞ出で入りあそぶなかに、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる著て、走り來たるをんなご、あまたの見えつる子どもに似るべくもあらず。いみじう生ひ先見えて愛しげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆら〳〵としてて、顔はいと赤くすりなして立てり。尼「何事ぞや。童べと腹立ち給へるか」とて、尼君の見あげたるに、すこし覺えたる所あれば、子なめりと見給ふ。子「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人、「例の心なしの、斯かるわざをしてさいなまるるこそいと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとほしうやう〳〵なりつるものを。烏など

目やすき 見苦しくない女。

この子 紫上。

いであなさなや ほんにまあねんねだと。以下紫上をたしなめる詞。

おのが斯く 私がこんなに今日明日に迫つて居る命を何とも思ひなさらないで。

程よ 考の幼稚なことよの意。

罪得る事ぞ 生物をとるのは。

こちや こつちへ入らつしやいよ。

まゆのわたり 眉毛が薄く生えてゐる樣で、遠山を思はせると云ふ意であらう。河内本「まみ」とあるのは誤であらう。「まみ」では「うちけぶり」を解くことが出來ない。强ひて解けば「ほのりと紅色がさしてゐる」とも言はねばならぬが、それでは「うちけぶり」が無理である。

かんざし 髪の樣子。

ねびゆかむ 成人してゆく。

さるはは 「目とまる」とはいふものの、畢竟藤壺に似てゐる點が目をひくのだの意。

かばかりに 紫上位の年輩になればこんなに子供らしくない人もあるのに。

故姫君 尼君の娘で紫上の母。

もこそ見つくれ」とて立ちゆく。髪ゆるらかにいと長く、目やすき人なめり。少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いであなをさなや。いふかひなう。物し給ふかな。おのが斯く今日明日になりぬる命をば、何とも思はしたらで、雀慕ひ給ふ程よ。罪得る事ぞと常に聞ゆるを、心憂く」とて、尼「こちや」といへば、ついゐたり。つらつき・・・いとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる・・・額つきかんざし、いみじううつくし。ねびゆかむ・・さまゆかしき人かな、と目・とまり給ふ。さるは・、限りなく心を盡し聞ゆる人に、いとよう似奉れ・るがまもらるるなりけり、と思ふにも、涙ぞおつ・る。尼君、髪をかき撫でつつ、尼「けづる事をもうるさがり・給へど、をかしの御髪や。いとはかなう物し給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いと斯からぬ人もあるものを。

殿 尼君の夫按察大納言。

いかで世に どうして生きて行かれる事でせう。

いみじう泣くぎ 頻に泣く尼君の樣を源氏が見るにつけても。

すずろに悲し 源氏はどうした譯かよく分らないけれども、尼君の樣子に思はずほろりとさせられる。

おひ立たむ 將來どうなるか分らぬ紫上を殘しては、私は安心して死ねない。

また居たる 少納言の外のもう一人の年輩の女房。

初草の 紫上の將來も見屆けずに、何で死なうなどいふ氣になるのでせう。

今日しも 今日にかぎつて。

故姫君は、十二にて殿に おくれ給ひし程、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。只今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじう泣くを見給ふも、源氏の心にすずろに悲し。紫上のをさな心地にも、さすがに尼君をうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つや〳〵とめでたう見ゆ。

尼君おひ立たむ在處も知らぬ若草紫上の事をおくらす露ぞ消えむ空なきまた居たる大人、尤の事とげにとうち泣きて、

紫上の事初草の生ひゆく末も知らぬまに爭か露の消えむとすらむ

と聞ゆる程に、僧都あなたより來て、僧「こなたは端近の處に外からよく見えすやゝ侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。高みの聖のかたに、源氏の中將の、瘧病平癒の祈禱わらはやみまじなひに物し給ひけるを、只今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、え知り侍らで、源氏を見舞に自分はここに侍りながら、御とぶらひにもまうでざりける」

かかるついでに 丁度こちらにおいでになつた好機會に源氏の姿を拜しませんか。

いで御せうそこ どれ源氏に御案内申しあげよう。

歸り給ひぬ 聖の庵に。

この好色者ども あの好色家達は。「この」は好色家を廣く指した語。

をかしうおぼす 源氏は外出に興味を持たれる。

程なき所 聖の庵は狹い所故。

と宣へば、尼「あなあいみじや。それは大變いとあやしきさまを人や見つらむ」とて、簾垂おろしつ。見苦しい樣子を僧「この世にのしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、人の御有樣なりいみじう世の憂へ忘れ、よはひ延ぶる心地する源氏の」とて立つ音すれば、源氏は歸り給ひぬ。源氏心あはれなる人を見つるかな、かかれば、この好色者どもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき美人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かくいとうつくしかりつるちごかな、何人ならむ、源氏心さても、思ひのほかなる事を見るよ、と、をかしうおぼす。藤壺紫上の事かの人の御かはりに、明暮の慰みにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

源氏が打臥し給へる程に、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。御せうそく聞ゆる寢た儘で程なき所なれば、君もやがて聞き給ふ。弟子「